

---

# ゼロ魔 主無き使い魔は魔法使いで錬金術師

ブラッディ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロ魔 主無き使い魔は魔法使いで錬金術師

### 【Nコード】

N8332M

### 【作者名】

ブラッディ

### 【あらすじ】

ただただ暇な中学3年生、俺（無論名前ではない）。

ある日、何の前触れも無く、俺はハガレンで有名な「真理の扉」に目をつけられてしまう。

何でもすべての世界をつなぐ架け橋でもある「真理」は、盛大にエネルギー無駄使いたいらしい。

方法は簡単、俺からある程度のもんをもっていき、それを超える価値のものをこちらが注文する、等価交換も何も無い取引。

受験勉強も嫌だし、諦めもいい俺は乗り気。

払う代価は「元の世界における俺の存在」。

俺の注文は「ハリポタ魔法とハガレン錬金術とその他持ってゼロ魔世界へ行きたい」　なんかチートな俺のハルケギニア記。

以下の点にご注意ください。

・これはあくまで「『ハリリー・ポッター』シリーズ」式魔法とアイテム幾つか、「鋼の錬金術師」式錬金術（ただしチート改造）、  
「仮面ライダーW」の地球の本棚（ただし魔改造）を持つ主人公が  
ゼロ魔世界で色々する物語です。「ゼロの使い魔」以外の原作キャラやストーリーは関わって来ません。

・「ゼロの使い魔」関連以外の用語は物語に絡んでくると作中で補足説明を入れるので、「ゼロの使い魔」さえ知っていれば割と読めると思います。まあその上で面白いかは別問題ですが。

・かなり頻繁に内容編集をするので、久しぶりに見たら文面がかなり違うという事態があります。

**ブローグ・等価交換はじめから破るなよ(前書き)**

デイクイドを待った方、すいません。  
何か入れちゃいました。

## プロローグ・等価交換はじめから破るなよ

フィクションの主人公つていいよね。

たとえば平賀氏はハーレムと世界を救う。

たとえばポッター氏は友達と世界を救う。

たとえばエルリック氏は兄弟と世界を救う。

たとえばヤマト氏は電波教祖様と裏切らせた親友と世界を救う。

たとえば夜神氏はノートで神になった。

結論いうと、限りある人生、一度はトンでもな事に巻き込まれて  
トンでもな事やってみたいよね。

実際に巻き込まれてみると普通に慰謝料ほしいよ？

よう、俺俺。なんか主人公つていいよねって、巻き込まれたいよ  
ねっていつてた奴さ。

うん、もう、普通に何これ。朝中学位こうとして制服に着替えて  
通学路を一人さびしく歩いてて、ふと見たカーブミラーに出現して  
た眼と目が合つてそこから出てきた黒い手によって吸い込まれて真  
っ白空間に扉ひとつとかマジ意味不だし。

まあ、あれだ、確かに俺は非日常いいなっと思ってたりもしたさ。  
何かに巻き込まれたいなっと思ってたさ。

でもね？今日の給食年一回の辛口カレーなんだぜ？辛党の俺が一  
年甘口に甘んじた褒美じゃないか。どうせなら明日でいいじゃない

か。

あとあれだ、俺みたいなこと思ってる奴ならそこらじゅう掃いて捨てるほどいるぜ？そこで俺？宝くじのほづがぶっちゃげ嬉しいんですけどねえ？

そしてあれだ、巻き込むならどこに巻き込まれるかもっとわかり易く願えねえかい？ハガレンなのゼロ魔なの龍騎なのはつきりしなさい。

あと説明者遅い。早いこと来んかい。

しかし帰りたいたいと思わん。この展開は帰れんパターンの奴だ。諦めがいいのが俺の特技。

あ、何か来た。

「よう、待たせたな」

「ああ、待ったから適当に説明終えて進ませろ」

現れたのは黒っぽいシルエツト。いわゆる「真理」いわゆる「神」いわゆる「一」いわゆる「全」。ハガレンですべての鍵を握るお方で、とつてもドS。「等価交換」、つまり売買みたいな法則に則る振りして人から命にかかわるモンとつといて碌なモンをよこさず「罰」とか言い出す詐欺師。

ふむ、テキストに説明聞いて慰謝料としてチート貰おうと思ったがこいつ相手だと何取られるか分からんでどうしようも無いな

「お前冷静だな。つてか帰りたいとは思わないのか？」  
「まあね。心残りはカレーだけ」  
「どんな寂しい人生だよ中3」  
「まあ受験めんどいし、日々つまらんし」  
「ああそつ。じゃあ、お望み通り説明して差し上げようかね」

それから小一時間説明された。

要約すると

・人を「一」とすれば国は「全」、国を「一」とすれば星は「全」、星を「一」とすれば宇宙は「全」、宇宙を「一」とすればそれを内包する世界は「全」、世界を「一」とすれば…つてな無限ループの考え方から、「真理」において、全てはつながっている。

・世界と世界をつなぐのは呼ばれ方がどうあれすべてが「真理の扉」。ゼロ魔のサモン・サーヴァントや「世界扉」、十年目ライダーの銀のオーロラ、某カードゲーム漫画（厳密には違うけど）の冥界の扉など、枚挙にいとまがない。

・それら世界は、とる選択肢でパラレルワールド式に無限に増えるが、同一固体に使うエネルギーは統べて一度に集約される。例えばゼロ魔はたくさん二次作があるが、そのすべてが「真理」の上に存在し、それにおいてサイトは無限に召喚されるが、使われるエネルギーは一番初め（原作）の一度のみ。

・エネルギーは自己充填式。

・「真理」は最近でかい対価による世界移動がなくてエネルギーが余り気味。

・このままではエネルギーが爆発して世界が減んでしまう。

・そこで「真理」は考えた。「そつだ、ある程度の代価を貰った後、それをはるかに越えるぐらい色々要求にこたえてエネルギーを使ってしまおう」。

・で、俺と目が合ったから連れて来た。

まだ色々言われたがもう知らん。多分覚えとけばいいのはそのくらいだ。

「よし待て、今この瞬間にもチート転生なんてバカスカやってんじやねえの？ エネルギーとかそんなもんガンガン消費できてんじやねえの？ すべてのチートな皆様に大変失礼だ、謝りなさい」

「いやそういうんじゃないやねえんだ。なんつーの、部署の違い？」

「わけわかんねーよ。いましてが”全ては繋がっている”とか言っというて部署の違いとか主張してんじやねーよ。それなら最初っから暇つぶしって言われたほうがまだ理解できるわ」

「や、なんていうかな〜その、ん〜例えばバカデカイ会社があつてだな、末端の方は痩せてても社長はぶくぶくに太ってたりするじゃんか。あの感じ？」

「話し聞いた限りじゃ社長が人力発電とかして全部回してるイメージだったんだけどな、俺は」

「あ〜…ん〜、ま、めんどくせーしもういいや。下等なお前には俺みたいな高等な奴の事情は分からないんだっつーことで」

「なあ、もう暇つぶしですって素直に言えや。別に責めないし怒らないからほら、お兄さんについてみて？ 言ってみれば楽になるからほら、な？ 嘘ついてその嘘隠すためにまたデカイ嘘吐いちゃうタイプなんだよな？ わかる、わかるよ、お兄さん分かってるから。さ、吐いて楽になっちまおう？」

「何様だデメエはアアアアアアッ！！？ たかだか14、5ぐれえしか生きてねえ奴がデカイ口をきいてんじやねエエエエッ！？！ なにお兄さんだくおらアアアアアッ！！」

「…すまん、取り乱した」

「高等な存在にしては懐の小せえ御仁でいらっしやってやがります  
ようで」

「しょうがねえだろ、『真理』ってのは人によって大なり小なり違  
うもんだ。さっきの醜態がおまえ自身の『真理』心理なんだよ」

「へえ、やなこと聞いた。で？俺から対価取るって何がほしい？」

「簡単なことだ。お前の生きてきたほとんどもらう」

……は？

「つまり、元の世界のすべてからお前にまつわる記憶、記録、痕跡、  
功績全てを『もらう』。おまえ自身の記憶、いやむしろ認識からお  
まえがこれまで使ってきた名前を『もらう』。おまえのこれまで生  
きてきたその冴えないルックスを『もらう』『これまでのお前』を  
『もらう』」

なる。つまり元の世界で俺が生きてきた証は俺の頭の中だけに  
なるつつう事ですな。この場合の『もらう』はこちら主観的には「  
消える」ということだ。俺が消えることこそが対価。そういうこと  
だ。

しかし、幸か不幸か俺は諦めがいい。いいよ、流石に惜しいがし  
ようがない。正々堂々「これまでの俺」は消えてやるよドチクシヨ  
ウめ。それよりも消えた先の俺、「新しい俺」の生活だ。つつうか  
これならあれやれるんじゃない？

「わかったもってけ。そのかわりとてもかっこいいルックスくれよ  
？」

「分あかつてるさあ。さて、お待ちかねの要求タイムだ！」

「いいんだな？ほんとに何でもいいんだな？」

「ああ、ほんとこいやあ！」

「じゃあ！そういうことならバンバンいくぜ！」

「じゃあとりあえず行き先はゼロ魔の世界な」

「了解。次は？」

「ハリポタ魔法とハガレン錬金術と仮面ライダーの地球の本棚・ゼロ魔、元の、ハガレン、ハリポタ世界対応版をくれ」

「ほう？なぜに？」

「ひそかな疑問だよ。気になってたんだ。その世界でこの魔法はどうじやるなど。あ、ハリポタ魔法は『姿くらまし』は失敗ありえない、『アバダ・ケダブラ』は成功ありえない、錬金術と本棚は簡単発動で頼む。あと普通に情報は大事だ」

「つつす。錬金術は手え合わせて結果をイメージするだけで使えるぜ、対応する脳機関を変えたからな。本棚は宣言な。次い」

「俺に合う魔法杖、魔法箒ファイアポルト、『炎の雷』、ペットに不死鳥、パークインズのテントの綺麗な普通の現代日本の平均的一軒家バージョン。家具完全配備、風呂も出る仕様。暖炉もつけとけよ？不死鳥用に。あとでかい倉庫室もな」

「おk。次」

「4人のホグワーツ創設者の品々」

「意外とガンガン来るな。まあいい。次」

「透明マント、トリステ学院対応版忍びの地図、ペンシープ憂いの篩、ハリポタ版賢者の石」

「ほう、ハガレン版賢者の石はいいのか？」

「いるか、あんなおっかないもん」

「あそ、次」

「元々あった俺の服・靴・寝具・最低限必要な身の回りの物全部。で、俺が今穿いているの含めてすべてのズボンの右ポケットに『検知不可能拡大呪文』を」

「あいよ。そんなんも考えるのか。まあいいや、次」

「アモルテンシニア魅惑万能薬、ベリタセラム真実薬、ポリジューズ薬、フエリッククス・フレイクダ幸運の液体、スケレ・ケロ煙突飛行粉、骨生え薬、生ける屍の水薬、ハナハツカ、ベゾアール石。全部、一日に1? ペットボトルいっぱい使っても200年持つ量で」

「重たいな。んで?」

「服は私室、不死鳥は暖炉、箒と靴は玄関、杖はこのズボンの左ポケット、日用品は然るべき所に、ほかはテントの倉庫室にいで、テントもばらして右ポケに入れておいてくれ」

「けっこうな消費だがそれが狙いだしな。ほかは?」

「まだ言ってるのか消費が狙いとか…ま、そうだな、あとは…召喚タイミングはサモン・サーヴァントが全員終わった後。立場は使えないじゃない使い魔。ルーンは「魔法使い」「錬金術師」「地球」的なもんで。以上!」

「よし確かに承った。じゃあそつちが先へ続いでるぜえ」

「真理」が言うつと後ろの扉がゆっくりと開く。中には大きな鏡がある。が、それを認識した瞬間鏡にひび割れのように縦線が入り、それが開くように「眼」が顕れる。そこから出た無数の黒い手が俺を引っ張り込もうとする。怖っ。

「やれやれ、行ってみますか。やりたいことは結構ある。でっきるっかな?」

「そんな一物を抱えつつ俺は、引っ張りこもうとする手を振り払い、自ら歩き出した……。」

名も無き少年の物語。火蓋は切って落とされた

## ブローグ・等価交換はじめから破るなよ（後書き）

さあ、全部知ってる方はこの時点で彼がどれだけチートか気がついたでしょう。

知らない方はまた今度説明しようと思います。

ではまた。 7 / 28 4 : 22 ブラッディ

編集 7 / 28 7 : 40 勢いで書いたからもっと編集するかもです。

## 安易に独り身選ぶと苦勞するよ

トリステイン魔法学校教師、ミスタ・コルベール。「炎蛇」の二つ名をもち、毛髪に乏しい彼はいま、深く深く安堵していた。

(今年も何とか全員契約出来てよかった……)

途中幾つかのトラブルはあったものの、一番心配していた、学院で「ゼロ」の哀称で蔑まれるミス・ルイズ・フランソワーズ・ブル・プラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢も、多少てこずったものの使い魔となるべき少年と契約を交わし、今はその少年と話し合っている。

生徒たちもそこで解散を始め、さて、疲れたし自分も戻ろうかな、と思っていた時。

長年の教員生活で聞きなれた口語コモンが厳かな声と旋律に乗って聞こえ、場に閃光が迸る。その閃光の中、巨大な目玉が地面に浮かび上がり

扉を抜けた俺は強烈な吐き気とともに召喚された。

そして目の前には見紛おう事なきハゲが見える。

この反応は……マズったな。

彼は周りの生徒さん方に何か非常にあせった顔で必死に語りかけていた。しかし如何せん言葉がさっぱり分からん。

まあ、突然誰もやってない『サモン・サーヴァント』が発動し、出たのが激レアの人間、それも同日に二人目となればそら焦るやろな。

すると、コルベールに誰かがハリセンで突っ込みを入れた。赤い髪、バカデカイ乳、なんつうかも制服がエロスの塊に見えてくる

女性……えっ？あなたはま、まさか……！

うん、どー見てもキュルケだ。まさかのキュルケだ。

なぜハリセン？ってか何だそれこの世界に有るの？ってかアంత  
この時には居たっけ？そしてそれはギャップ狙ったの？だったら夕  
バサにしるよ。キュルケだと何でもありそうだからあんた自身の奇  
抜な行動自体にはどう突っ込んでいいのか分からないっての。

心の中でひたすら突っ込んでいると、全身にとんでもない熱、と  
いうかそれ通り越して痛みを感じた。

来たあああああっ！超痛えっ！コントラクト・サーヴァント  
超痛え！！

体丸めて痛みには耐えながら前を見ると今度はキュルケも一緒にな  
って驚いた様子で突っ立っている。

まあそらそうだろ。誰もやってないのに何か契約されたんだしな。  
こいつらが慌てるから逆に冷静になって周りを見渡してみる。

あれ、若干痛みの涙で視界がボヤけてえらい事になってきた。

結局ボヤけた視界では何も見ることも叶わず痛みが止み、俺は周り  
の人々の声が理解できるようになった。

左ポケットの杖を取ってみる。人垣がざわめいた気がしたが、ま  
あいい。握った瞬間、ああ俺のなんだな、というフィット感を感じ  
た。ああ、何か使ってみたいなあ。ルーモスクらいならいいよね？  
……ん？静かになったな。顔を上げてみる。

わーお、穴が開くほど見つめられてるう。

「えーっと…その、コントラクト・サーヴァント、あーさっきのな  
んだけど大丈夫？」

ふむ、キュルケらしくもない無難かつ弱気な問いですな。  
さて、どうすべきだろ？如何にもわたしや物知りでいくか、無難  
にいくか。逡巡。して、

「ええ、まあ、はい、大丈夫です」

ええ、無難にいきましたとも。俺はそんなに大した人間ではない  
のだよ！あの綺麗な顔が何か威圧感を発していけねえ。  
と、コルベールが声をかけてきた。

「ええと、君の名前は？」

……御二方ともかなりお疲れのご様子だ。

で、聞かれて困る。本当に自分の名前が思い出せない。これ逆に  
すげんじゃない？普通名前を忘れるとか無いしね？  
とっさに出た名は

「俺はアスラン。アスラン・ロイ・フィリップス・ハリー・エ・ド・  
ヴォルデモート」

いや、もう突っ込みどこ満載だな。とりあえず一つ。アスラン？  
他はともかくなぜアスランが出た？

しかし、そう名乗った瞬間奇妙な、こう、パズルのまだ嵌っていない  
ピースが入るかのような、よく分からない何かを感じた。多分  
これが俺の名だと頭にインプットされたんだろうな。

にしても……気まずい。覚悟していたはずなのに、こう静かだと  
何か圧倒される。俺、静かなの嫌いなんだよね。……えーい逃げち  
やえ！両掌を合わせる。パンツと小気味のいい音が響く。

「とりあえず……」

地面に手をつき、地面を練成、俺とコルベール&キュルケの目の前に巨大な壁を作る。

その瞬間俺の頭ん中にはホントに出来た感動が渦巻く。

その直後俺は三つのことを考える。『どこへ、どうしても、どういう意図』で。つまり俺は今からハリポタ界のテレポートマジック、  
「姿くらまし」を使おうとしているのだ。

「さいならあつ」

「できるだけ見つかりにくい場所へ」「どうしてもここから逃げたい」「その場で回転し、無に入り込む感覚で」それらを考えながら回転する。

すると恐ろしいまでの圧迫感を感じた。マジだ。マジで身じろぎひとつ出来やしない、閉じた目が開けられない、息が出来ない。くそ、息吸っとくんだった！しかしそれは突然止み、はじけるように咳き込み、目を開ける俺。そこには結構デカイ木が幾本もたっていた。森の二画のようだった。

いやあ、よく成功したよな、どっちも。まあ成功するのが取引のひとつだったからだが。でなきゃ誰がやるかあんなモン。

「姿くらまし」は、『Destination(どこへ)、Determination(どうしても)、Deliberation(どういう意図で)』の「3D」を基本として、瞬間移動をする魔法だ。慣れると体の負荷も軽くなり、便利は便利だが、しくじると全くありえないとこに飛んだり、体の一部分が出発地点に置いていかれる作用「ばらけ」が起こる。たとえば隣の家まで飛ぶのに遙か彼方の駅まで飛ぶとか、足だけ瞬間移動の出発地点においてくるとかね。「3D」のどれか一つでも足りない起こるそうだが、俺

の「姿くらまし」は3つとも足りなかつたな。「どこへ」は知らんところだし、「どうしても」、は、半分ふざけてたしな。「どういう意図で」はもう足る足らないとかそれ以前の問題だし。事によると命に関わるぞあれば。

そしてハガレン錬金術。使うには本来恐ろしい脳内情報処理と複雑な練成陣が必要になる。が、簡略化された脳処理と容姿・名を持つていかれた俺の練成発動は、まったくの初心者でもプロ並みのものを可能としている。

練成陣は「力・時の循環を示す円」と「術師の知を示す構築式」を必要とするが、「真理」に「通行料」を払った者はその肉体・魂が構築式そのものとなり、合わせた手を円に見立てることで、己自身を練成陣とすることが出来る。つまり、「真理」を見た俺はいただきますのポーズで体が錬金術用の魔方陣になりますってこと。

そして、錬金術に凄まじい脳内情報処理が必要なのはハガレン錬金術の作業工程に大きな理由がある。

対象物質を「理解」、それを「分解」、最後に分解したのを「再構築」するのがハガレン錬金術の流れ。例えばさつき逃げるとき作った壁は、本来『材料の構成等を「理解』』、『適量を一度粉々に「分解』』、『粉々の、地面だったそれを壁の形に「再構築』』』という流れだが、それらを『掌を合わせ、対象に触れ、閃光が走り』の間でやらねばならず、本来の俺なら頭がパンクして終わりだ。

が、あのチート取引のおかげでそれもいらなくなつた。「理解・分解・再構築」をするのが「知能」から「本能」に変わったため、脳が自動処理をしてくれるのだ。って、何でこんなすらすらと自分の状態が出てくるんだ？まあいいか。どのみち脳が疲れることは変わらない。よって寝たい。

俺は杖を掲げ、そのあたりをぐるぐる回りながら術をかけ始めた。

「サルビオ ヘクシア 呪いを避けよ、プロテゴ・トタラム 万全の守り、マフリアート 耳塞ぎ、カーベ イニミカム 敵を警戒せよ…あれ、「目くらまし呪文」って原作は出てたっけ？」

唱えたのはたぶん発動したはずだ。空間がゆがんだように一瞬見えたから。

ちなみにここまで唱えた呪文は効果は読んで字のごとく。「<sup>マフリ</sup>耳塞ぎ」は防音効果だよ。「レペロ マグルタム マグルを避けよ」も使おうと思ったが、ここにいるキャラにマグル≠非魔法族はサイト、シエスタ、マルトー、その他のモブくらいなもんだ…が…衛兵に見つかったら怖いな。使っところ。

んー、あ、「目くらまし呪文」は登場回は全部無言呪文だったなそういえば。なるほど、知らんわけだ。

俺はひとり納得して杖を右ポケットに突っ込む。右ポケットは中が倉庫街並みに広くなってるので、杖といわず手首といわず、肘まで入ったところで呪文を唱え、すばやく引き上げる。

「アクシオ テントよ来い」

右ポケットから一纏めにしたテントが飛び出す。それを木陰におき、テントに向かい、杖先で8の字を描く動きをする。そして、ピュッとテントに杖を向け、

「エレクト！ 立て！」

と唱えた。するとまあ、ものすごいスピードでテントが立つ。

うん、若干曲がっちゃったがまあ入れればいいし。

「よし、入居」

テントに入る。

テントの中

くそう、「真理」め、無駄な気遣いを……。

中は俺が元の世界で住んでた家に酷似していた。ってか絶対我が家だ。

このテント、ハリポタ4巻と7巻で出たもので、外見上は人が3人寝るのが限度程度のテントだが、中は色々な魔法で家屋並みになっており、原作ではちよつと臭く、ちよつと古いアパートのようになっていた。

俺は普通の一軒家のバージョンを注文した。使い主が無いから誰かの部屋に止めてもらうのはあれだから注文したが……。  
奴め、こつしんつついつうつのを注文したわけじゃないぞ。

その後すべての部屋を見て回ったが、完全に俺の家だった。水道もガスも電気もつながっていた。が、俺の使うことの無いものは綺麗に片付けられていた。両親、妹、兄……。

あの人たちは俺がこつやつつつてることどころか俺の存在を知らないんだよな……。

妙な疲労感が俺を支配し、俺は寝間着に着替え、すぐに寝てしまった。

「ふーむ。今年は大変じゃの。どう思う、ミス・ロングビル？」  
「まずは早くセクハラと仕事を終わらせてほしいと思いますね、オ  
ールド・オスマン。でないと秘書のわたくしも寝れませんので」

キレかかっているかのように震えた声でロングビルは、「遠見の  
鏡」を覗き込む、この始末の悪い校長の問いに答えた。

**安易に独り身選ぶと苦労するよ（後書き）**

はい、投稿です。

今回ハガレン錬金術と姿くらしが出てきて、その説明を入れておきました。ハリポタとハガレンをあまり知らない方への配慮です。この先もそういうのが出てきたら入れていきます。長ったらしいですがお願いしますね。

原作キャラエンカウント二人。

次も一匹出会い、次にバトル・・・。

流れは決まってるのに文に出来ないのがブラッディクオリティ。根気強くお付き合いください。

7 / 2 8      1 2 : 2 5      ブラッディ

食い物欲しけりや「呼びよせ」を、友達欲しけりや人質を（前書き）

シルフィ好きよ、許せ。

食い物欲しけりゃ「呼びよせ」を、友達欲しけりゃ人質を

いつもと同じようで何かが違う家具の並ぶ、いつもと同じようで何かが違う部屋に敷かれた、いつもと同じようで何かが違う布団の中で俺は目を覚ました、

薄ぼんやりとした頭で俺は考えていた。もちろん「夢ならよかつたな」とかありがちな事じゃねえよ。

昨日学校行こうとしたら真理に目をつけられ、真理の扉を通過、何やかんやでデカイ壁初練成に、姿くらまし、魔法6つほど。…ふむ、気絶するように寝て道理ですわな。

さて、如何致そうか。

ここは見た感じ家そのものになってはいるが、所詮テントなので窓が窓として機能していない。よって今が朝か昼か夕方か夜かも分からない。時計もアナログなので役に立たない。そして俺は何時間寝ていたのかさっぱり分からない。多分普通に6、7時間だろうが下手をすると一巻終わってる可能性すらある。

思えば昨日のあのキュルケとコルベルに対する対応はまずかつた。この先どうしようかなあ。絶対警戒されてるもんなあ。

でも、ルイズの自爆は実際どんなものかとか、サイトvsギーシユの風景とか、迫られてたじたじのサイトとか見てみたいしなあ。

どうすっかなあ。出ようか出まいか…。

善俺「何を言っているんだ。考えるんだ、君が彼らとともにある姿を！」

悪俺「おいおい、初エンカウントは印象すら与えられなかったじやねえか。いまさらのこのこ出たってたって同じさ。あきらめてそこで大人しくしてな」

冷静俺「でもよう、普通に寝てただけだとして、ぶっちゃけこれからあいつらに絡んでいけるイベントって、サイトvsギーシユぐらいだろ？でもそれは昼なんだからそれまでゴロゴロしてりゃ良い



霊する「ぐーきゆるるー」的な音。静けさや 壁に染み入る 腹の虫。ああ、バカあ。

まあそうだよな。昨日食ったのはパン一枚。それで扉の通過に各種魔法行使。道理だな。

何かないかとそこらへんを探してみるが、何も無い。ってことで一応着替えて外に出てみる。

そこは、朝靄に包まれ、空は夜明け前の神秘的な、有り体によえば中途半端な青色をしていた。うん、どー考えても夜明け前だね。冷たい空気を吸い込めば、熱くなった頭も冷え、とりあえず日にちを知りたいと思えてきた。そのためには「検索」だな

俺はテントに戻ると「呼び寄せ呪文<sup>アクシオ</sup>」で「透明マント」をとり、また外へ出た。「透明マント」とは、呼んで字のごとく、被ると透明になれるマントだ。

俺はその美しい銀色と「水よりも軽く、絹よりも滑らか」と称された手触りを堪能し、それを頭から被った。マント越しなのにかなりクリアに外が見えるんだな。

俺は脚を肩幅に開き、両腕を軽く開き、顔は軽く上を向く。多分ポーズに意味は無かるうが、元の方がこうしてるから気分的にね。

…さて、発動条件は宣言だったかな。

「さあ、検索を始めよう」

すると俺は無数に本棚の並ぶ、真っ白の空間にいた。

「地球の本棚<sup>ほし</sup>」。

仮面ライダーWの準主人公・フィリップの精神世界にある、「地球

の記憶」を情報とした、世界一の情報バンク。真っ白な空間に無数の本棚が並んでおり、それらが「地球の記憶」のデータベースとなっている。

使用者がキーワードを唱えると、自動的に本が選抜されていき、そのワードに適した情報が入った本に絞り込むことができる。この一連の作用を「検索」という。

ただし万能ではなく、情報が無ければ本を絞れず、個人に関する本でもその感情に関する情報はない上に、中身が全て破かれた様に削除されていたり、何かしらの都合で鍵が掛って閲覧できないものもある。

この世界に入っている間の使用者は一種のトランス状態だが会話は可能。また臨死状態など精神のみ活動する人間も、この世界に入ることができる。

それが、俺の貰った「地球の本棚」の全容だ。

ただし、俺が真理からもらったのは特別仕様で、「ゼロ魔世界」「ハガレン世界」「ハリポタ世界」「俺が元いた世界」の地球の記憶を見ることが出来る。情報は多く持つに越したことは無い。どこかで役立つだろうと思ってもらったが、こんなすぐに使えるときが来るとは。

ワクワクしながら唱えてみる。さあ、どうなる!?

「検索ワードは『ゼロ魔世界』『出来事』『トリスティン魔法学校』

昨日『  
」

言うにつれてどんどん本棚がフェードアウトしていくのを壮観だなあと思いつながらみているとその内一冊に絞られた。それを手に取り開く。昨日はガンダールヴが召喚されたらしい。okだ。俺は普通の時間寝ていたな。まあよく考えたらあのエセダンブルドア校長があんなテント放つとくわけ…おっと、テントは丸見えじゃん。」



通称「シルフィード」である。まあ「風韻竜」だと知る者はいないが。

ああ、ゴメンよシルフィード。君の朝食を俺が呼び寄せたばかりに君はそんな邪竜見たいな姿になってしまった。

と思っていたら、ちょっと思いついた。サイトとギーシユの決闘は昼。しかし、それまで明らかに俺は持たない。となればもう、無理やりにもだれかとながらなければならぬ。そこで、だ。

例えば俺がシルフィードをとつ捕まえてそれを人質にタバサに決闘を挑んだらどうだろう。勝てればタバサと、負けたとしても十中八九連行される研究所でエレオノールとつながれる可能性はある。

分も悪くないし、この霧の中ならさつき検索した練成陣で…勝機はある。

そこまで考え付いた俺は、シルフィードに杖を向けた。シルフィードよ、そのファンよ、すまん。

「シレンシオ！ 黙れ！、インカーセラス！ 縛れ！、ロコモーター・モルティス！ 足縛り！」

シルフィードは声が出なくなっただかと思つと翼をどこからか出現した縄で縛られ、更に四足が全てくつつき、追っていた速度のまま地面に落下した。

『ドズウウウウウンツ！ズザアアアアアアアアッ！』

つてなもんだ。

そして俺は掌を合わせると、俺のすぐそばまで滑ってきたシルフィードのすぐそばの地面に手をつき、首から上を残して竜の体を隙間無く覆い、それに「デューロ！ 固まれ！」と唱えた。これで拘

束完了。

まず始めの「黙らせ呪文<sup>シレンシオ</sup>」は、シルフィードの悲鳴をつぶすための魔法。現に彼女は何か言おうとしてパクパクと口を動かしているが、声のでていない。歌手にかけたら自殺するんだろうなあ。

で、「縄縛呪文<sup>インカーセラス</sup>」。これはどこからか現れた縄で相手を縛る魔法。これでシルフィードの翼を胴体に縛り付けた。これで飛べない。

しかし歩けるので、「足縛りの呪い<sup>ロコキタイ・モルティス</sup>」がいる。これは足同士をくっつけて歩けなくする魔法だ。手には効果が無いが、竜には前足後ろ足しかないので四肢拘束と同じだ。当然あのスピードで落っこちればこける。

仕上げに布ですら大の男二人の突撃をはね返す素材に出来る「硬化呪文<sup>ユロ</sup>」で竜を隙間無く覆った地面素材をコーティングすればチエックメイト。恐らく人状態になれば抜け出せるだろうが、そのときには他の手もあるのでよい。

ちょうど飛んできた肉を片手に首だけ出したシルフィードを見れば、怯えた様にこちらを見返してくる。一巻の挿絵ではバカデカイトカゲの顔してたな〜なんて。

しかし　ああああああああああ、その目が可愛い  
いいいいいいいいいいいい！もつと虐めたいが、少し微笑みかけて肉を竜の口近くに置く。

実は俺、こういう演技は得意で、微笑なんか十八番だ。これでどれだけの人を欺いてきたことが。

竜が肉を食うのを見ながら、さて、タバサはいつ来るかなと思っていたら、腹に、竜が大きな肉を食う風景を見て空腹が増した、我が人生他に類を見ない空きっ腹に不可視の重い一撃を貰い、吹き飛んだ。

意外に早く来たな　意識はてこでも手放さないぜ！ていうか、  
負けてもいいやとも思っていたが、考え直した。許さん！許さんぞ  
このまな板女！！必ず！必ずてめえだけはファンがなんと言おうと  
ぶっ飛ばす！！覚悟しやがれエエエエエエエエエエツ！

校長室

「あれ、なんかまずい展開になってきたの・・・あれ？ミス・ロン  
グビル？どこいったんじゃ？」

「遠見の鏡」からその出会いを見つめるエセダンブルドアに答え  
るものはいない。

食い物欲しけりや「呼びよせ」を、友達欲しけりや人質を（後書き）

さて次回はタバサとの決闘です。頑張れアスラン！！

・・・てか主人公の名前は本名は真理に取られたので今は「アスラン・ロイ・フリップス・ハリー・エ・ド・ヴォルデモート」です。仲間が増えると「アスラン」「ミスタ・ヴォルデモート」と呼ばれることもありますのでお忘れなきようお願い申し上げます。

## 友達作りに必要なのは「なんやかんや」の流れ

不可視の一撃を貰い宙を舞った俺。ドシャツと落下する。頭から多分だけ食らったのは「エア・ハンマー」の魔法じゃないかと思う。食らわせてきたのはまあ、言うまでもなかるう。むしろシルフィードを拘束した状態でギトーとかしゃしゃり出てきたら逆に笑えるよ。受け取り方によるだろうが、少なくとも俺は笑うね。

ゆっくりと起き上がる俺。体中がギギギと軋み、さっき落ちたとき頭打ったのと空腹がこたえて眩暈がする。

起き上がると襲撃者のほうを見る。…あれ？むしろ襲撃者って俺じゃね？まあいいか。

そこには、シルフィードを拘束している、「硬化呪文<sup>デューロ</sup>」のかかった地面の小山をコンコンと手に持つ「その身にしてはデカイ杖」で小突いている、ギリ小学生か中学生かくらい、服変えるだけで男にも見えてしまうようなボデイラインの、青い髪の毛のちっこいガキがいた。ありのまま言っただけだ！別にさっき一撃食らったから口悪く言っただんじやないやい！

そのおなじみの少女、本名「シャルロット・エレヌ・オルレアン」、通称「タバサ」は、こちらにメガネをかけた可愛い顔を向けると、その伏目がちな目に氷のような伶俐な光を宿して、

「何したの？」

とだけ言った。

本当はもう少しフレンドリーに行くつもりだったが、こいつは倒す。ぶっ倒す。ので、敵になっておく。

「さて、どうでしょう？なんなら自分で解いてみれば？留学生のシ  
ユヴァリエさん？」

というと、彼女は目を細める。そりゃそうだ。「シユヴァリエ」  
は親友キュルケにすら伝えていない事実だ。この学校で知っている  
のはまあ教師の一部だけだろう。

「解いて」

「フツ、やうだよ」解いてやらないよ」って言ったら？」

「…力づく」

「よろしい。ならば決闘だ」

言うや否やタバサは何事か呟き杖を振るい、こちらに魔法を飛ば  
した。が、甘い。

「プロテゴ！ 護れ！」

こちらには盾の呪文プロテゴがある！盾の呪文と接触したタバサの魔法は  
弾かれてはね返り、タバサに返る。タバサはそれを避ける。

「今度はこっちからだぜ！」

俺はタバサを中心に円を描くように駆け回り、タバサめがけて呪  
文を連発した。

ステューピファイ ベトリフィカス・トタルムベディメンタ  
「麻痺せよ！石になれ！妨害せよ！武器よ去れ！ステューピファイ  
！インペディメンタ！ベトリフィカス・トタルム！インペディメン  
タ！エクスペリアームス！」

が、タバサはそれら全てを体を捻ったり、別の術をぶつけて相殺

したりしながら器用に避ける。

くそ、チビって便利だなあ、オイ！

そして、息が切れこちらの呪文が止まった一瞬、タバサが俺の走行速度を計算でもしたのか、ジャスト俺の腹を貫けるところに氷の槍を放つ。つて、ええええ！？殺す気かい！

急ブレーキかけてもよけきれないか！なら！！

「コンフリンゴ！ 爆発せよ！」

地面に杖を向け、唱える。すると地面が爆発し、その爆風に吹っ飛ばされた俺は仰け反り、タバサの氷の槍をかわず。

しかしタバサもこちらに向かつて氷の槍を数多飛ばしてくる。わ

い十八番だ！。てめえやっぱ俺殺す気だろ！？

俺はとっさに掌を合わせ、手を地面につき、壁を練成する。氷の槍は「ドカドカドカドカドカドカドカ」と恐ろしい音と共に壁に刺さり、いくつかは貫けて、俺の目前で止まる。

俺はそのまま地面に練成陣を書く。

ん？攻撃が止んだ？と思いきや、壁の裏から音…？トントントントと軽く、音源は上っていく　　つて！

「上か！」

まさにその瞬間、壁を乗り越え、杖を振りかぶったタバサが躍り出た！奴め、壁に刺さった氷の槍を足場に壁を登ってきやがった！俺の杖とタバサの杖が互いを指す！

「ーサ・ウイン」

「ラングロック！」

やった！舌を口蓋に貼り付けてしまおう呪文「舌縛り」ラングロックが決まった！  
！つつかお前マジで俺殺そうとしたよね！？フザけんなよ！？  
詠唱を続けられなくなったタバサはそのまま着地する。その瞬間俺は先ほど描いた練成陣を発動する。その練成陣とは、水を操る練成陣。練成陣の範囲の靄を凍りつかせれば、タバサの動きも一瞬は止まる！そして、薄い氷に囚われて一瞬動きの止まったタバサに俺は呪文を唱える。

「エクスペリアームス 武器よ去れ」

武装解除呪文。赤い閃光がタバサに直撃し、タバサの手から杖が飛ぶ。チエックメイト！勝ったぜ！

「俺の勝ちだな、ガリアのシュヴァリエ」  
「っ……………」

おーくやしそ。ざまあ見る。…あれ、元々悪いの俺じゃなかったっけ？じゃなくて！

「じゃあ、俺の勝ちだから何かひとつ言うこと聞いてもらおうぞ」  
「……………」  
「なにその、えっ？って顔。ったりめーだろ。お前が勝ったら俺はあの韻竜を解放する。じゃあ、俺が勝っても何か景品的なものが必要だろ。あ、フィニート 終われ。これでお前の舌開放つと」

「…知ってるの？シルフィ」  
「だってシャウトしてたし」  
「ガーゴイル」  
「無理じゃボケ」  
「……………」

ものつそいシルフィードを見るタバサ。縮こまる首だけシルフィ

「じゃあ、聞いてもらうぞ、俺の言つこと」

「……」

「お前、俺の友達になれ」

ばっ！と、「え？まじで？」とばかりこちらを見るタバサ。

「……………」

「……………」

「うん、それだけ」

「…人付き合い下手？」

「お前が人に言うな」

「……………」

俺はシルフィードのところまで歩いて行き、そばにしゃがみ、こちらを見上げる竜に声をかける。

「悪かったな。状況的にも心境的にも友達作るの難しかったから人質にしちゃったぜ。今から呪文解くから。フィニート・インカンターテム 呪文よ終われ」

その瞬間、竜を拘束する小山にかけられた「硬化呪文」と、竜自身にかけられた「縄縛呪文」「足縛りの呪い」「黙らせ呪文」の4つがいつぺんに解け、自由に気づいたシルフィードはバツと立ち上がる。

「きゅい〜。体が動く〜声が出る〜すばらしいのね！」

「悪かったな、ほんと。でも寂しいのはご免だからな。そこを汲んで、どうかここはひとつ」

「いいのね！お姉さまにお友達が増えるのはとってもいいことなの

ね！きゅいきゅい！でもでもでも、お友達つてまさかとかパシリ  
そういう意味合いとか」

「じゃねえよ。あんなおっかないパシリいらんわい」

「ならいいのね」

「よくない」

バレてるのをいいことにここぞとばかり喋りまくるシルフィード。  
と、いつの間にかタバサが、俺がさつき「武装解除」した杖を持  
つて近くいた。俺からある程度距離を置いているのはご愛嬌。  
俺はとりあえず答える。

「なにが？つていうかいるならいるつて言え。ちょっと怖いから」

「シルフィ。バレた」

シルフィを見る目が鋭い。シルフィがあわてて言い訳するように  
言う。

「で、でででもでもお、お、おおおおねえさまだつてご、ご飯取  
られたらおこるのね！一緒なのね！」

「でもバレた」

「きゅいいいいいいいい！許してなのね！許してなのね！」

「…お仕置き」

「きゅいいいいいいいいいいいい！！！」

「…悪い、シルフィード。俺が悪かった。ほんとゴメン」

タバサが不意に俺のほうを見る。

「何者？」

「俺？俺は主無し使い魔」

「…火のないところに煙は立たぬ。使い主がいらないなら使い魔はい

ない」

ですよ。ってかそのことわざこっちにあったのか……。っとするとじゃあ、

「じゃあメイジじゃない魔法使い。兼錬金術師」

「…敵？味方？」

「そう聞かれると多分敵にしる味方にしる味方と答えるだろうが…残念ながら俺はお前のダチ」

「人質手段は？」

「いや、ただ人間関係に飢えて敵っばい手段を取っただけだ。信用していいぞ」

「なぜ私の事情を？」

「特殊部隊フェニックス隊をよろしく」

「ふざけるな」

「すまんかった。が、特殊な情報網があるのはマジだ。ってことでお前と俺はダチな」

「…迷惑、かつ危険」

「うるさい！人が人を求めることのどこがいけないんだ！大体“友達になつてくれ”に対して“迷惑”はひどい！ひどすぎる！」

「けど迷惑」

「…すいませんでした」

小学生にすら見える少女に頭を下げる俺。

と、なにやらタバサが視線をはずしながらつぶやいた。

「…タバサ」

「…ん？」

「名前。タバサ」

「へえ、友達の流れは知ってたんだな。俺はアスラン。アスラン・

ロイ・フィリップス・ハリー・エ・ド・ヴォルデモート。：長いな  
流石に。略すべきか」

「ふざけるな」

「いや。地図に無いほど西のほうの貴族だから」

ってことにしとこうかな。ちなみに、ハルケギニアはもろヨーロッパで、地球とするとずくと西に行けば最終的には日本に出るからこう言ったただけだ。

「そう」

「おう、よろしくな、タバサ」

「……」

こうして、俺にも人間関係が出来た。

「ふう、なんやかんやで丸く収まってよかったよかった。：にし  
ても、ミスタ・ヴォルデモート。彼の魔法はいいたい  
一人、オールド・オスマンは目を光らせた。」

友達作りに必要なのは「なんやかんや」の流れ（後書き）

なんかタバサのキャラ違い。

ところで密接に関連することなのですが、図書館でゼロ魔を見つけ、とりあえず一巻を借りました。残念なことに二巻〜五巻が貸し出し中という。本編に絡んでくる前に一度読みます。

お読みいただき、ありがとうございました。

## 状況を整理する事、必ずや己が身を救うであろう

さて、なんやかんやでタバサと友達になった俺。無理矢理したんだろとは言つな。

シルフィードが空へ飛び上がり、点になる様を見送りながら、俺はタバサから慎重に距離を取る。悪く思つな。そう思いながら空に杖を向ける。

空に「目くらまし呪文」を唱えた俺は、急にいなくなった俺を探してキヨロキヨロしているタバサを見て呪文の成功を確認し、テントにもどる。

テントの周囲数メートルの範囲は先程唱えた「目くらまし」に、先日唱えた「耳塞ぎ」<sup>マフリアート</sup>、「万全の護り」<sup>プロテクトタラム</sup>、「敵を警警戒せよ」<sup>カーベ</sup>、「呪いを避けよ」<sup>ヘクシア</sup>の呪文がかけてある。俺の魔法力に問題が無ければ、この周囲はほぼ見つかからない空間になっている。

テント、てか家に戻った俺はまず周囲を見渡す。ふむ、やはり周りがアニメ空間になつとる。

朝感じた違和感はこれだ。タバサという絵キャラに会ったことで違和感が決定的になつたらしい。

と、いうのは、決して相容れはしない三次元<sup>おれ</sup>と二次元<sup>キャラクター</sup>が混じった場合、どんな事態が発生するか。

この三次元世界の俺が二次元世界に迷い込んだ場合、3パターン<sup>パターン</sup>の事態が考えられる。

パターン1 俺が三次元のままで二次元世界を生きる

一番簡単だろうが、無いな。そんなもんアニメ絵に自分の写真貼るとおなじ。

この二次元世界の人間が三次元世界の人間見たら違和感どころでは無い。俺は確実に亜人扱いだ。なんらかのアクションをおこすだろう。

が、タバサにはその挙動が見られなかった。幾らタバサが感情表現乏しいったって明らかに周囲はから浮いてる人間見りや目を2、3ミリ見開くくらいする筈だ。…いや、奴の場合それもないかもしれないが…。いや、まあとにかく二次元か三次元のどちらかに統一されとる筈だ。

パターン2 世界が三次元に統一されている

うん、無いわ。寧ろあつたら死ぬわ。

んな事してみろ、コスプレイヤーかドラマ撮影にしか見えんだろ。愛でるとこねえよ。

二次元絵に忠実に三次元にしたらもつと悲惨だ。あの目の大きさからすると、そこら中爬虫類人間だらけになるぞ。

しかし、タバサはコスプレイヤーでも爬虫類人間でもない、あの可愛いタバサだったし、昨日のキュルケもあの色っぽいキュルケだった。

つまり、

パターン3 俺が二次元にされている

寧ろパターン2リバーズとかが正しい気がするが、これで多分正解だな。

洗面所で鏡をみてる。

それ見た事か。アニメ絵にデフォルメされた鏡に映るのは

無造作ヘア、黒髪。鋭めな双眸、エメラルド色。鼻・口、言  
い表すすべを知らん。顔のパーツ配置、絶妙。美形。

……妹が描いてたな、こんなイケメン絵。  
鏡に映りこんでいるのは俺と同じ動きをする美形の絵。  
鏡を触ると、いつもの鏡の感触がする。  
顔を触ると、俺のものとは思えない感触がする。  
再び鏡を見ると、自分の顔を触る美形少年……と、眼。

眼？と思ったときには眼から黒い手がニョロニョロと蠢きたち、俺の頭を探る。

おーい真理？と呼びかけようとして、俺は意識を失った。

俺はゆっくりと目を覚ました。

一瞬真理の扉の中かと思っただが、何の事はない、さっきと同じ洗面所で鏡に額をついて突っ立っていた。

鏡から額をひっぺがし、鏡をもう一度見る。

アニメ絵の美形。しかし、さっきの違和感を感じない。

俺は目を細めて鏡を見る。鏡の中の俺はニヤリと笑いかける。

……もう一度見る。

俺は目を細めて鏡を見ている。鏡の中の俺はニヤリと笑いかけている。

……念のためもう一度見る。

俺は目を細めて鏡を見ている。鏡の中の俺はニヤリと笑いかけている。

はて、なんたる心霊現象かな。と頭を捻る俺に鏡の中の俺が声をかけてくる。

「久しぶり。俺だよ」

「いや、これでも俺毎日鏡見てるから……」

「寝ぼけるのも大概にしるよ。いいか、俺はー、俺はぜ」

「ああ、真理か。昨日の今日で久しぶりは違うぞ」  
「…皆まで言わせるよ。自己紹介言い切っていないのに次にまわされた気分だぞコラ」

俺は中二のときの自己紹介で先生が素でとばしてしかも最後の一人が言い終わってやっととばした事実気付いたという伝説があるけどな。

それはそれとてこいつは真理。鏡のなかの俺を使って話している。だとしたら言いたい事はひとつ。

「おい、取引内容がちが」

「要点だけ一気に言うぞ困ってるようだしアニメ空間でノイローゼにでもなられたらつまらんからお前から二次元三次元の違和感とお前の元の顔の記憶をとってやったぜ等価交換は待ってやるからせいぜい楽しませるじゃあちよつとあとが詰まってるから、じゃな！」  
「いや、ちよいまて！オイ！飯を！オイ！？オiiiiiiiiイイイイイッ！！」

俺が喋る間もなくやつは一気に言い切り、去っていった。

…しかたない。

俺は紙を取り、シャープペンシルを取り、居間の机につき、俺について書き出し始める。

ざっとこんなもんか

俺について

・名前：アスラン・ロイ・フィリップス・ハリー・エ・ド・ヴォル

デモート

・一人称：俺

- ・身長：約170cm
- ・体重：約60kg
- ・成績：割に普通
- ・運動神経：割に良い
- ・境遇：主無し使い魔
- ・能力：魔法、錬金術、その他
- ・持ち物：あれこれ
- ・状態異常：空腹
- ・ルックス：（現在）妹が描いていたのにソツクリなイケメン  
（過去）ついさつき真理に記憶取られたので忘  
った

- ・交友関係：タバサ・友人（笑）
- ・家族：（現在）ペットに不死鳥がいる筈

（過去）耳がイカれてきて、会話の為に読唇術をおぼえ、あまつさえ俺に教え込んでくれた祖父

料理人で、俺に料理を教え込んでくれた父

主婦で、家事手伝いのいろはを教え込んでくれた母

趣味以外全て良くて、俺に色々教えてくれたが、

モテモテ&糞ウザで、ホント死んで欲しかった兄

絵が上手くて、そのみちの御教授を賜った可愛い妹

ってな感じかな。我ながら面白味にかけるがまあいいか。

さて、時計を見る。この時計、「検索」によれば、こちらの時間と殆ど誤差が無いという。例えばこの世界の日の入りがこの時計では5時にセットされている。：真理のあの人影がアナログ時計の時間を合わせてる風景を想像してしまった：シユールだ。そしてこの学校は時間割的なものは元の世界の学校と近い。

時刻は大体9時。ん？9時？さっきタバサとやりあったのが日の出だったが：ああ、真理にやられて気絶したからか。9時って事は

じゃあそろそろ始業か。とすると飯はお預けか。トホホ。

じゃあ、気を取り直して、腹に「耳塞ぎ」かけて、授業見学と行きますか。

芸術は爆発だ。しかし授業は爆発じゃない。普通は。

俺はテントを片付け、綺麗に畳む。

そして、真理との取引で「検知不可能拡大呪文」が施され、中が倉庫街並みにでかくなつた右ポケットに折り畳んだテントを突っ込み、透明マントを頭から被ると、あるアイテムを取り出した。

見た目はどうみても古びた羊皮紙。しかし、これはあるキーワードをとなえると、とても便利なアイテムとなるのだ。

俺は杖を紙に向け、

「われ、ここに誓う、われ、よからぬ事を企む者なり」

と、宣誓？する。

すると、杖先からインクが紙にじわじわと広がっていくように文字と地図が描かれていく。

これぞ、ムーニー、ワームテール、パッドフット、プロングズの忍びの地図。

原作のハリー・ポッターでは、これは多重折り畳み式の学校地図で、教室、階段等のもとより、秘密の抜け道や、それがどこに繋がっているか等、とても詳細に描かれている。

そして、これの一番便利な点は、誰がどこにいるのかが、名前つき「ドット点」でリアルタイムに表示される事である。

これを見ていけば、都合の悪い相手に遭遇しないルートを選びながら移動できる訳だ。

そして、俺が真理から貰ったこれは「トリスティン魔法学校」に対応しているバージョンなのである。

パタパタ開いたり閉じたりしながら探す事5分。やっとの事で「

アスラン・ド・ヴォルデモート」「シュヴルーズ」をみつけ（表示日本語かよ。雰囲気ですねーな）、透明マントに身を包んで姿を隠しながら、コルベールを避け、シュヴルーズに合流し、彼女が扉を開くと共に教室に入った。別に姿くらましでもいいんだけど、あれ「バチンツ！」ってでかい音するんだよな。

教室に入った俺は親愛なる我が友タバサをみつけ、その後ろに付いた。

授業風景はいたって原作どーりだ。

シュヴルーズ「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですわね。このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

（俺「ステューピファイスステューピファイスステューピファイスステューピファイスステューピファイ、スーハースー、プロテゴ・トタラム、ステューピ（ry）」

シュヴルーズ「おやおや。変わった使い魔を召喚したんですね。

ミス・ヴァリエール」

一同、笑

マリコルヌ「ゼロのルイズ！召喚できないからって、（俺「シレンシオ 黙れ」）！？（声が出なくなる）」

一同「？」

モブ「『サモン・サーヴァント』ができ（俺「シレンシオ 黙れ」）！？（声が出なくなる）」

シュヴルーズ「？まあ、授業を始めますよ」

うん、まあ原作通り。違いは精々透明マントでおれが潜んでいた事、ルイズの爆破で暴れ出す前に使い魔動物達に「失神呪文」<sup>ステューピファイ</sup>をか  
けまくっている事、教室に「<sup>プロテゴ・トタラム</sup>万全の護り」を施して教室の被害を弱

めた事、ルイズを馬鹿にしようとしていたマリコルヌとモブを黙らせたことぐらいだ。

シュヴルーズ「私の二つ名は『赤土』。赤土のシュヴルーズです。

『土』系統の魔法を、これから一年、皆さんに講義します。魔法の四大系統はご存じですね？ミスタ・マリコルヌ」

マリコルヌ「（声が出ない為、口をパクパクさせている）」

一同笑、俺黙爆笑

シュヴルーズ「なんです？ふざけて。ではミス・ヴァリエール」

ルイズ「はい。『火』『水』『土』『風』の4つです。他に『虚無』もありましたが、すでに失われています」

シュヴルーズ「はい、そうですね。ここまでは皆さん知っての通りです。その五つのなかで『土』はもつとも重要なポジションを占めていると私は考えます。それは、私が『土』系統だから、というわけではありませんよ。私の単なる身贔屓ではありません」

嘘つけ、『土』が重要なら『水』も似た様なもんだろが。そして人生虚無感二度三度。一番『人』と密接なもんなんて『虚無』に決まってるだろが。あ、スキュア外した。「ステューピファイ」。よし。

シュヴルーズ「『土』系統の魔法は、云々、云々、云々」

どーでもいーんですけどー。てかタバサ机に隠して本読んでるし。こら烏、止まれ。「ステューピファイ」。ジャストヒット。

石ころ発光

キュルケ「ゴゴ、ゴールドですか！？ミセス・シュヴルーズ！」

あれ？今タバサ俺の事チラツと横目で見た？あ、『風』トライア

ングルだから風の流れてわかる、とか？

シュヴルーズ「 だけです。私はただの…トライアングルです  
から」

「ただの」とか言う割にはドヤ顔だな。

サイト「ボソ」

ルイズ「ゴニヨゴニヨ」

サイト「ボソボソボソ」

ルイズ「ゴニヨゴニヨゴニヨ」

以下同文

シュヴルーズ「ミス・ヴァリエール！」

ルイズ「ヘイ！？違う、はい！」

シュヴルーズ「授業中の私語は慎みなさい」

ルイズ「すいません…」

うわあ、あいつこっちは気付いてねえの？タバサものっそい早さ  
でページ捲ってんぞ？てかだからチラッと見んなタバサ。

シュヴルーズ「お喋りする暇があるのなら、あなたにやってもらい  
ましょう」

ルイズ「えっ？わ、わたし？」

シュヴルーズ「そうです。ここにある石ころを、望む金属に変えて  
ご覧なさい」

一同「マジ？」「正気？」「俺たち殺す気？」「死ねと？私達に  
死ねと？」

サイト「ご指名だろ。行ってこいよ」

シュヴルーズ「ミス・ヴァリエール！どうしたのですか？」

マジ？まだ使い魔全部は失神させきつてねえよ！<sup>プロテコ</sup> 防御もまだだよ！？

キュルケ「先生」

シュヴルーズ「なんです？」

キュルケ「やめといた方が良いと思います」

シュヴルーズ「どうしてです？」

キュルケ「危険です。大変危険です。大事な事なのでなんどでも言いますよ」

一同頷く

シュヴルーズ「危険？どうしてですか？」

キュルケ「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

シュヴルーズ「ええ。でも、彼女が努力家という事は聞いています。さあ、ミス・ヴァリエール。気にしないでやってご覧なさい。失敗を恐れていては、何もできませんよ？」

モブ「先生！ルイズの失敗を舐めてはいけません！そいつは・・・」

シュヴルーズ「お黙り！いつも失敗するからといって今回もそうとは限らないじゃありませんか。さあ！ミス・ヴァリエール！」

キュルケ「ルイズ、やめて」

ルイズ「……………やります」

待てええええええええええ！ラス一匹いいいいっ！

ルイズに笑いかけるシュヴルーズ。

シュヴルーズ「ミス・ヴァリエール。錬金したい金属を、強く心に思い浮かべるのです」

一同、椅子の下に隠れる。本に夢中でなんにも気付いてなかったタバサをキュルケが椅子の下に引っぱり込む。

よっし！ラス一匹仕留めた！あとはサイトと俺に防御呪文を

か、かかかかあーいっ！おっ持ち帰りいいっ！

いやマジパネえよアレ。杖を向けながら、じっと対象を見詰める。陽光を浴び、キラキラ輝く姿は、如何なるアニメグラフィックを用いようとも描けない様に思える。正直この絵づらはどストライクだ。いやあ、これだけでも異世界トリップしたか！があつたつてもんだ。なんていうんだっけこういうの。割とメジャーな単語だったような……。ええと、ん、あー……。あ、そうだ！思い出した！あの言葉！ ついでに今の状況も。

「『錬金』ッ！」

ルイズの声が響いた刹那、閃光と轟音、爆風熱風が駆け抜ける！ サイトはもとより、俺自身に対する防御呪文も間に合わず、仲良く吹っ飛ばされた。その時俺はこう断末魔をあげていた。

「萌ええええええええええっ！」

壁におもくそぶちあつた。あれ、威力高くない？まあいいか。ああ、全く原作どーりだったとも。

失神させた使い魔どもは起きなかつたが、教室にかけた呪文は破られて教室は半壊し、透明マントこそ無事だったものの、俺は川の向こうに死んだ祖母が見えた。死んだからって魂だけ若返ってやがったぜあのババア。

他の巻き添えとなつた生徒たちの怒号飛び交うなか、無惨な姿のルイズがさらつと言った。

「ちょっと失敗したみたいね」

サイトが呟いた。

「『ゼロ』のルイズ…。俺、もしかして帰れずに爆死するんじゃないか…」

俺も呟いた。

「あの子、テロリスト界の至宝だわ」

そして何故かタバサも呟いた。

「やっぱり謎」

その呟きは誰に向いたものやら。

騒ぎを聞きつけたモブ教師が来るまで怒号はいつまでも続いていた。



差す日の出の陽光が何か神々しいものを感じさせる。

こいつ、強い。長年汚れ仕事をやってきた勘がそう告げる。風韻竜を捕らえたという客観的事実から考えれば至極当然か。

そう確信すると、私は窓から飛び出した。自分に「フライ」をかけ、シルフィードの待つ地へ。

辿り着いたかの地の風景を見て私はこけそうになった。シルフィードは肉塊を貪り、襲撃者は遠い目をしていて、試しに撃つてみた「エア・ハンマー」一発で撃沈した。

訝しいながらも、苦勞がないならそれに越した事はないか、と思いき直し、シルフィードのもとに行く。

地面がシルフィードの体を隙間無く覆い、また相当強固に「錬金」してあるようだ。

「デイテクト・マジック」をかけてみて驚いた。自分の全く知り得ない未知の態系によって「錬金」してあるのだ。

杖で小突きながら考える。未知の態系による強固な「錬金」。こんな真似ができるのは「土」のスクウエアメイジだ。しかも結構な腕前を持つような。先程の「エア・ハンマー」で倒せている訳はない。戦いは避けられないだろう。

自分は『風』系統のトライアングル。トライアングルではスクウエアには手数那点で分が悪い。しかし先程は不意打ち気味の一撃で吹き飛んでいたし、ここは外。『風』を活かすには最適の場所。ならば隙さえあればあるいは……。

そう思い、襲撃者の方を見る。…あれ？彼と私の間においてはこっちが襲撃者？まあいいや。

彼はゆっくりと起き上がっていた。そのどこか正気でない仕草に、不覚にも気圧された。

彼はこちらの全身を観察している。

構えに隙がない。いや、隙だらけだが、それが隙なわけではない。  
……久々に手強い相手になりそうだ。落ち着いて、まずは隙を…  
その為には会話……

「何したの？」

「さてどうでしょう？なんなら自分で解いてみれば？留学生のシユ  
ヴァリエさん？」

っ！？なぜ知って…！？はっ、しまった、逆に隙を…奴め、やは  
り手強い…

相手はこちらをやはり注意深くみている。今の一瞬を狙わなかつ  
たのは挑発か？私としたことが、舐めていた。

落ち着け、まだ…とにかくく話を……

「解いて」

「フツ、や〜だよ〜解いてやらないよ〜っていったら？」

完全に舐められている！っ！このままこうしていても時間の浪費  
？なら、

「力づく」

「よろしい、ならば決闘だ」

結局こうなる！なら先手必勝！

「ラナ・デル・ウィンデ 『エア・ハンマー』」

しかし、相手はなにか唱えると杖先から透明な壁のようなものを  
させ、「エア・ハンマー」を防いぎ、あまつさえ跳ね返してきた。  
そんなものなんて事はない。避けるだけ。

彼は駆け出すと、色とりどりの閃光を雨霰と投げかけてきた。

この量…なんて底無しの精神力…！！

ここは「アイス・ウォール」を…いや、避ける！スクウェア相手に機動範囲を削るのは自殺行為。特に私の戦闘スタイルでは機動は損なえない。それでも当たるのは相殺する！

もう躊躇や動揺の段階は過ぎた。相手から目をそらすな、走行速度を測れ…動きをよく見て…

閃光が止んだ…そこ！

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ハガラーズ 『ジャベリン』」

だが、当たると思われた一撃を、相手は地面を爆発させ、その爆風でよけた

さすが…でもこれなら！

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ウィンデ 『ウィンディ・アイシクル』」

大量に放った氷の槍。…っ！やはりスクウェア、この一瞬であるサイズの壁を作るとは…

だが、視界を無くしたのはミス！

「ラグーズ・ウォータル」

壁に刺さった氷の槍を足場に、詠唱しながら駆け上がる

「イス」

「上か！」

遅い。この距離ならばもはや防御は間に合うまい。これで！

「イーサ・ウィン」

「ラングロック！」

っ！？なにこれ！舌が口にくっついた！？詠唱が…

仕方なしに降り立った地面。そこには謎の印。何？

相手が印に手を付くと、印が光り、体が凍りつく。これは…薄い氷？

動けない！？はめられた！

「エクスペリアームス 武器よ去れ」

私の手から杖が飛ぶ。…なに、今の魔法…  
相手が話しかけてくる。

「俺の勝ちだな、ガリアのシュヴァリエ」

ガリアであることも知れている。完敗だ。あらゆる面で。

「じゃあ、俺の勝ちだから何か一ついうこと聞いてもらっぞ」

やっぱり。

「……」

「なにその、えっ？って顔。ったりめーだろ。お前が勝つたら俺はあの韻竜を解放する。じゃあ、俺が勝つても何か景品のものが必要だろ。あ、フィニート 終われ。これでお前の舌開放っ」と

表情を読み違えているようだ。ってちょっと待って、早い、いくらなんでも情報が早過ぎる。昨日の今日でバシてるというの？

「…知ってるの？シルフィ」

「だってシャウトしてたし」

「ガーゴイル」

「無理じゃボケ」

「……」

やっぱりな。思わずシルフィを見てしまう。あの竜はほんとうにしょうもない。

「じゃあ、聞いてもらっぞ、俺の言うこと」

「……」

まあ、そうだろうね。最初からシルフィードだけ目的なら逃げ的手段なんか幾らだってある筈。私に用があったのだろう。これでも花壇騎士だし、王族の血だし…悔しいが…仕方ない。

「お前、俺の友達になれ」

…ちょっと待って、いまこいつなんて言った？トモダチ？同士になれとかそういう何か？

そついう彼の目は至って真面目だ。え、ちょ、

「それだけ？」

「うん、それだけ」

もしかしてあなた……

「人付き合い下手？」

「お前が人に言うな」

信じられない。あれだけやっというて友達になれ？なにそれ、私を混乱させる腹？

シルフィードと話しに行く彼。

杖を拾ってそこに行くと、

「ねえよ。あんなおっかないパシリいらんわい」

「ならいいのね」

バレてるのをいいことにここぞとばかり喋りまくるシルフィード。なんかムカついてきた。

「よくない」

ああ、よくない。

「なにが？っていつかいるならいるって言え。ちょっと怖いから」

取り合えずあなたは無視。

「シルフィ。バレた」

シルフィを鋭く睨む。シルフィがあわてて言い訳するよつに言う。

「で、でででもあ、お、おおおおねえさまだつて、ご飯取られたら怒るのね！一緒なのね！」

「でもバレた」

「きゅいいいいいいいい！許してなのね！許してなのね！」

「…お仕置き」

「きゅいいいいいいいいいいいいいい！！！」

「…悪い、シルフィード。俺が悪かった。ほんとゴメン」

ああ、あなたも聞きたいことが。

「何者？」

「俺？俺は主無し使い魔」

ふざけてるの？

「…火のないところに煙は立たぬ。使い主がいらないなら使い魔はいない」

「じゃあメイジじゃない魔法使い。兼錬金術師」

「…敵？味方？」

私も相当滅入っている。こんな質問するなんて。

「そう聞かれると多分敵にしる味方にしる味方と答えるだろうが…残念ながら俺はお前のダチ」

またそんなことを。なら、

「人質手段は？」

どうだというの？

「いや、ただ人間関係に飢えて敵っばい手段を取っただけだ。信用

していいぞ」

次が、本題。

「なぜ私の事情を？」

「特殊部隊フェニックス隊をよろしく」

嘘隠し慣れてないな、こいつ。

「ふざけるな」

「すまんかった。が、特殊な情報網があるのはマジだ。ってことでお前と俺はダチな」

あつさり。

…特殊な情報網、だと？

報告すべきだろうが、あの男に…いや、とりあえずこっちか。

「迷惑、かつ危険」

「うるさい！人が人を求めることのどこがいけないんだ！大体“友達になつてくれ”に対して“迷惑”はひどい！ひどすぎる！」

「けど迷惑」

「…すいませんでした」

頭を下げる彼。ソレを見ながら考える。

彼の魔法は全く未知のものだった。未知の魔法。そこには母様を治す手もあるいは

それに…友達か。なんて魅力的な響きだろう。この人は面白い。あらゆる面で。

…いいかもしれない。友達。たしか、名前から…何か恥

ずかしい。

「タバサ」

「…ん？」

「名前。タバサ」

「へえ、友達の流れは知ってたんだな。俺はアスラン。アスラン・ロイ・フリッツプス・ハリー・エ・ド・ヴォルデモート。…長いな流石に。略すべきか」

「…ふざけるな」

「いや。地図に無いほど西のほうの貴族だから」

そんなところがあるんだ…やっぱり、面白い。興味深い。

「そう」

「おう、よろしくな、タバサ」

「……」

頷くだけ。

再び飛び上がるシルフィードを見送った直後、新しい友達は消えていた。

そして、教室で風をさぐったらいた。見えないなんて。私をこんなに混乱させてくれて。

最終的に爆発で壁にぶち当たっていた。防げた筈なのに。

ああ、なんて面白い、不思議な人だろう。

アスラン・ド・ヴォルデモート。

私の、二人目の最良の友でありますように。

## タバサの邂逅「面白い」（後書き）

タバサ。やっぱりキャラ違い。

ってか何でこうなった。

利用する為に友達になりました、ってのはなしにする筈だったのに。

これはいくらなんでもないよな。

ま、いつか。

では、あと一話挟んで本格的に本編介入していきます。

また今度。

ほらまたどこかでなにかが起ころ。

ミスタ・ジャン・コルベール。

ちよつと、そう、ほんのちよつと後ろ暗い過去を持つ彼は、トリステイン魔法学院に奉職して二十年、中堅の教師である。

二つ名は『炎蛇のコルベール』。『炎』の示す通り『火』系統の魔法を得意とするメイジである。

どうでもいいけどキュルケヤルイズみたいな子供は二つ名に出るのはファーストネームなのになんでコルベールみたいな大人はファミリーネームなんだろう。大人はもう家を背負ってるからとかそういうのなのだろうか。ちよつと気になる。

まあ、それはさておき、彼は同学院で一番真摯に生徒を思い、一番真面目に職務を全うする、教師の鑑みたいな人物である。ゆえに割と生徒に慕われる傾向にある。まあその分馬鹿にされてたりもするが。

また、キュルケに言わせれば『火』の本質『破壊』と『情熱』の『破壊』が極端に欠落している人物でもある。実際はチート級に強いのだがその力を封印している。それもまた、前述のちよつと後ろ暗い過去が影響しているが、それは割愛させて頂く。

更に、彼は自他共に認める変人でもある。実際は『火』の平和的利用法を極めんとするもうちよいで偉人にたどり着きそうなかたである。流石に誇大かな。詳細は、これも割愛させて頂くことにする。そして何より彼はHAGEである。ピッカピカである。毎年誰か反射光で失明するんじゃないかと賭事に使われているくらいツルピカである。

要約すれば、『炎蛇』『いい教師』『変人という名の準偉人』  
H A G E『である。長文失礼。』

そんな彼は図書館にいた。

この図書館、食堂とともに本塔に内包され、おおよそ三十メートルほどのバカ高い本棚が壁に並び、そこには始祖ブリミルがハルケギニアに新天地を築いて以来の歴史が、完全とは言わないまでも網羅されている。その画は地球の本棚とはまた違う壮観をなしている。

彼がそんなところにいるのは先日『春の使い魔召喚』においてミス・ルイズ・ド・ラ・ヴァリエール嬢が召喚した平民の少年のことである。長年生きてきた中で、使い魔という存在は掃いて捨てるほど見聞きしてきたが、人間を使い魔として召喚するなど聞いたこともない。そしてその少年の左手の甲に浮かんだルーンもまた未知のものであった。そんなわけで彼は昨晚からこの蕁麻疹が出るような本の山を攻めているのだった。

今彼がいるのは教師のみ閲覧を許可される『フェニアのライブラリー』。生徒書庫では答えが見つからなかったのだ。

しかし、彼は別の事が頭から離れず、作業が進まない。ヴァリエール嬢の未知の使い魔少年も気になっているが、未知というならあの後現れた少年の方がもつとわけが分からない。誰も唱えないコモンが唱えられ、誰もしていないコントラクト・サーヴァントがなされ、忽然と姿を消した少年。なにか、明らかに特殊なものを感じさせる容姿。彼が一瞬で作り出した巨壁は「ディテクトマジック」によれば、皆目わけの分からない魔法態系で形作られていた。形状自体は単純な『土』系統魔法とはいえ、誰にも分からぬ魔法態系、それも座学においては優秀なこの学院の教師すら困惑させるようなものをあの瞬間に使うなどと、もはやトライアングルは堅い。下手しなくともスクウェアではなかるうか。

未知の使い魔少年。ソレを更に超えた不可思議な少年。同じ日に、連続して。これが何か意味をもつとしたら

そうして考えながら『空中浮遊魔法』レベリションで浮いていた彼は、手に取

ろうつとした本を足に落つことし、非常に痛い思いをした。足自体は靴を履いていたので問題なかったのだが、本の重量で足首が意図しない方向に無理に曲がったのだ。クキツ、と軽い音がする。

軽く悪態を呟きながら彼はソレを手に取り開く。ソレは始祖の使い魔の記された書物。

はたして、そこには求め続けた答えがあつた。あつ、と声にならない呻きをあげた彼の頭の中には謎の少年の事など露ほども残さず吹っ飛んでしまった。

彼はソレを手に取り出す。目指すは学院長室

その学院長室は食堂、図書館と同じく本塔に内包され、その最上階にある。

その主、トリステイン魔法学院院长オスマン氏は、エセダンブルドアとは私の事だと言わんばかりの白く長い髭群を揺らしながら、何やら熱心に鏡を見ていた。

別に彼は自分の顔を見ているわけではない。

これは、マジックアイテム、御存じ『遠見の鏡』。鏡の形のぞき用具とも思ってくれば良い。

ここ数話出てないが、毎話の最後に呟きを残していたのは今更言うまでもなく彼である。

彼は今、一度見失つてから再発見できない我らが主人公、アスラを探して学院中をくまなく見て回っていたのだ。一透明なアスランが見つかるわけないのだが。

そんな室内には絶えず書き物をする音が響いている。

音源は、部屋の端におかれた机に向かい、書き物をしている学院長付き秘書。理知的な顔つきが凜々しい美女、ミス・ロングビル。

彼女も彼女でちよつとした事情を抱えているが、しかし、そこは

やはり割愛させて頂こう。

と、アスランの発見を諦めたのか、オスマンは鏡を机の隅に押しやり、引き出しを引き、中から水煙管キセルを取り出した。

間をおかずしてミス・ロングビルが羽ペンをかるく振り、水煙管がその手元に飛んできた。

やや不満そうにオスマンは呟く。

「…また腕を上げたかね、ミス」

「ほぼ毎日やってればいやでも上がりますわ、オールド・オスマン」

ため息をついたオスマンは立ち上がり、ロングビルの後ろに立つ。その顔に刻まれた皺が、幾百年の歴史を物語る。

「君に分かるかね？悠久の時を過ごす老人が如何に時間潰しを大切に思うか」

「オールド・オスマン。老人の時間の云々は分かりかねますが、世の九割の女性がお尻を撫でられるのをいやがるという事はわかります。わたくしは九割の方ですのでお尻を撫でるのはやめてください」

オスマンははじかれたように前を見つめ、よちよちと歩き出した。

「都合が悪くなるとボケた振りをするのもやめてください」

どこまでも冷静な声。しかし、聴ける人が聞けば声の温度が数度下がったのが確認できただろう。

このいつまで生きてるかわからんじーさんは聴けない人らしい。

「真実とはどこにあるんじやろうか？考えた事は」

「少なくとも」

ブチツというなにかを踏む音。ギャンツという痛々しい悲鳴。

「わたくしのスカートの中にはありませんので机の下に」

ロングビルの綺麗な足によって机下から蹴り出されたなにか。

「ネズミを忍ばせるのはやめてください」

「あああつ！モートソグニルウツ！！」

オスマンは半泣きになってグツタリしている小さなハツカネズミを抱き上げる。

哀れ、使い魔モートソグニル。その身にはクツキリと靴跡が残り、目は既に白濁色。

「起きれ！起きるんじゃ！私に真理<sup>バンツ</sup>を見せてくれると！そう言ったじゃないかあ！」

するとモートソグニルはピクリと動き、消え入りそうな声でちゅ  
う…ちゅ…う。。  
そしてモートソグニルは最後の義務を終え、どこか満足気に逝つ  
た…

「モオオオオトソグ」

「オールド・オスマン」

遮る冷静な声。むしろ冷徹な声。はつきりいうなら絶対零度の声。  
親の仇を見るみたいな目でロングビルを見るジジイ。

「なんじゃね」

「暇だからといって大声で三文芝居をうたないでください迷惑です。ソレも含めて今度やったら王室に報告します」

「カーッ！王室が怖くて魔法学院院长が務まるかアアアアアアッ！」

目を剥いて怒鳴るオスマン。恐ろしい迫力である。あんだホントにジジイか！？ってくらいの。

「下着を、覗かれたくらいでカツカしなさんな！そんなだから婚期を逃すのじゃ。はあ~~~~~、若返るの~~~~~、ミス・ホワイト。ところでモートソグニルや、やはり彼女にはブラックに限る。そう思わんかね。可愛いモートソグニルや」

堂々とロングビルのお尻を撫で回し始めたオスマン。

無言で立ち上がったロングビル。目の辺りに影がかかり、サスペンスの犯人のようだ。しかるのち彼女は上司を蹴り回し始めた。

「ごめん。止めて。痛い。もうしない。ほんとに」

頭を抱えてうずくまるエロジジイを、しかし足を止めないどころが増す増すヒートアップしながらロングビルの制裁は続く。荒い息、目を剥いて、髪を振り乱し・・・はオーバーだが、目の光はそっちの趣味に目覚めそうな勢いである。

「あだっ！年寄りを！君！そんな風に！こら！あいだ！ちよっ、まっつてほんとおねガッ！」

そっちの趣味のないオスマンは普通に悲鳴を上げるが、ロングビルの形の良い唇を歪ませただけの結果に終わる。

そんなある意味平和な時間は突然の闖入者によって破られた。

ドアがバタンツ！と勢い良く開き、汗でいい具合にHAGEをデカらせたコルベールが中に飛び込んできた。…哀れ、モートソグニル。蹴飛ばされて壁に叩きつけられグツタリだ。

「オールド・オスマン！」

「なんじゃね？」

ミス・ロングビルは何事もなかったかの様に机に向かい、オールド・オスマンもまた何事もなかったかの様に後ろ手を組んで重々しく闖入者を迎え入れた。早業である。

「たた、大変です！」

「大変なことなどあるものか。全ては小事じゃ」

「ここここ、これをご覧ください！」

「うん？これは『始祖ブリミルの使い魔たち』ではないか。まあたこんなカビたような古臭い文献など漁りおって。そんな暇があるのなら、たるんだ貴族たちから学費を徴収するうまい手をもっと考えるんじゃよ。ミスタ……なんだっけ？」

「コルベールです！お忘れですか！？」

「そうそう、そんな名前だったな。君はどうも早口でいかんよ。で、コルベール君。この書物がどうかしたのかね？」

「こちらもご覧ください！」

その本の、とあるページ。そしてとある少年に現れた未知のルーンのスケッチ。

オールド・オスマンは目の色を変える。

「……！ミス・ロングビル、席を外しなさい」

部屋を出るロングビル。それを見届け、オスマンはコルベールを

見る。

その表情はもはやエロジジイなどではなかった。

「詳しく説明するんじゃない、ミスタ・コルベール」

その件の少年、ルイズ・ド・ラ・ヴァリエール公爵令嬢が使い魔平賀才人は、二教授が話している下の食堂から出て来るところだった。

青のフード付きパーカーにジーンズという出で立ちは、およそここには似つかわしくない。

トボトボと歩く彼からは尋常じゃない哀愁が漂って来る。

彼は先程、ルイズの爆発に巻き込まれ、めちやくちゃになった教室を主人のルイズと修理した。あの動物園の様な使い魔怪物達が暴れ出さずに気絶してしまっていたのは不幸中の幸いだった。

とはいえ、碌に食事もとらせずあの労働。ソレまでの不満もあいまってイヤミの応酬をこころざしばかりお見舞いしたらあの鬼め、飯抜きやがった。畜生……。

「はあ……」

後悔先に立たず、である。

思わず声に出た、魂の一言。

「腹が減った……」

声が誰かと八モった。

ちよつとまで、ここにはさつきから誰もいなかったじゃないか？  
不思議に思った才人は後ろを振り向いた。そして彼は見てしまっ  
た。

自分と同じ様に壁に手をつき、全く同じ雰囲気を出すイケメン。  
ただそれだけなら「イケメンみな死ぬヨロシ」と思っただけだが、  
目の前の彼は……

頭と右腕しか、なかった。

そう、それは透明マントのずり落ちたアスラン・ド・ヴォルデモ  
ートその人であったのだ。

ツッコミたい時にはツッコめ！

「…腹が減った…」

ハモった。

やい！誰でい、昼食真つ最中のアルヴィーズ食堂前で腹抱えながら壁に手をつけて俺とハモったのは！ハっ！考えるまでもねえ！夕イミング的にも台詞内容的にも奴しか居ない！主人公、平賀才人！ようやく会えたな！と言ってもどうせてめえには俺の姿が見える訳もねえがな！

…あの、才人？ナズエミデルンデイス？ゴメン、ネタわからないかな？あの、なぜ見てるんです？

無意識に手でマントを探ろうとして気付いた。ずり落ちてやがる。手と顔だけまる見えか。

見つめあつたまま30秒経過。

俺はいそいそとマントを脱ぎ、畳み、ポケットに仕舞う。

で、一言。

「まあ、ファンタジーだから」

なにやら壁についた手を離して額を押さえ、首を振る才人。

「…ああ、わかってる。気にしちゃ負けだよな。俺は今この瞬間にウルト マンになれたとしても驚かないと誓うよ」

「それはファンタジーじゃなくてSFだよ」

「あの〜」

ん？お、ナイスタイミング。アニメ版なのな、デザインは。

「どうなさいました？」

大きな銀の盆を持ったメイド、シエスタである。

「なんでもないよ」

「ああ、なんでもない」

「あ、左の方はもしかしてミス・ヴァリエールの使い魔になっちゃったっていう…」

「知ってるの？」

「ええ、なんでも、召喚の魔法で平民を喚んでしまったって噂になってますわ。ところで、あの、右の方は……」

この人の場合タバサと同じ説明はできんな。まあー

「あー、俺はその、あれだよ、生活費稼ぎに働きに来た平民だよ。道に迷って辿り着いたはいいがどこに行つていいか分からず、路銀は尽きて、腹も減り、美味そうな匂いに釣られてここにやって来たんだよ」

スラスラと嘔吐けるのが俺の凄いとこ。まあ、釣られて来た件はマジだしな。どうやってここまで来たのか覚えてねーし。

なにか？才人。

「ボソボソ（え、いやお前確かさつき魔法っぽい事を）」

「ボソボソ（いいか、物事にはTPOってものがある）」

「……。あ、ところで君は？まほ」

「いやそんなことあどーでもいい！なんか食わせてくれ！後生だから！」

「そうだった！俺も何か食いてえ！……あ、ゴメン」

シエスタ引いてます。なんか。

「そ、そうですか。お二人共お腹がすいてるんですね？」

「はい！そうですとも！」

「…うん」

「で、ではこちらにいらしてください。あ、私はシエスタっていいます」

「俺は平賀才人。よろしく」

「俺はアスラン！ヨロシク！」

「サイトさんにアスランさんですね。ではこちらに」

食堂裏の厨房。

まーあちーことあちーこと。コックたちの汗、火の熱、暑いつつうの！

シエスタは「ちょっとまっててくださいね」と言っつて厨房の奥に消えて行った。あの中はベラボーにあちいんだろーな。

と、どーした才人。

「なあ、アスランっていうのか？」

「なんだ、藪から棒に」

「いや、さあ。……あの、真面目に聞いて欲しいんだけどさ、その、もしかして、異世界人だったりとかする？」

「なんで？」

「いやなんでって、着てる服に「風林火山」って……」

決め手が微妙だなあ。ってちょっと待て！俺もしかして風林火山でタバサの御前に出た！？ハズかしつ！信玄氏には悪いがなんか恥ずかしつ！

「ああ、そうだよ。俺は異世界人だよ」

「じ、じゃあさ！帰り方とかは、知ってたりとかは！？」

「興奮と期待を裏切るようで悪いが知らないね」

「……やっぱりか」

「ああ、人生そう甘くはできてないよ。かくゆう俺も15年しか生きてないからあんま言えないが。お前さんは美少女と同棲できるだけ有難くおもわなきゃな」

「なんで知ってるんだよ……。いや、でもどうやってこつちに？」

「なんで？」

「もしかしたらそれがヒントになって帰れるかもしれんじゃないじゃん」

「それもないだろうよ」

それから俺は、要約すると「神様が腕試しに誰かをテキストにどつかやつちまおうとして、目をつけられたので、なんとか話しをつけてチートにして貰いました。わたしや本当に被害者以外の何者でもないです」ってな話をした。本物の神様には申し訳ないことをした。普通信じないよね、こんな荒唐無稽な話。だが、才人もかなり荒唐無稽なめにあってるからアツサリ信じたらしい。話し始める頃は帰れる可能性を失った失望の目だったのが、話し終わる頃には同情の目になっていた。

「災難だなあ。そんで名前も取られて匿名希望って？俺の方は使い魔にされたのは鏡潜った俺の所為でもあるけど、アスランの場合は、なあ」

「だろう？」

そんな感じで互いの身の上話、つつか愚痴の言い合いをしてたら「お待たせしました」とシエスタがやって来た。つか遅っ！なにこれ俺が才人と仲良くなるための補正なの？

「貴族の方々にお出しする料理の余り物で作ったシチューです。良かったら食べてください」

「いいの？」

「ええ、賄い食ですけど」

「才人、折角の親切を無碍にするもんじゃなかるう。というかシエスタさん的には良いの？才人は出自割れてるけど、俺は完全に不審者だぜ？」

「なにをそんな、困った時はお互い様ですよ。それにこれから就職試験でしょう？腹ぺこじゃいけませんよ？」

才人よ、確かにこの優しさは当事者になると泣けるな。

一口掬って食う。美味い。そういやこれ絵なのに普通に口に入れられたな。これが二次元三次元の違和感をなくすって事か。

「おいしいよ、これ」

「ああ、賄いでこれって……腕の良いコック雇ってんだなあ」

「良かった、お代わりも有りますからごゆっくり」

才人とシエスタが会話しながら食ってるが、俺は一心不乱に食いまくった。

で、俺も才人も食い終わり、シエスタに空の皿を渡す。

「おいしかったよ、有難う」

「御地になりました。始祖より女王よりシエスタ様様だな。なあ才

人

「うん、ほんとその通り。いまならその思いだけで貴族に喧嘩売れる」

なんか意気投合したようだ。

「そ、そんな滅相もない……。お腹が空いたらまたいつでも来て下さいな。わたしたちが食べているもので良かったらお出ししますから。後アスランさん、就職試験、頑張ってくださいね」

いやあ、優しいなあ、ほんとこの娘は。才人が泣き出すのも分かるぜ。

泣き出す才人。

「ど、どうしたんですか？」

「いや……。俺こっち来てから優しくされたの初めてで……。おもわず感極まりました……」

「またそんな大袈裟な……」

「大袈裟じゃないよ。俺になんかできる事あったら言ってくれ。手伝うよ」

「ならデザートを運ぶのを手伝って下さいな」

シエスタスマイルは殺傷力抜群である。なるほど、違和感をとるって絵キャラをマジな人間として見るって事でも有るのな。だとすると次キュルケに会うときは覚悟していた方が良いな。

にしてもこのやりとりさ、シエスタが「手伝わせてくれ」って才人が言うように誘導してたように感じるのは俺が捻くれてるからかな。手伝いの申し出受け入れるのが早すぎると思うんだが。

「うん！」

ああ、才人乙。ギーシュと決闘だなあ。

「じゃあ俺も行くわ」

「はい、受かったら一緒に働きましょうね」

「うーす、じゃあな才人。また今度」

「おう」

厨房から出た俺は透明マントを被り、食堂に突入。

そこには才人が、ケーキの並んだ大きな銀のトレイを持ち、シエスタがはさみでケーキをつまんで配っていく風景があった。ルイズが才人を睨む視線もシエスタスマイルとは別の意味で殺傷力がある。金髪巻き毛、フリル付きシャツ、胸ポケットに薔薇。キザスタイルのギーシュ・ド・グラモン。キザな台詞は等身大で見るとなんか痛々しいな。キュルケは……ノーコメントで。

壇がおちた。

才人が拾った。ギーシュイベントは才人が拾うルートなのな。

コト（小壇をテーブルに置く音）

「落とし物だよ、色男」

「これは僕のじゃない。君はなにを言ってるんだね？」

「おお？その香水はもしま、ミス・モンモランシーの香水じゃないのか？」

「そうだ！その鮮やかな紫色は、件のミスが自分のためだけに調合している香水だぞ！」

「そいつがギーシュ、お前のポケットから落ちたってことは、つま

りお前は今、ミス・モンモランシーと付き合っている。そうだな？」  
「ちがう、いいかい？彼女の名誉のために言っておくが……」

ガタン

「ギーシュさま、やはりミス・モンモランシーと……（；ー；）」  
「あ、いや、彼等は誤解してるんだケティ。いいかい？僕の心の中に住んでるのは君だけ……」

ガタン

「へー、そう、貴方の心の中にはこの娘しか住んでないのね」

「え！？い、いや、誤解だ『香水』のモンモランシー、彼女とはただ単にラ・ロシエールの森まで遠乗りしただけで……」

「そんな！私はお遊びだったのですか！？」

「そ、そうじゃなくてだね!？」

シパァーンツ！（ビンタの音）

「その香水が貴方のポケットから出て来たのが何よりの証拠ですわ！さようなら！」

タタタタ （走り去る音）

「で、ギーシュ？やっぱり、あの一年生に手を出してた訳ね？」

「あ、おおおお願いだモンモランシー、咲き誇る薔薇のような顔をそんな風に歪ませないでくれ！僕まで悲しくなるじゃないか！」

ガシツ（ワイン壺を取る）

ドバドバドバドバ

（ワインをぶっかける音）

「うわー……（誰かの感嘆の声）」

ガンッ！（壇を置く音）

「うそつき！」

タタタタ （走り去る音）

「……（顔を拭う）。あのレディたちは、薔薇の存在の意味を理解して居ないようだ」

「ブフツ、クククク……（俺）」

立ち去ろうとする才人

「待ちたまえ」

「なんだよ」

くるり（椅子の上で体を回転させる）  
すさっ（足を組む）

「ぶっ、くくあはは、ワインまみれでかっこつけるとかマジワロス  
WWW（俺）」

「君が軽率に香水の壇なんかを拾い上げてくれたおかげで二人のレ  
ディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

「そもそもが軽率に香水の壇なんかを持ち歩いていた誰かさんのお  
かげで、だけどな。確かに不名誉だよな、こんなバカと付き合っ  
てた上に二股かけられてたなんてさあ。ブフツ（俺）」

「二股かけてるお前が悪い」

『一同爆笑』

「その通りだギーシュ！お前が悪い！」

「色男ザマアwww(俺)」

若干赤くなるギーシュ

「いいかい？給仕くん、僕は君が壇をテーブルに置いたとき、知らないフリをしたじゃないか。話しを合わせるぐらいの機転があってもいいだろう？」

「バカだよなあ、あいつ。あの流れのどこに機転をきかせたらこの状況から逃げられるんだよ(俺)」

「どつちにしろ二股なんかそのうちバレるっての。後俺は給仕じゃないから」

「いやいや才人、それは1ダース程股かけてるところそのゲルマニア色女に失礼だ。器と気配りの違いだよ。所詮そのワインぶっかけ薔薇ビンタ風味はその程度の器という事だ。乙(俺)」

「あれはそこまで淫乱じゃない…はず…だと思いたい(タバサ)」

「ふん……。ああ君は……あのゼロのルイズが呼び出した、平民だったな。平民に貴族の機転を期待した僕が間違っていた。行きたまえ」

「是非ともあの状況でこの状況に辿り着かずに済む機転を御教授願いたいね、当のバカ貴族。大体恋愛において他人に解決策期待する時点でなにか間違っていると気付けや(俺)」

「うん、ちよつと待っていてくれたまえ、ゼロの平民くん。つつか誰だね！？さつきからちよいちよい口を挟んでくるのは!？」

「みんな大好きタバサちゃんです(裏声俺)」

激しく杖を上下するタバサ

ドゴスッ！ドゴスッ！（僕打音）

「ちよなになにごめごめ、いた！あだ！わかった！悪かったから！」

透明マントを脱ぎ、姿を現す俺。唾然とするギャラリー。そりゃ  
そうたるな、何も無い空間がめくられて平民っぽいのが姿を現すんだ  
から。

「どーもー、さっきからちよいちよいウザい平民っぽい何か、アス  
ランです」

「アスランさん!？」

「アスラン!?就職試験いったんじゃねーの!？」

「き、君!何だね!?!そのマジックアイテムは!」

「平民?西の貴族でなく?」

あれー?なにこの説明の食い違いと薔薇ワインと俺の奏でる四重<sup>カオ</sup>  
奏<sup>ス</sup>。

「あ!アスラン・ロイ・フィリップス・ハリー・エ・ド・ヴォルデ  
モート!?あの壁に巻き込まれてダメになった私の靴どうしてくれ  
るのよ!?!というか私は流石に1ダースも股かけてないわよ!」

はい五重奏<sup>エクストリーム</sup>。ちよつと落ち着こうかキュルケ。ってか嘘つけキ  
ュルケ。そしてむせ返る色気キツイ!

「うん、このイベントおわったら落ち着いて説明するから。で、薔  
薇。誰!?!って言われたから出て来たけどなにか?」

「いや、なにか?じゃなくて!なんなんだね君は!人が真面目に話  
してるのに茶々を!」

「えー真面目!?茶番じゃんあんなん。二股がバレてフラれた男の  
八つ当たりだろ?これを茶番と言わずなんと呼ぼう?なあ才人、タ  
バサ」

周りでは「おい、あいつサラツとミス・タバサに声をかけたぞ！？」「いや、てかあいつミス・タバサに関して結構不名誉な発言したよなさつき！？」なんてやってる。

「…言われてみれば……」

「茶番」

「それみろ」

「くっ！もういい！」

「ゼロの平民！そして訳わかんない君！僕は君らに決闘を申し込む！僕に恥をかかせたこと、後悔させてやる！」

あーあ。

ツッコみたい時にはツッコめ！（後書き）

アスランウザッ！

しかし彼は原作を読むブラッディを代弁しているのです。

いまのところキャラがちゃんとトレースできてるのが殆どいない。

キャラ崩壊てきな警告は入れて置くべきだろうか、

加えて近頃自分でも文が読み辛くなってるような気がする。

やっば原作と同じ様な文にしようかな……。御意見下さい！

御意見御感想お待ちしています！

## 決闘：薔薇と伝説・始祖の盾と創始者の剣

「諸君！決闘だ！」

わあああーっ！「ギーシュが決闘するぞ！」「相手は平民2人だ！」

なーんでこうなったんだ？ああ、俺がツッコミまくったからか。まいったな、当事者になるはずじゃなかったのに。

直前のやりとりを思い返して現実から逃げて見る。

「ゼロの平民！そして訳わかんない君！僕は君らに決闘を申し込む！僕に恥をかかせたこと、後悔させてやる！」

「おもしれえ！」

うなる才人

「えー」

困る俺

「ここでやんのか？」

ギーシュを吟味する様に見る才人

くるりと後ろを向くギーシュ

「逃げんのかよ！？」

「ふざけるな。貴族の食卓を平民の血で汚せるか。ヴェストリの広場で待っている。ケーキを配り終わったら来たまえ」

去っていくギーシュ

追って行くギーシュの友達

震えているシエスタ

笑いながら声をかける才人

「大丈夫、あんなひよるスケに負けるかっての。何が貴族だった

の」

『じ…』

『じ？』

『殺されちゃう…貴族を本気で怒らせたら…あ、あなたたち殺されちゃう！』

だーつと逃走するシエスタ

入れ替わりにかけて来るルイズ

『なんなんだよ…そんな強いのか？あいつ…』

『あんた！何してんのよ！見てたわよ！』

『よおルイズ』

『よお、じゃないわよ！何勝手に決闘なんか約束してんのよ！』

『いや、ありや不可抗力だろうよ』

『うるさい！いま私はこいつと、ってかあんたよ！あんたが茶々いれるからこうなっただんじやない！』

『ツツコミたいときにツツコんで何が悪い！というかどの道こうなつとつたわ！』

『くくくつ！もういいわ！あんたは勝手に殺されてなさい！ほら、犬！あんたは！』

『おうつ！ヴェストリの広場つてどこだ？』

『な、何勘違いしてるのよ！謝りに行くの！』

『え、なんで？』

『怪我したくなかったら謝って来なさい！いまなら許してくれるかもしれないわ！』

『ふざけんな！なんで俺が！俺は親切で…』

『いいから！』

『いやだね！』

『わからずや！絶対勝てないし、怪我で済んだら運が良いって次元なの！メイジは平民に勝てな…』

『おい、ヴェストリの広場つてどつちだ？』

『こつちだ平民』

すたすたすたすた

『ああもう！使い魔のくせに勝手なコトばかりするんだから！』  
たたたたたたた

『……………あ、もしかして俺忘れられてる？』

タバサに聞く俺

頷くタバサ

『一応ケーキ配つとくべき？』

大きく頷くタバサ

『OK、じゃ手伝って、キュルケ』

『え、その流れで私？』

『まあ、身長的にな』

『（タバサをチラツと見て）身長…。や、それよりほんつとうに  
あなた自身に関して説明をいただけるんでしょうねえ？ミスタ・ヴ  
オルデモート？』

『はいはいわかったよ』

で、ケーキを配り終わってから来た俺である。

若干名の心ある貴族たちは「生きる」とか「大丈夫、あいつは人  
殺せるほど根性ないから」とか「私に勝ったあなたが負ける訳がな  
い」とか言ってくれた。

さて、俺と才人の前には手を振って歓声に答えているギーシュ。

それを見るともなく見ながらシチュー美味かったなーと思い返す

俺に、才人が話しかけて来た。

「なあ、アスラン」

「ん？」

「あのさ、巻き込んだじゃって悪かったな」

「いや、こうなったのの何割かは俺のせいだから。まあ、謝るんならあいつを1人で叩き伏せてくれるとありがたいね」  
「へっ！任しとけ！」

単純な才人君は二つ返事でポコポコにされにきましたとさ。悪いね、ここでガンダールヴ見せ付けとかなないと先の展開がな、あれだから。

「お、たたき薔薇のワイン漬けからのお言葉だぜ」

ギーシュが尊大な態度で口を開く。

「取り合えず逃げずに来た事は誉めてやるうじゃないか」

薔薇を弄りながら歌う様、ね。ふとあの薔薇を使って「モンモラ  
ンシーは…僕が…好き…嫌い…好き…嫌い…嫌い…だと…!?」と  
暗い部屋でやってるギーシュがリアルに頭の中に浮かんだ。…ふっ、  
ことここに至ってなおこんなビジョンが出てくるとは…俺の中の  
ギーシュのイメージは揺るがない！

「誰が逃げるか。お前なんか俺1人で十分だっつもの」

準備体操か？才人。滑稽だぜ。

ギーシュ、一々反応してたらキリないぞ。お前は才人ハーレムの中  
中に飛び込む事になるんだから肝は太くな。

「そうか、まずは君からか。さて、じゃあ始めよう」

その瞬間駆け出す才人。そこそこ速い。

が、ギーシュが薔薇を振るうと、花びらが一枚散り、それが空中

でなんかして、甲冑を着た女戦士の銅像、ワルキューレになり、才人の前に立ちはだかった。スゲー。等身大で見ると超スゲー。石を真鍮になんてめじゃないぜ、見た目は。あ出た！輪郭に沿って光がキラリンツと移動する演出！等身大で見れるとは！そっちのがスゲー！

あーあ才人、立ち止まらずにそのまま回り込んで叩けば良かったのに。

「な、なんだこりゃ！」

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。よもや文句はあるまいね？」

「て、てめえ……」

「ああ、言い忘れてたな。僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ。従って青銅の『ワルキューレ』が御相手するよ」

「えっ？」

ワルキューレが走る。さっきの才人なんぞよりずっと速い。

拳が才人の腹にめり込んだ。等身大で見ると痛そうだが、すまん才人。本当は俺の魔法で何とでもなるんだが、仕方ない。

「げふっ！」

倒れる才人。激しく咳き込んでいる。

可哀想すぎる。だかここで俺が出たら有耶無耶になる。抑えろ……

……。ふと周りを見渡すと、どいつもこいつも嘲笑、冷笑。

いくらか予想してたが、しかしこいつら本当に人間か？なんであんな画みて平然と笑ってやがる？

「なんだよ、もうおわりかい？」

笑い声、笑い声。なんなんだよこいつら！人間捨てちゃってんの

！？等身大で聞くとムカつくどころじゃないんだけど！

そこで群衆を掻き分け掻き分け現れたのはお馴染み、桃髪おチビ。

「ギーシュ！」

「おおルイズ！悪いな、君の使い魔をちよつとお借りしているよ！」

「良い加減にして！大体、決闘は禁止じゃない！」

「禁止されているのは貴族同士の決闘であつて貴族と平民の決闘はだれも禁止してなどいない」

「そ、それはそんなこと今まで無かつたから……」

「ルイズ、君はその平民が好きなのかい？まあ安心したまえ、僕もこの後もう1人予定があるからすぐ終わらせてやるよ」

そう言つて俺を見るな！ギャラリーもこの画でわらつてんなよ！  
つてか赤面ルイズ可愛いなあ！

「だ、誰がよ！やめてよね！自分の使い魔がみすみす怪我するのを黙つて見てられるわけ無いじゃない！」

「だ、誰が怪我するつて？俺は、まだ平気だつつの」

立ち上がる才人。

もつやだ、見てらんない。朝安易にサイトvsギーシュ見たいとか言つたけど無理！痛々しすぎる！それが主人公の風格つてか？

「サイト！」

「……へへへ。お前やつと俺を名前で呼んだな」

「わかつたでしょう？平民は絶対メイジには勝てないのよ！」

「ちよ、ちよつと油断しただけだ。いいからどいてる」

才人はルイズを押しやり、ワルキューレに対峙する。

「おやおや立ち上がるとは思わなかったな。手加減がすぎたかな？」  
才人を挑発するギーシュ。ギャラリーからはなおも嘲りが聞き取れる。

才人はギーシュに向かって歩き出した。ルイズがそれを追い、肩をつかんで制止させようとする。ルイズも必死だな。

「寝てなさいよ！バカ！もしかしたらもう1人の方が勝つてくれるかもしれないじゃない！どうして立つのよ！？」

俺を引き合いに出すか。それこそ止まるわけがない。

才人は肩をつかむルイズの手を振り払った。

「ム力つくから」

「ム力つく？メイジに負けたって恥でも何でもないの！こんな下らないことで死ぬ方が「うるせえ」……え？」

「良い加減ム力つくんだよね……。メイジだか貴族だか知らねえけどよ、お前ら揃いも揃って威張り腐りやがって。魔法がそんなに偉いかよアホが」

この時点でギーシュの笑みはなんか違ってきてるよな。周りは相変わらず人間味のかけらもない嘲笑だが。真面目に死ねば良いのに。

「やるだけ無駄だと思いがまあ……。こうして彼もやる気なのだし、殺しはしないからポーシヨンでも持って来て下がっていたまえ、ルイズ。」

ああ、もう1人の君、暫く彼に付き合ってから君の相手をするから、もう暫く待っていてくれ。逃げたいならそれでも構わないけどね」

「どこ見てんだよ雑魚が。全然効いてねえし、そんな弱い銅像俺一

人で十分だ」

あ、ギーシュがキレた。ワルキューレの右パンチが才人の顔面に襲い掛かる。的確だな。

吹っ飛ぶ才人。思わずハツと息を飲む。助けようとして足が前に出る。ってかさつきから……なに動揺してんだ俺？所詮物語だぜ？勝つと分かってたんだぜ？

鼻血を流しながらもよろよろと立ち上がる才人をそれでも殴り飛ばすワルキューレ。二発、三発と拳が才人を捉えるたび、「ザマミロ平民」だの「いつまでやってんだよギーシュ」だの聞こえてくる。その度に俺はムカつきを増してくる。これのどこに笑う要素があるだよ。

また立ち上がり、殴り飛ばされ、吹っ飛ぶ。

更にまた立ち上がり、殴り飛ばされ、吹っ飛ぶ。

立ち上がる度才人の出血は酷くなっている。鼻に加え、口からも頭部からも血を流し、服もボロボロ、体もガタガタ。それでもまた立ち上がり。

すると誰かが俺に声をかけてきた。

「よく見てろよ平民。お前もすぐあなるんだからな」

……。

ええい！もういい！

俺は声をかけてきたそいつを殴り飛ばした。：初めてマジに人を殴ったが、かなり手が痛い。さり気なく痛む右手を隠しながら左ポケットから杖を引き抜くと、また才人を殴ろうとしていたワルキューレに向かって呪文を唱える。

「インペディメンタ！ 妨害せよ！」

杖先から迸る閃光、吹っ飛ぶワルキューレ。驚いた顔で周りを見渡すギーシュ。

「何！？誰だ！神聖なる決闘に横槍を入れたのは！！！」

しかし、俺はギーシュは無視して、才人にむかって歩く。才人は倒れこんでいた。近くで見るとますます酷い。鼻も若干曲がってるし、出血は更に酷くなっている。

「何だ！まさかお前が今の魔法を！？実はメイジだったのか！？」

そのギーシュの叫びで一気に騒がしくなる群衆。

「だいたい食堂でもおかしいと思ったんだ！！流れて忘れていたが、そつえばなんだったんだあの登場は！？」

あの不自然を流れだけで忘れるとは、大した器だ。しかし煽りを受けて騒めく周りはやかましい。まったく、これだからモブ共が。

「おい君！せめて答えて、やかましい！！」っ

うるさく食い下がるギーシュをあしらい、才人に俺は言う。

「才人、終わりなら俺に代われ。お前の分まで叩きのめしてやるから俺に代われ」

「…は？」

「俺、決めたわ。いいや、もう開き直って好きにやってやる」

「ア、アスラン？」

才人はかなりギリギリの声で俺に声をかける。  
俺はいいたい事を言ってる。

「良い加減ムカつくって言ってたな、才人。俺もだ。どいつもこいつもあんなイジメを平然と笑ってやがって。いい加減限界だ。ウザいから取り合えずギーシュからぶつつぶす。だから終わりなら代われ」

ルイズが近寄って来た。

「そうよ……アイツもそう言ってるんだから……もう、やめて……」

嗚咽をこらえる弱々しい声だった。

才人は何度か声を出そうとしてひゅっとなんか音が抜ける音を出していたが、やがて声を出した。

「泣いてるのか？お前」

「泣いてないわよ……っ、誰が泣くもんですか……もういいじゃない、あんたはよくやったわ。こんな平民見たことないわよ」

モロツンデレ、モロ泣き。もう完全に二人の世界だ。と、不意に才人が顔を歪ませる。

「いてえ」

「当たり前じゃないの。なに言ってるのよ今更」

ああ、やっぱり根はいい子だなあ、ルイズ。

そこで、とりあえず俺は後回しにすることにしたらしいギーシュから声がかかった。

「……で、結局どうするんだい？代わるかい？」

「そうするつもりだったけど気が変わった」

「サイト！」

まだやるらしい。好きな女に泣かれたら漢として本懐を遂げたいか。流石主人公、そこに痺れる憧れるうっ。ま、しゃあないな。

「OKだ、才人。存分にやれ」

いいながら俺は杖ごと手を右ポケットに突っ込み、

「アクシオ 剣よ来い」

と、唱えながら杖を引いた。

俺が杖を持つてる事に対してか、ポケットから出て来たものに対してか、周り中から息を飲むこえが聞こえてくる。

右ポケットから出て来たのは大きく美しい銀の十字。柄に大柄のルビーが嵌り、繊細な装飾の施された逸品。

そう、それは真理との取り引きで得た、「ホグワーツ魔法魔術学校の4人の創始者縁の品」の一つ。

勇猛果敢な騎士道を志した創始者の1人、「ゴドリック・グリフインドル」縁の品。ハリー・ポッター本編において、鍵を握るアイテムの一つ、『ゴドリック・グリフインドルの剣』。

俺はその剣を才人の近くに突き刺した。

「使いな。貸してやるよ」

「ちよっ！ちよっ！」

ルイズが抗議の声をあげるが、才人は剣を暫し見たあと、ソレに手をかける。

ギーシュがしたり顔で語り出した。

「なるほど、剣か。平民どもがせめてメイジに一矢報いようと磨いた牙。うってつけというわけだ。君、まだ僕とやる気があるなら立ち上がり、その牙で噛み付いて来たまえ。でなければ一言、ごめんなさい、だ。それで手打ちにしよう。さて、どうする？」

「ギーシュ！」

剣に手をかけた才人はそれを手摺がわりに立ち上がるうとしていた。

しかし、ルイズはそれを止めようとする。

「だめ！絶対だめなんだから！それを握ったらギーシュはもう手加減しないわ！それにあんたもなに考えてるのよ！こいつを止めてくれるかと思えばこんな！」

俺にまで抗議してくるルイズ。しかし俺はルイズに答えず才人に問う。

「いけるか？」

才人は答えず、剣の柄をギュッと握り締める。

「俺は元の世界にや帰れねえ、ここで暮らすしかないんだろ」

呟くような才人の声。その目にはルイズも俺も映ってはいない。だがハッキリとした意思が感じられる声だった。

「そうよ！それがどうしたの！？いまは関係ないじゃない！」

ルイズはグツと才人の手を握り締める。  
才人は続ける。

「使い魔でいい、寝るのは床でもいい、飯は不味くたっていい、下着だって洗ってやるよ。生きるためだ、しょうがねえ」

そこで言葉を切り、才人は拳を握り締めた。爪が食い込んでいるのがハッキリ分かる。

「でも……」

「でも、何よ……？」

「下げたくない頭は下げられねえ！」

その言葉とともに才人は立ち上がり、その気概に応え、ルーンもまた輝き出した。その輝きが、銀の剣を眩いぐらいに煌めかせる。

「……？」

才人は自分の体を不思議そうに見ていた。確か体が軽くなり、痛みもなくなっただけだっけな。才人は左手のルーンを見た。次いで剣を見、俺を見る。

俺は声をかけた。

「考えるのはあとだ。俺の分まで暴れて来な」

ややあつて才人は頷き、言った。

「これ、借りてく」

ギーシュは冷笑を浮かべて才人を見ている。

「まずは、褒めよう。ここまでメイジに楯突く平民がいることに素直に感激しよう」

薔薇を振るうギーシュ。才人はそれをじっとみている。  
ルイズが俺に向かって怒鳴る、

「あんたのせいよ！あいつが死んだらあんたのせいなんだから！」  
「安心しろ、神、つうか始祖？に誓ってそんなことは起きねえから  
使い魔はメイジの分身なんだろ？なら信じてやれよ。あいつはお前  
なんだから」

「……」

ワルキューレが才人に向かって突進する。

それを目前に、才人は消えた。剣の銀の光がその場に残されてい  
る。

ギーシュは目を剥き、ルイズやギャラリーは混乱する。

「なに！？」

「え？」

「どこだ！？」

「消えたぞ！」

「上だ」

俺の声で皆が上を見るのと、才人が剣を大上段に振りかぶって降  
ってくるのはほぼ同時だった。適当に言ったらマジだったぞオイ。

銀の十字が縦に弧を描き、ワルキューレは脳天から紙のように切

り裂かれ、崩れ落ちた。

「なっ………!!」

ギーシュが呻く。

その呻きの余韻も消えぬ内、才人が銀のラインを残しながら、と  
いうか寧ろ銀のラインしか残さず、ギーシュに突っ込んだ。

「っ!!」

ギーシュが薔薇の杖を大きく振るうと、花びらが舞い、6体のワ  
ルキューレが現れる。

しかし、才人は止まらず、剣を居合の様に構え、あるうことか更  
に加速した(様な気がした。早すぎて見えやしない)。

ワルキューレたちが才人を取り囲み、踊りかかる。

刹那、一気に5体が細切れにされる。その場に残されている銀の  
ラインから太刀筋は見てとれるものの、剣は全く見えない。

かくゆう剣をあたえた俺でさえ啞然としているのが自分でも分か  
る。ビビった。どうなるか知っていてもああいう活劇は惹きつけら  
れる。同じ土俵にたつて見ないと、この凄さは分からない。

太刀筋の銀のラインがオーラの様に無言の才人を取り巻き、あり  
得ないぐらいかっこいい。

ギーシュは咄嗟に最後のワルキューレを盾とするが、次の瞬間そ  
れも通り過ぎた銀の一閃によって真つ二つになる。

ギーシュは、顔面に才人の蹴りをもらい、吹っ飛んだ。

才人は跳ぶ。

ギーシュは、顔に恐怖を浮かべ、呆然としている。

そして、才人の手で、ギーシュの顔の真横に、銀の十字が突き刺  
さった。

才人は問うた。

「まだやるか？」

当然答えは

「ま、参った」

だろうな。

決闘は、生徒の大方の予想を裏切り、才人の勝利という形で幕を閉じた。

**決闘・薔薇と伝説・始祖の盾と創始者の剣（後書き）**

これがブラッディのやりたかった事のひとつ。

才人がグリフィンドールの剣でギーシュを倒す。

書いて満足。（ ） 満ち足りた顔

だが結局大した原作介入はせず。

ま、まあここからここから。

以上、御意見御感想お待ちしております。

薔薇戦、次いで狸・泥棒三つ巴戦？

「まだやるか？」

「ま、参った」

一寸あつて。

わああーっ！やるじゃないか！あの平民勝ったぞ！なかなか平民も捨てたもんじゃないな！もしかしてあの剣のちからか？きたわ！  
久々にこの身を焦がす感じ！燃えたわ！

いやあ、見事な勝利でした。流石、主人公様は違うねえ。

剣から手を離れた才人はこちらを向き、歩き出す。ルイズも駆け出す。

崩れ落ちる様に才人は倒れた。

「サイト！」

駆け寄ったルイズが支えようとするが支えきれず、才人は派手にぶっ倒れた。

一応見てみるが、ボロボロではあったがまあ大丈夫だろう。

俺はギーシュに話しかける。

「どーだ、才人は強いだろ？」

「……はつきり言って信じられないよ。僕のワルキューレを全部あもスツパリ倒すなんて」

ギーシュは呆然とした調子で言ったあと、才人と俺を交互に見る。

「彼は、いや君もだ。片や平民の身でメイジを圧倒する達人級の使い魔、片や小さなポケットからあんな剣を出し、おまけに実はメイジ。二人とも一体何者なんだい？」

調子が戻ってきたらしい。声と首を振る仕草に「らしさ」が出てきた。

「才人は……そうだな、伝説、か？」  
「伝説？」

怪訝そうな顔のギーシュ。俺はギーシュの傍に刺さったままのゴドリック・グリフィンドールの剣を見る。

「その剣は『ゴドリック・グリフィンドールの剣』。確かにそいつはただの剣じゃない。自らを強化するものを斬る事で吸収する力がある。が、身体的能力に影響したりとかはない。つまりワルキューレを殲滅したのは才人自身の力だった」

ギーシュは納得したような苦笑い顔だ。

「なるほど。つまり彼は身一つでメイジを圧倒して見せたわけだ。確かにこの一件はトリステイン魔法学校で伝説として語り継がれるだろう」

伝説の受け取り方が違うがまあ、いいだろう。改めて考えてみればギーシュって才人の伝説の始まりの人なんだよな。ある意味名譽じゃないか。

そんな事を考えていた時。

「ああもう！おもいのよ！バカ！」

釘m、じゃない。違う、ティo、いや違う違う、夏りn、いや間違い、ナg、でもないっ、アル、じゃない！シヤn、いや違う！神rいやちがああああっ！これはルイズの声だあああ！ってか大してファンでもないのによく一瞬でこんなに出たな！釘宮cvキャラ！むしろアル声よりエド声が好きですっでどうでもいいわああああっ！！

……コホン、ルイズの声だ。

ギーシュも俺もそっちを見ると、才人の倒れ方が違い、ルイズが困った表情をしていた。

俺はギーシュに言う。

「まあ、俺的には二股かけるのは特に悪い事だとは思わん。愛の形は人それぞれとも言っしな。遊び半分で相手の人生滅茶苦茶にする奴もいるんだから、一応両方とも真面目に相手してて、本命も決める今回の事なんて可愛いもんさ。だが、振られた八つ当たりで半殺しは悪い事だとは俺は思う。自分で責任取れる様になれよ、上に立つ者なら。つうわけでギーシュ、才人に謝る気があるならとりあえず背負うなりなんなりして運んでやりな」

「そう…だね……。うん、わかった、彼を送ろう。レビテーションくらいならまだ出来るさ」

俺はギーシュにニヤツと笑いかけ、剣を引き抜くと、ギーシュを伴ってルイズに近づいて行った。

「どーよ、才人の様子は？」

「何よ、っていうかギーシュ！」

ほとんどヒステリックな悲鳴の様な声でギーシュを呼び、ギーシュはルイズの形相にビビり、小さく「レディに名前を呼ばれてここ

まで嬉しくなかったのは生まれて初めてだ…」と呟いた。

「どうしてくれんのよ！私のたった一人の使い魔こんなにして！」

「すまないと思っっている」

「…え？」

「あの時の僕は貴族じゃなかった。まったくどうかしてたさ。人の親切を無碍にあしらい、拳句振られた八つ当たりをするなんてね。彼に謝る前に主人の君に謝りたい」

そしてギーシュは深く頭を下げた。

「本当に申し訳なかった」

そのギーシュはついさつきまで振られた八つ当たりで人一人半殺しにした男と同一人物とは思えないほど清々しく、真摯であった。

ルイズも周りの野次馬も啞然としていた。「あのギーシュが」「平民をボロボロにしたから」「ゼロのルイズに」「頭を下げた」「ことがよほどシヨックだったのか、皆微動だにしない。

俺を剣をポケットにつっこみながら、才人の近くにしゃがむ。

才人はとてつもなくひどい顔をしている。鼻は形が微妙に変わり、口も切り、目は腫れ上がり、顔は血まみれ、体はボロボロ、無意識に腹を抑える様に丸まっている。

俺は才人に杖を向けると、唱えた。

「エピスキー 鼻血・唇・目癒えよ、テルジオ 拭え」

「<sup>エレスキ</sup>応急処置用治癒呪文」によつて才人は鼻血が止まり、鼻も形が戻り、唇と目も治つた。そして顔を染める血も「<sup>テルジオ</sup>拭き取り呪文」で俺の杖に吸い込まれ、才人の顔は目の治癒が俺の技能足らずでちょっと粗雑な事を除けば元に戻る。

最後に才人の服に杖を向け、「レパロ 直れ」と唱えれば才人の服も直る。

本当は「ヴァルネラ・サネントウル」っていう素晴らしい治癒呪文もあるが、ちよつとルイズ×才人でイベント作るうかと思つてイベントは多い方が楽しい気がするんだ。

ふと見るとギーシュもルイズも瞠目し、俺を見ている。

「…なににか？」

「重ね重ね君は一体何者なんだ？」

「……え？」

俺が「分からない」って表情を作るとギーシュは一気にまくしたてる。

「いやだつて君！アスランといつたかい！？今のは多分『水』系統の治癒だろう！？さっき僕のワルキューレを吹っ飛ばした魔法は多分『エア・ハンマー』で」

「わかった、もういい、シレンシオ 黙れ」

ギーシュは口をパクパクしだす。

で、それを見てルイズが騒ぎ出す。

「あ！それ！今朝、マリコルヌがパクパクやってたの！あんただつたの！？」

「んなこたどーでもいーから。ちよつと聞け」

「なによ」

ルイズが黙つたので、掌を合わせ、近くにあつたワルキューレの欠片を錬金術で深皿に錬成する。またも瞠目するルイズ達をしりめに俺は右ポケットに杖を入れ、「アクシオ この皿一杯分の『ハナ

ハツカ』来い」と唱えた。次の瞬間俺の右ポケットから液体が噴出し、青銅の深皿に収まった。

で、それをルイズに差し出す。

「強力な治癒系ポーションだ。打撲等傷につけてやれば一瞬で治る。才人につけてやれ。あと余った分は才人に今日中に飲ませろ。内臓にダメージがあるかもしれないから」

ルイズは深皿をなんか複雑な表情でうけとった後、胡散臭げに俺を見た。

「あんた、本当に何も」

「さてギーシュ、才人を運んでやってくれ。フィニート 終われ」

「君の魔法は理解しようとする方が無駄の様だね」

「そういうこつた。ほれ、行っただけだ」

「では、フル・ソル・ウインデ 『レビテーション』、さてルイズ、じゃあ、行こうか」

「せめて答えなさい！」

「そのポーションはマジものだ」

「そこじゃなくて！いやそこもだけど！」

「ほれ、才人をとつとと運んでポーション塗って飲ませてやれ」

「~~~~っ！いくわよギーシュ！」

ギーシュは俺に「やれやれ」みたいな顔をした後、才人とルイズを連れて去って行った。そーいやレビテーションが『風』の呪文って知ったときは軽く驚いた記憶があるなあ。

ふっ、ルイズは気づいていないだろう。「今日中に飲ませろ」が、口移しイベントフラグだという事を……。才人はガンダールヴ初発動の反動で3日は起きない。しかし内臓のダメージを考慮すると今日

中に『ハナハツカ』を飲ませる必要がある。つまり、今日中に『ハナハツカ』を飲ませるには口移ししかないんだ　ふふふふふふ、ふふふふふふ、ふははははは、あははははは！……計画通り……！  
―ここまで宮野c.v.。

そして俺は歩き出した。と

「待つて」

「だが断る」

「待てこら」

親愛なる我が友タバサである。今の静かな「待てこら」かなりキ  
たぜ。いい仕事してるな。

「なにか？」

「説明。あなたが何者か」

あー。

……。

「キュルケは？」

「……」

タバサは「だめだありゃ」みたいな雰囲気である方向を見る。

しかしてそこにはクネクネと身悶えしている、妄想の世界に旅立  
たれたご様子のキュルケさんがいた。ク、クネクネする度にあの  
エロい胸が！腰が！尻が！あああ！俺の股間がああ！二次元の分際  
でええええっ！！

ドゴツ！

頭に重い一撃！流石タバサさん！なんの躊躇も無しにスマートな一喝！そこに痺れる憧れるううっ！

「帰ってきた？」

「ただいま」

コクリと小さく頷くタバサ。

俺は判断し、声をかけた。

「うし、じゃあついて来い」

「どこまで？」

「学院長室」

「なんで？」

「そりやお前、あれだよあれ」

「あれ？」

「就活」

「……」

その学院長室では

学院長室オールド・オスマンと、教師コルベール教授が二人並んで鏡を覗き込んでいた。

と、言うのもコルベール教授が才人に関する推論をオスマン学院長に話していたとき、外に出していた学院長秘書、ミス・ロングビルが「ヴェストリ広場で決闘しようとしている者がいる。教師達で

は止められない、秘宝の使用許可を」との報告が入り、決闘しているのは誰かという問いに対し、「ギーシュ・ド・グラモンと平民の少年二人、そのうち一人はあのミス・ヴァリエールの使い魔」と言ったので、二人はロングビルを出した後、『遠見の鏡』で決闘の様子を監視していたのである。

鏡から映像が消えてから、ややあって、コルベールが口を開いた。

「あの平民の少年、勝ちましたな」

オスマンは答える

「うむ」

「ボッコボコにされてたのに剣を、そう、武器を持った途端圧倒して、ですぞ?」

「うむ」

「ミスタ・グラモンは一番低レベルの『ドット』クラスですが、平民に遅れをとると思えません。そしてあの動き! あんな平民見たことない! いや貴族でもあんなのはなかなかお目にかかれない! やはり彼こそ『ガンダールヴ』!」

「落ち着きなさい、ミスタ・コルベール。そうと決め付けるのは早計じゃろう」

熱くなってまくしたてるコルベールに対してオスマンは意外なほど冷静であった。

「へ? いやしかし! オールド・オスマンもご覧になったでしょう! あの立ち回り! 剣を、武器を持った途端に!」

「じゃからその武器が問題じゃろう。正確にはその武器をミス・ヴァリエールの使い魔に渡した人物が、の」

オスマンの指摘にああ、とコルベールは心当たりに思い当たる。

「そう、ですな。確かに迂闊でした。あの少年のことを解き明かさない限りは『ガンダールヴ』かはなんとも言えませんな」

「うむ」

「にしても何者なんですかね？彼は。かなり高度なメイジであるとは思うのですが」

「分らん。が、彼はミス・タバサに決闘で勝利したほどの腕前じゃ。その正体いかんでは、それなりの対応をせねばならんの」

「ミ、ミス・タバサに勝利……」

狼狽えた様にコルベールは繰り返す。ミス・タバサといえば、この学校において右に出る生徒はいない優等生である。その彼女に勝利とは。。。

「まあ、ミス・タバサの方にも警戒が過ぎて機を逃した場面も目立ったが、勝利は勝利じゃしの」

そのとき。

「オールド・オスマン」

ミス・ロングビルである。

「なんじゃね？」

「例の身元不明の少年が、ミス・タバサを伴い、面会を申し出ているのですが」

「！」

ロングビルの声はあくまで事務的だが、オールド・オスマンからすれば、警戒しようと思心した矢先、先手をうたれたかのような知らせを聞き、晴天の霹靂である。

「ど、どうしましょう？オールド・オスマン？」

コルベールの声も戸惑っている。

それを尻目にオスマンは考える。なんでまたミス・タバサをつれてるのはこの際置いといて、これはある意味彼を知るいい契機ではあるまいか。どの道いつかは直接話すことにするのだし、こちらとしては早いこと結論を出して安心して寝たいところなのだ。

そして、オールド・オスマンは決断する。

「通してくれ」

「ちょ、オールド・オスマン！？いいんですか！？」

「いいんじゃないよ。君らも立ち会ってはくれんかね？ミス・コルベール、ミス・ロングビル」

「分かりました」

「え、ミス・ロングビル？……分かりました」

「決まりじゃな。では、通してくれ」

「はい」

「よいな、ミス・コルベール。出来るだけ穏やかに穏便に話しを運び、洗いざらい彼のことを聞き出すのじゃ。場合によっては拘束し、尋問することも考えねばなるまい」

「……相変わらずため、いや思慮深いことだな」

「ほっほっほ」

「ふふつ、『破壊の杖』を頂く前にまたスゴイのが現れたねえ。あ

の剣、どうしようかしら？持ち主は貴族じゃないし……いや、でも  
やっぱり、こうなると頂かないと『私』の名が廃るってもんぞ」

それぞれが、動き出す

「これでこの世界の収入を確保だあつ！オーっ！」

「………ひるねこ」

「サーセン」

動き出す？

## 就活、力、叫び、就職（前書き）

読者諸兄よ！わたしはかえってきたー！

つーわけで、お待たせしました。

え？待ってない？そんな冷たいこと仰らず、ご覧くださいな。

批判は、あまりひどいのはご勘弁を。やんわりとご批判ください。

## 就活、力、叫び、就職

「まずはようこそ、トリステイン王立魔法学院へ。

私はトリステイン魔法学院院长、オスマンじゃ」

「お初にお目にかかります。アスラン・ド・ヴォルデモートです。

御高名はかねがねうかがつちよります、オールド・オスマン」

ここはトリステイン魔法学院院长室。

様々な調度品が並ぶ中、俺はオールド・オスマンと向き合っている。

オールド・オスマン。顔では穏やかを装っているが、その実俺の様子を伺っているのだろう。：多分。

室内には親愛なる我が友『雪風のタバサ』に、Mr・KOPPA GE『炎蛇のコルベール』、それに、ある時はセクハラに悩まされる美人秘書、またある時は怪盗、またある時は肝っ玉義姉母ちゃん、幾多の名前を使い世を忍ぶワケあり女傑『ミス・ロングビル』その本名：いや、これ以上は言うまい、とにかくこんなメンツがいた。

つか何このゼロ魔の誇るワケありキャラクターのオンパレード。まあゼロ魔で「本当にワケなしキャラクター」つつつたらマルチー親父くらいだけどさ。

まあ取り敢えずそこらへんは置いて、俺はいま非常に焦っている。

この部屋に入るまでは、いや、さっきの会話までは大丈夫だったんだ。だって違和感とって人間味が感じられる様になったって、まだまだ視覚情報は二次元。「所詮フィクションだ」と考えてりゃ十分だよそりゃ。

だがしかし！俺が何よりダメージを受けたのは陽光を反射してソーラービームを放つコルベールでも完全無表情で俺を観察するタバ

サ&amp;mp;ロングビルでもなければ部屋の隅でピクリとも動かないネズミ(多分モートソグニル)でもない。

さっきの会話で囁んだことである。「うかがつちよります」ってなんじゃ俺はハグリッドかヴォルデモート名乗った直後にハグリッドはまずいでしょーが!

ほら見る、頭の中で組み立てた会話計画が即時決壊しちまっただろうが!どうしてくれる!?ねえどうしてくれるのよ!?どうにもならねえ!

「えー、オツホン、本題に入りましょう、オールド・オスマン」

「…あ?あ、ああ、そうじゃったな。ミスタ・コルセット」

「コルベールです。そろそろキッチンと覚えてください」

「ああ、ンンツ、して、何用じゃったかな?」

この人達なりに気を遣ってるんだろうか?それともこいつら素でこれなんだろうか?はたまた俺をペースに巻き込む計略なのか?

いや、もうそれを考える段階は過ぎた。面接練習を思い出せ…面接練習: ははっ、ボロボロだったZE ……あー、面接練習のビデオで言われたことを思い出せ。相手の目を…ムリ、眉間をみて、ハキハキと。

「自分をこの学院に使用人として雇っていただけませんか?」

「…ふうむ、雇って欲しい、とな?」

…いきなり真面目モードに移行しやがった。誰だ、この鋭い視線のじいさんは。

「はい。ここはトリスティン有数の高給職で、職場環境も整っているとのことでしたので」

「ふうーむ。使用人とな。しかし君はメイジじゃ。生徒として編入

することも可能じゃろう？」

「貴族は非常に稀有な例外を除いて殆どがメイジですが、メイジの全てが貴族というわけではない。そういうことです」

「なるほど。」

ふむ、一度話を変えるが、ここは貴族の子女令息、所謂『やんごとなき』身分の者らが過ごす歴史の誉高い場所じゃ。

つまりここはよからぬことを企むものにとっては絶好の狙い目となる。なにせここにおける子らはまだメイジとしての完成をみることなくしても『平民>貴族』としか考えられぬ未熟者ばかりじゃからう。平民のフリして潜り込めれば宝の山じゃよ、ここは。

となれば貴族の子弟の安全には万全を期す為、ここで働くものには相応の『保証』が必要となるのじゃ」

一気に言い切ったよこのジジイ。すげえや。流石真面目モード。

「その保証について、ミス・ロングビル」

かと思つたらこれだよ。なあ、それ、あなたが詳しく思いつかないから他人に押し付けただけじゃないか？

「つまり、貴族に対する相応の礼節、必要な事を貴族よりも先だつて行く気配り、あとはそう、ある程度しつかりした身分証明ぐらいですな」

核心に來たか？しかし…多分この学院の職員で一番身分のしつかりしてないのはあんだだよミス・ロングビル。自分は居酒屋の給仕から引き抜かれただけだろうに。この就職難の御時世に！ムキィーッ！

「うむ、補足説明有難う、ミス・ロングビル。まあ聞いての通りな

んじゃが…それに関して君は問題だらけじゃ」

来たな。

「まずこちらで可能な限り過去に遡って調査をした結果、トリステイン、いやハルケギニア中に、『ヴォルデモート』と言う、領地の名は古今東西なかった」

ここで切って、オスマンはこちらの様子を伺っている。あるワケねーだろそんな著作権でローリングセンスでスリザリな領地。ヤマグチセンスはそんな馬鹿なマネしませんヨ。

「ないからどうだっていうんです？可能性は幾らでも考えられるでしょう。この世界はとて…も素晴らしい貴族の方が一杯ですからね」

「ほほ、耳が痛い話じゃわな。しかし問題は、貴族の子女令息の集うこの学院に、出自不明かつ実力派メイジでもある君を雇い入れるか否かじゃ。もし君ないし君の周囲が貴族の悪意にさらされた経験があつたとしたら、実力派の君は我々にとっては危険な存在となる。ああ、実力派メイジというのも確信がある。気付かなんだとは思つが、私は君がミス・タバサに勝っていたのを目撃しておる」

「オールド・オスマン」

「何じゃね？ミス・ロングビル。話しの途中で割り込まないで欲しいんじゃが」

「それは、見方を変えれば生徒に対する覗「加えてエっ！」…あなたも割り込んでるじゃないですか…」

おい、話の腰を折るなロングビル。

「それに加えて君は我々の預かり知らぬ謎の魔法を行使しておる。始祖ブリミルの広めた法則に則らぬメイジをトリステイン魔法学院

が雇ったとあつてはまた口煩い上に守銭奴などこそその司祭やらロマリアやらが出て来てめんどくさい事になってしまう」

全く正論だね。まさかトップの腹黒主従が出張ってくることはな  
いと思うが、連中が金に汚ねえのはほぼ全ゼロ魔読者の共通認識だ  
し。『異教のメイジ』はいい金蔓だと俺も思うよ。

「つまり君は出自が謎、魔法が謎、実力も未知数と、三拍子そろつ  
ておる。先にも述べたが、貴族の子弟の安全には万全を期す為、こ  
こに働くには『保証』が必要じゃ。君には無いと私は考えるがどう  
じゃな？」

大正解。昨今の就職率低下は伊達じゃないな。

しかし困つたな、別にここに入らなくても原作に関わつていけな  
い事もないが、俺の場合主だった情報源が『この』ハルケギニア  
を擁する地球の記憶』。『記憶』である上、情報屋やなんかの情報  
もこの通信技術未発達な世界じゃスピードは期待できない。

つまり行動は受動的にならざるを得ない。気付いたらオワタ、な  
んて笑えない。

原作通りに事が運ぶことに期待して俺は関わっていかないという  
選択肢もある。

が、俺というイレギュラーが現れた以上、ヤマグチの掌中を離れ  
た世界はなんらかの迷走を始める筈。例えばワルドの『ユビキタス』  
がさらに『ユビキタス』したり、クロムウェルギザツヨスとか、テ  
ファが才人見つけてくれないとか、ヨルムンガントが何時もより余  
計に暴れておりますとか e t c e t c …… こんであれよあれよとい  
う間に大隆起でさよーならー、なんて悲しすぎる。

なにより俺はなんの為にここに来た？原作キャラと遊ぶ為だろが  
！（そうか？

「じゃあ、どうしてもここに入りたのなら、どうすればいいんですか？」

「ふむ…」

むお！？目を薄く鋭く開いたジジイだと！？くそ、本当は出来るやつ見たいじゃねえかオールド・オスマン！か、カッコいいなんて、認めてあげないんだから！

「…では聞くが、君のその異質な力はなんじゃ？君は一体何者なのじゃ？」

その時、タバサがほんの少し、そう、ほんの僅かに、マイクロ単位でピクリと動いた。多分。きっと。恐らく。そんな様な気がした。

まあ、タバサがここにいる理由はそれだからな。

「それを説明したらここに雇って頂けますか？」

「検討してみよう」

頷きながら言うオールド・オスマン。

タバサの興味ありありな視線が痛い。

ハゲの興味ありありな視線がウザい。

ロングビルの猛禽類な目がまー怖い。

「…分かりました。長くなりますが、お話しします」  
「嘘偽りなく」

初台詞なタバサさん。ここでかよ。見ると、「私を騙くらかそう  
つたってそうはいかんぜよ」と言わんばかりにこちらを凝視してい  
る。

「お願い」

あ、ちょっと頷いた。様な気がした。

「へーへー…わかってますよ、親愛なるタバサお嬢様。お前さんはそれが知りたくてここにいるわけだしね。嘘偽りなく、お話ししますよ」

そうそう、嘘偽りなくお話ししますよ。

…誠心誠意、嘘偽りなく、ある程度包み隠して、ね。

中略

「…つまり、要約すると君は異世界の者で、『真理』と言う、ある種の神たる存在による力の発散に不幸にも選ばれ、”ある程度の力を、”もとの世界での自身の存在”、”名”と『交換』で貰い、ここへやって来た。アスラン・ド・ヴォルデモートは暫定的偽名。そう言うワケじゃな？」

「まあ、そうですね」

長かった。長かったがまあ、嘘偽りなく説明し切った。勿論、原作云々は明らかに駄目なので、それに関連して「【ゼロ魔世界】を

こちらから指定してやって来た」ことは包み隠しておく。

オスマンよくあの要領を得ないへたくソな説明をあんな見事に要約したもんだ。

話し終わった後の皆様の反応はというと、オスマンは眉間に皺を寄せて俺を観ていて、コルベールはw k t k が止まらないと言った顔、ロングビルは無表情、極め付けのタバサは目を僅かに見開き、声を出さずに「力…対価…」と呟いていた。馬っ鹿怖いだろヤメレ。

「まあ、異世界の者と言うのはあの特異な魔法からすれば説得力がある。手のひらを合わせただけで錬金ができるなんて私も聞いたこともない。

召喚主不明といっても、『サモン・サーヴァント』はまだまだ謎だらけの魔法。もしかしたらそういう事もあるかもしれない。

…ミスタ・コルベール、そっちはどうかね？」

「え？…あ、忘れてました」

「カァーッ！もう、何をばやばやしとるんじゃ君は！彼に話をさせとる間にディテクト・マジックをかける算段じゃったろうが！」

「も、申し訳ありません…で、では！」

「まったく、そんなんじゃから嫁の来んのじゃろうに…」

……………。

「…で？どつじ」うわあああ！？」な、なんじゃどうしたんじゃ！？」

「凄く…大きいです…」。

そう、精神力 いや、違うのか？いやだがどの道これは…と、途轍もなく…こ、これは、兎に角、なんというかこつ…今まで見てきたどんなメイジもこんな…き、強大な…」

支離滅裂だな。まあそりゃあ、凄かろうな。多分コルベールには

未だ人間の預かり知らぬ地球4個分の強大な『何か』が見えている筈だ。『ディテクト・マジック』が【地球の本棚】の存在まで見えれば。

「ひっ……」

「っ！これは……」

「むう、そんなにすごいのかね？どれ、では私も……『ディテクト・マジック』……っ！？ふうーむ、こりゃ凄い。世界を丸ごと見とるようじゃわい」

……このメンツがビビっている。一見大袈裟に見えるけど大航海時代すら来ておらず、ハルケギニアヨーロッパしか知らない人間が、地球を4個分も見たらビビるに決まってるよな。昔の人々は海ですらおっかなビツクリだったんだから尚更その驚愕たるや、推し量りきれないものがあるだろう。

ま、話が先に進まないから声をかける。

「終わりました？」

「ああ、君は神と取引したとあって凄いな。こちらが圧倒されたわい」

圧倒したんだってさ、オスマンとかコルベールとか。スゴいね俺（棒）

「あれ、もしかして余計雇うワケにいかなくなった、とか言わないですよね？」

「ふうーむ……」

黙り込んでしまったよ。

……。

……。  
……。  
くそ、気まづくなってきたから現実逃避だ。周りを見渡してみる。まず目に付くのは陽光を反射して輝くコルベールの……。ただけハゲネタ好きか、俺。もう自重しろよ。もう放つといてやれよ。可哀想だろ。そんなコルベールは期待の籠った目で俺をみている。はっ、しまった、目を付けられた。

次に目に付くのはミス・ロングビル。なんか考え込んでる様だ。ぶつぶつと「隙を……いや見つかったら……だが質量で……しかしあれは……」なんて聞こえてくる。そういや俺、才人に貸すのにグリフィンドールの剣を出したよな……。

はっ、しまった、目を付けられた。

つ、次に目に付くのはタバサ。……ごっつこっちみてんだけど。それこそ射殺さんばかりなんだけど。瞬き一つしないんだけど。げっ、ビビった、ガン付けられた。

はっはっは、気が付くと周りののが急に怖くなってきたぞ、知らぬが華とはよく言ったもんだな。いや無知は罪ともいっぞ。で、どうしてくれる？

「……君は」

……そういや黙り込んだオスマンの二の句を待ってたんだった。

みれば、オスマンは俺の心まで見通さんばかりにこちらをジッと見ている。

「君は神と『力』を手にする為に取り引したと言った。ならば君はその『力』をもって何を為すのじゃ？私はそれが聞きたい」

……。何を為すって……原作キャラに茶々いれたり、原作キャラ味方に引き込んだり、原作キャラ生還させたりとか……あれ？キャラを

どうしたいってのしか出て来ないじゃん。いや、それしたいはマジだが…。

そも、俺は何故この世界を選んだんだ？そしてこの世界で何がしたかったんだ？

初めはハリポタ魔法やハガレン錬金術でもって暴れたら楽しいだろうとは思った。だがどんな世界だろうがそれは変わらん。魔法的文化があればどこでこれらを使っても楽しいものは楽しいだろう。

じゃあ、何故俺はゼロ魔世界を選んだ？

キャラが気に入った？

でもこの作品のキャラ設定とかつて基本はパクリだぞ？

世界観設定が気に入った？

あんまり楽しそうな世界観設定でもないけどなあ。

敵が一番チヨロそう？

…まあ、そうでもないな。だがこんだけチート持ち込めば勝てん奴などそうは居まい。大体理由がこれでは悲しすぎる。

学校に行く直前まで、心理の扉に飲まれる直前までゼロ魔を読んでたから？

…これ、正解っぽいような…。

…じゃあ自分で選んだつもりで真理に踊らされてた線は？

だが特に誰かに呼ばれたワケでも、この世界が原作から大きく逸脱してるワケでもない。よって俺がここに来る必然性は何もない。すなわち俺がここにいるのは何者かの所為ではなく、間違いなく俺の意志だ。仮に逸脱したとしたら俺がここに来た所為と考えるべきだろう。所謂後付け設定だ。

……。

いや、思考がズレたな。要は俺はここで何をやる？この爺さんになんて答える？

「原作に抗う」？

なんだその厨二。

「何かを守る」？

だからなんだその厨二。

「神のご期待のままに」とでも？

なに！どこの電波だ？「思いの丈を叫べ！」って囁いた奴は！なに？「オリ主なんだからなんて答えたってなんとかなる」う！？馬鹿かてめえは！？

例えば面接で「趣味はなんですか」と聞かれて「ネットサーフィン」と答える。ならばとそこで「どんなサイトをみますか」と聞かれたとする。そこで馬鹿正直に「アダルトコンテンツです」と答える奴はいないだろう？誰もが真面目ぶって「Wikipediaです」って答えるに決まってるだろうが！電波ども、てめえらは「アダルトコンテンツです」と答えると囁いてる様なもんだ！そんな馬鹿なこと言えるわけないだろうが！え？例えがびみよー？ふつ、そんなこと…俺が。

「俺が知るかそんなこと」

…。

やっちまっただ Z E ！！

わーい \* : . . . ( ) ( ) . . . \* ! とつとつ

笑えない事言っちゃまった！これはシャレにならなくて。オワタて。うっかり心の声を出すなんてもののゴツツ初歩的やんけ！

く、空気が、空気が大変なことにイイイイッ！！

「…ふざけるな」

…タ、タバサさん？

「ミ、ミス・タバサ？」

「なんの苦勞もせずあんな…あそこまでの力を手に入れて…それで  
なにもなさない？」

…世界には欲しくても手に入らない力を思っ泣いている者もいる  
…なのに…なのに…なのに貴方は！貴方はッ！」

「ミ、ミミミス・タバサ！？どうしたというんですか！」

やべ、ヤブヘビ！？藪を突いて氷の修羅だした！

「許さない、そんなの…私の数年を…数分で否定して…その力を『  
知るか』…？認めない。そんなの認めない…認めない認めない認め  
ない認めない認めない！」

「ミ、ミス・タバサ！一度落ち着いて…」

「認めてたまるかあああああっ！！！」

キ、キレた…タバサがマジギレした…。マジか…。

はー、はー、と荒い呼吸を繰り返すタバサ。叫んだ為か顔を紅潮  
させ、あのタバサとは思えないほど感情むき出しにしている。荒い  
呼吸と赤い顔だけならいいんだが、目を剥いて怒鳴って、俺を射殺  
さんばかりに睨む姿は、いかんせんヤバ過ぎる。苛烈過ぎる。怖過  
ぎる…。

…っ！？の、呑まれた…絵なのに、所詮キレた絵…なのに…。

と、コルベールがタバサに近付く。

「ミス・タバサ？落ち着きましたか？」

…頂戴」

「ミス・タバサ？」

「アスラン・ド・ヴォルデモート！使わないなら頂戴！その莫大な  
力！私に頂d」

シパアアアンツ！

コルベールの叩きがタバサの頭を揺さぶる。

「好い加減にしないか！そんなに力を求めて、君はなにがしたいんだ！？」

「私は……」

「彼とてなにもなかったわけではないはずだ！彼はもう家族には会えない。仮に帰れたとしても、彼の話が本当なら帰る場所もない。いや、家や家族もあるのに、それが彼を否定する。なんの後ろだてもない状態なら力を求めるしかない。哀しいが世界とはそういうものだ」

「……」

は、ははは、流石コルベール。あの状態からタバサを鎮めちゃったよ。

しかし……家族が己を否定する、後ろ盾がないから力を求める……言われて見ればちょっと似てるな、タバサと俺。

「ふー。あー、ミス・ロングビル、お茶を……ミス・ロングビル？」

ふと見ればミス・ロングビルは俯いている。

そつえばこの人も力無くて泣いた人だったかな。

「……はっ、はい？」

「貴方まで……しっかりしてください、ミス・ロングビル」

「え、ええ、申し訳ございませんわ。で、ではお茶を……」

言って部屋を出ようとするロングビル。コルベールはタバサにも声をかける。

「ミス・タバサ。貴方もミス・ロングビルに着いて、一度部屋を出なさい」

「…」

「いいですね？」

「…」

無言で俺を一度見るタバサ。俺はできるだけ真面目な顔で頷く。タバサはそんな俺を一瞥したあと、ロングビルに着いて部屋を出た。

ドアを閉めた音の余韻も聞こえなくなり、部屋に静寂が訪れる。恐ろしいほどの沈黙にいと、先程烈火の如くブチキレたタバサがフラツシユバツクする。

流石にあれは予想を超えていた。余程デリケートな琴線に触れたんだろうな。あー、怖かった。いまにも発狂しそうだったもんな、あれ。

「…驚いた。あのミス・タバサからここまで本音を引きずり出し、一言で部屋の空気をこつも変えるとは…。君は凄いな、ミス・ヴォルデモート」

なんかオールド・オスマンに感心されたよ俺。  
今度からは口には気をつけよう。  
相変わらず俺を鋭く睨むオールド・オスマン。  
やがて、ゆっくりと口を開く。

「…合格じゃ、ミスタ・ヴォルデモート。トリステイン王立魔法学院は新たな使用人を歓迎しよう」

「…!!」

「えっ!?!マジすか!?!」

「この流れで!？」

「ミス・ロングビルが戻り次第、必要な手続きをする」

「は、はは、スゲーや電波。ほんとになに言っただってokじゃなか。

その後、ミス・ロングビルが戻ってきて、「アスラン・ロイ・フリリップス・ハリー・エド・ヴォルデモート」の正式雇用を決定した。その後も彼のルーンを写したり、ミス・タバサと彼の仲を取り持とうとして室内決闘に発展しかけたのを止めたり、大変だった。そして彼女らに彼を任せ、オスマンと二人、学院長室で向かい合っていた。

「オールド・オスマン、宜しいので？」

「む？彼は何か不満かね？」

「いえ、彼の人間性にはほとんど問題はないと私も思いました。多少、言動が迂闊ですが…。しかし、それでも…」

「ふむ。じゃがの、ミスタ・コルベール。我等も教師の端くれ、生徒の事を考え、采配を下す。これが大事じゃ」

「はあ」

「君もみたじやる。あのミス・タバサが、彼の一言であんなにも激昂しておった。あの彼女にそこまでさせる人間はそうはいまい。ミス・ツエルプストーですらあの様なミス・タバサを見た事はあるまい。」

私はな、ミスタ・コルベール。あの時、彼がミス・タバサの心を激震させたあの時、神に選ばれたという、あの少年を信じてみようと思つたのじゃよ。

あの少年みたいなのもうちには必要かも知れぬ。少なくともミス・タバサも友は多いに越した事はないじゃろう？」

「はあ。学院長の深謀には恐れ入ります」

「さて、あと片付けるべき問題は……」

「ミス・ヴァリエールの使い魔。ガンダールヴ」

『あの剣は、確かに名剣ですが、持ったものの身体能力を上げる様な魔法はかかっていませんよ』

アスラン・ド・ヴォルデモートの言葉が思い出される。

だとするとミス・ヴァリエールの使い魔、彼は本当に……。

「オールド・オスマン！やはり王宮に……」

「その話題はやめにしたはずじゃ。」

奴らの耳に入れればあの暇人どものこと、またぞろ戦など引き起さずじやるう。折角心が通じ始めたというのに引き割かれてしまう事になる。下手したら肉体的に引き裂かれるかもしれん。

よいな、くれぐれも、内々に、じゃ」

今日のオールド・オスマンは何故か別人の様だ。こんなところもあるから私は彼に着いてゆく。

「はあ。学院長の深謀には誠に恐れ入ります」

「ふう、まあ、後はミスタ・ヴォルヴォックスのルーンだけじゃな。」

今日は疲れた。君もゆっくり休むとよいぞ、コンパニオン・エラベル君」

「自重してください。私はジャン・コルベールです。欲望垂れ流しですぞ。あと彼はミスタ・ヴォルデモートですから。あとまだ日は落ちてませんから、仕事なさってください。…ハッ、しまった、ミス・ロングビルのセリフを…」

「ほっほっほ」

翁は笑う。

きつと来るべき、波乱の時代に思いを馳せながらも、せめて今はと…笑う。

「あー、今日は疲れた。あの剣、マジックアイテムじゃないらしいけど、高く売れるのは変わらないね…ふっ、やってやるよ」

怪盗は嗤う。

双月の下、いつかこの手に取るべき獲物を思い…嗤う。

「なあ、タバサ」

「なに？」

「その、さっきは本当悪かったよ。そんなに深い意味はなくてさ、その……」

コクリ。

「…タバサ？」

少女は笑わない。

でも、怒れた。猛り、叫べた。

今はただ…頷くだけ。

## 就活、力、叫び、就職（後書き）

いやあ、はっはっは、ああ、物を投げないで。

ただ、朝方負けた相手が驚愕するほど力をもつてて、あんなこと言われたらいくらタバサさんでも、というかタバサさんだからこそキルんじゃないでしょうか。

だから言おう！後悔していないと！

あっ！ちよ、やめ、ちよ、それはシャレにならな…（没

職業ってやつは、フィクションだからってちっとも楽しくやねえーやコノヤローー  
あけおめアーンドことよろー！今年は二巻位までは進みたい。

今回は短めです。

職業ってやつは、フィクションだからってちっとも楽じゃねえーやコノヤロー

はろろ〜みなさん、こちらはトリスティン王立魔法学院からお届けしています、ご存知、アスラン・ロイ・フィリップス・ハリー・エ・ド・ヴォルデモートです。

メタフィクショナルなお話では明けておめでとございます。元旦くらいフルネームで名乗りますよ。

まあ、それはこちらではソフトタッチにとどめまして、さて現在、時刻はよくわかりませんが、良い子はとっくにお寝んねの時間であることはわかります。

こんな時分になにしてんのかというと、全ての使用人の頂点に立つ、メイド長様と顔合わせという事です。所謂オリキャラですね。わかります。

そんなわけで現在、タバサ嬢と別れ、シエスタさんの先導によって辿り着いた、風塔と水塔の間にある使用人宿舎の多目的室前にいます。そんなんもあるんですねー。

そのシエスタさん。はじめは僕が魔法使いメイジと知って恐縮されていたのですが、メイド長と接見すると聞くとは何か同情的な視線をいただき、メイド長様の武勇伝をお話しいただきました。

一部抜粋すると、

曰く。若く美女だった頃、自身を手籠めにしようとした貴族（後のグラモン元帥）を包丁一本でのした。この敗戦はその貴族をスクウェアに導いたという。

つまり相手さんは戦った時点でトライアングルだった訳だ。これだけで大分バケモンだとわかります。本当にありがとございました。

曰く。三十路超えた頃、とある貴族（後のヒポグリフ隊長）にチ

エスで圧勝。その対局を通し、上に立つ者とは何たるか、部下を持ち、使う者とはどうあるべきかを説いた。この教えは、かの『烈風の耳に入り、絶賛されたという。』  
すげー。チエスで後の兵隊指揮官に勝つとか半端ねえ。

曰く。現在形で学院中の衛兵の誰よりも強い。  
うん、今でも十二分にバケモンだ。その人。

曰く。メイド長就任はオスマンやコルベールを始め、当時の教師や生徒の大半による推薦で決定した。  
この世界観での平民の人事で貴族が推薦とは恐れいる。凄まじい力  
リスマなんだな。

曰く。ギトー先生が顔合わせただけで逃げ出す唯一の人物。  
一体なにしたんだギトーに。

……。

怖くねえ！？超怖くねえ！？めっちゃ怖くねえ！？でも超スゲエ  
っ！！

っていうシエスタの顔は羨望でいっぱいだった。

そりゃスゲエ、とは思うが、正直なんと反応すべきだろうか。だ  
ってやつぱりキャラクターだし。どーもフィクションだと見下す価値  
観が抜けないなあ。

リアクションに困ったがまあ、それでシエスタも俺がメイジ云々は  
どーでもよくなった様で、良かったよかった。

「あ、メイド長、いらっしやる様ですよ」

とのシエスタの声。

「あ、はい、了解です」

「ふふ、じゃあ、アスランさん、私の同行はここまでですので、頑張ってくださいね」

なんかかなり含みのある感じで言われたな。ならばこちらでも。

「才人の様子見に行くんなら気をつけるよ」

含みのある声色でお返し。

だが、多少赤面しながらも奴はニヤニヤしながら去って行った。さて、じゃあ俺はっと、

「検索を始めよう」

その言葉と共に俺ビジョンに展開される白い空間、無数の本棚、見渡す限りの本、本、本……。そう、ここは地球の本棚。我がチート能力の最上級に位置する正に壊れ設定！

実は地球の本棚、ただ無限のデータベースというだけでなく、余程無理な事でなければ、検索しただけで検索した事を習得する事ができる能力なのだ！

ふっ、これがあれば五輪の金だってチヨロいもんだ。一年もあればゼロからでもとれるだろう。

「検索ワードは『トリスティン』『使用人』『作法』……」

さ、予め礼儀作法一色身につけてこつと。

「違う！違うでしょう！腰の角度は…」  
「は、はい…」

結論から言おう、流石にそこまで原作通りにはいかなかったぜ！  
検索して知識はGETしても体得は無理だった！クソウ！  
多目的室内、そこそこに広いこの場所で、俺は地獄の職業訓練を  
受けている！！

メイド長様、御名前は「ミネルバ」。御歳60幾つ、職歴45年  
という、大ベテランであり、元気おばちゃんである。

なんていうか、マクゴナガル先生が萌えとは程遠い、厳格なメイド  
服着てるみたいな人だよ。あ、だからミネルバか、なる。  
自己紹介後、突然の職業訓練。開始直後の第一声は「わたくしの  
元で働く限り、使用人としての仕事で魔法の行使は禁じます」だ。

で、

「あなた男の子でしょう！？何故その程度の荷物が持てませんか！  
」？  
「め、面目ありません…」

シエスタからの情報通り、思った以上に相手手厳しかったヨ！

「なんです？その姿勢は！この学院で働くからにはもっとシャキッ  
となさい！」  
「ひいっ！」

視覚情報的にはやっぱり絵なのに圧倒される存在感！それだけのされそう！

「ほぼ一日中立ち回るのでから、そんな持久力では足りません！もつと鍛えなさい！」

「はいい！」

純日本人中3男子の俺には堪え難い、凄まじい職業訓練！フィクションだと見誤ってた！かなりキツイ！

「誠心誠意尽くします！はい、復唱！」

「誠心誠意尽くしますう！」

「尽くしま”すう”ってなんですか、”すう”って！もつとシャキツと！」

「はいい！」

中略

「まあ、こんな所でしよう。後は明日一日、他の使用人の皆さんの仕事を見学し、明後日から仕事に加わります。いいですね？」

「はい…」

お、終わった…。トリステイン王立魔法学院…：学院長があんな  
んだからよゆうかと思えば…舐めていた。完全に偏見の敗北だ…。

「ではこれ、<sup>休日</sup>虚無の曜日と、<sup>平日</sup>それ以外の日の一日の主なスケジュール表です。基本的にはその日程で進んで行きますが、『フリッジの舞踏会』や、『使い魔品評会』などの年中行事の際には当然変則的かつハードな仕事内容となりますので覚悟してください。ほかにも…」

ああああ、

日の登りきらんうちに起床

各自で身支度なり朝食なり…要は自由時間

その後食堂に集まり使用人朝会

朝の準備体操

洗たくって朝の準備体操！？メイドさんがわんさと集まって！？コックさんもわんさと集まって…。シユール過ぎんだろいくらなんでも…。

まあ、その後洗濯物の回収あるいは朝食用意あるいは掃除あるいは届け物配達あるいは馬の手入れ e t c e t c …

…読めたよ…朝方地球の本棚で検索したからだな。やっぱ知識を溜め込むだけなら問題ないんだな…：ふっ、見ただけで燃え尽きそうだよおやつさん…。

「…以上になりますか…聞いてましたか？アスラン」  
「へ！？あ、その…」

何時の間にか制服が手元に。

…着辛そうだ、あとで着方を検索しよう。

「聞いていましたか？」

「キイテマセンデシタ…」

「全く、すっかりして下さい。近年はオールド・オスマンのご意向でコックと馬番と馬車御者以外の常勤男性使用人の雇用は皆無だったのですから。久し振りの男性メイドとも言っべきあなたにはキツチリキリキリ、働いてもらいますからね」

「その物言いからすると自分は愛らしいメイドさんに混じって配膳とかしなきゃいけないんですね…。だからあんなに厳しいご指導を…てか男性メイドって普通に執事じゃダメなんですか…」

「馬鹿を仰い、あなたの中のイメージは知りませんが、執事とは上位の使用人なのです。あなたのような新入使用人を称するに相応しい呼称ではありません。身の程を弁えなさい。それにあの程度の訓練は皆同じ、いつもの事です。あなたには倍以上の…フフ、覚悟なさい」

「…So Crazy…」

やれやれ、使用人も楽しやないぜ…。

## とあるヒロイン達の今晚（トゥナイト）

暗い部屋の中、一人の少女がベッドにその小さな身体を横たえ、鬱々と考え込んでいた。

少女の名はタバサ（仮）。彼女は先程の学院長室での自身の行動について考えていた。

…やってしまった。思わず叫んでしまった。憤ってしまった。それもあんな人だらけの場所で。くそ、あの日以来、心を凍らせ、自分を修羅とすると誓ったはずだったのに。もう二度と心を震わせる事はしないと、自分を殺したはずだったのに。なのに…。

…否、修羅になりたかったからこそ、あの発言は許せなかった。わたしの数年をものもの十分で否定した力。神と取引したという、あの力。私なら使い道はいくらだって考えつく。だがあいつは…もう、なんだっつんだあれは！ぬぁにが「知るかそんな事」だ！もうちょっとあるだろなんか！ああ腹立つ！！

…と、考えては見たが、彼の状況は分からないわけではない。とつかむしろ、あの場で自分以上に分かる人間なんていないだろう。父が殺され、母が壊され、私は自分の存在、自分の命、母の命を確保するために力を求め、ドラゴンを討つことでそれを証明した。

なら、なんの準備もなしに異世界に飛ばされた彼もまた、自分の存在を確保する、最も手っ取り早い方法を選んだにすぎないのだろう。彼が私に挑戦したのも私がドラゴンを討つたのと大体同じ理屈。能動的受動的かの違いはあるが。

しかしそれならそれでなんで「自分の存在を確保する」と言わなかったんだあの野郎は…。なにか別の、言うに言えない理由でもあったのか？私の様に…。まさかとは思うが普通に馬鹿？馬鹿なのか



タバサがシルフィードの暴言を止めたとき、その部屋の窓には一体のガーゴイルがいた。

それを見たとき、タバサは思った。

…どうやらまた、あの従姉妹から使いが来たようだ。

態々夜中に呼び出しとか、いつも通りの悪意を感じる。ってかあの従姉妹はこんな夜中に何してんだホント。アレかな、夜中に目が覚めて、目が冴えちゃったわ、そーだ、あの人形を呼んでなんかさせよう、おい、なんか死にそーな仕事はあったか？みたいな感じかな。

さて…あの従姉妹はこんどはどんな風に私を辱めようとするのだろうか？どこへ私をやって殺そうとするのだろうか？

静かに立ち上がったタバサは窓枠に足をかけ、心の繋がりでシルフィードに声をかける。

『シルフィ』

『…つきやー、なの。きゅい』

バツ！

闇夜の空に、一匹の竜が飛んで行った。

ここも暗い部屋。双月が照らす室内には、液体の入った青銅の器を片手に、一人の少年の眠るベットの脇で悶々と考え込んでいる少女がいた。

少女の目は少年と器を行き来し、顔色は赤とノーマルをカラータイマーばりに繰り返し、少女の手は暫く胸の前で止まり、ふと息をはいたかと思うとプルプル震える手で器を口の辺りまで持ち上げ、そこで停止して暫くするとまた下ろし、さらに暫くするとまた口の辺りまで持ち上げ、そこで止まり、暫くすると下ろし、また暫くすると……を無限に繰り返す。

少女の名はルイズ。

現在、絶賛葛藤中である。

と、いうのも。

今はルイズの目の前で、ルイズのベッドで寝ている、彼女の使い魔「ヒラガサイト（平民の犬のクセに苗字だなんて生意気な！byルイズ）」が昼頃同級生ギーシュと決闘して、アスランから武器の支給があつて見事勝利を収めたはいいものの、気絶してしまったのは周知の事である。で、ギーシュにサイトを医務室に運んでもらい、アスランから貰ったポーション（ハリー・ポッターシリーズの傷薬『ハナハツカ』）をサイトの全身の怪我に塗りたくり、その効果のほどを実感し、担当の水メイジに『治癒』もかけてもらい、自分の

部屋に運んで来た。

運ぶときにルイズが「わたしが『レビテーション』をかける」と言い出し、「とどめさしてどうすんのよ。私が運ぶわ。私の『レビテーション』は”普通の”『レビテーション』だからね」と、その場に居合わせたキュルケが言った事で一悶着あったが、まあ、いいだろう。

で、そこからが問題だ。

アスランから「一応今日中に八ナハツカをサイトに飲ませとけ」と言われたのを思い出したルイズは、多少可哀想には思ったが、サイトを起こそうと試みた。突つく、揺する、押す、引く、叩く、てい！せりゃ！うおりゃあ！バシッ、ドカツ、ボスッ…あれ、なんか段々ボロボロになってきた…ポーションを、つと…が、一向に目を覚まさない。

ルイズは困った。

だってサイト起きなきゃポーション飲ませらんないじゃない。そんなわけで困っていた。困っていたら何時の間にか大分暗くなっていた。

ああ！夕食食べ損ねたじゃない！あんたのせいよこのバカ犬！

……そこにシエスタという、サイトと一緒にケーキを配っていたメイドが、軽い夕食を持ってやって来た。ルイズ的にはラッキーだった。……サイトの分まで食べてしまったが、まあ、さっきあれ程起こしたのに起きなかったこいつが悪い。うん、きつとそうだ。

……で、だ。

そこで何故かルイズはサイトにポーションを飲ませるのに困ってる旨をシエスタに言ってしまった。

シエスタはアドバイスをする。

「飲まないなら飲ませればいいじゃない。なんなら私がやるうか？

〔意識〕

その方法は！

マウス

・トウ

・マウス。

……で、今に至るワケである。

さーて、困った。

勿論、ルイズが正気なら、もっとマトモな方法を幾らかとか、そもそも医務室の水メイジに『治癒』をかけてもらったのだから大丈夫だとか、結構思いつきそうなものだ。が、満腹感による眠気と心配に加え、シエスタの言葉と、何より”デレ”った考え方が脳ミソを凝固させているのだ。  
デレ、侮り難し。

そんなルイズは最初は「シエスタにやらせよう」と考えた。シエスタ当人も「いいですよ？」みたいな感じだった。が…何故か食器片付けに託けて帰ってしまった。いやなんでええええっ！？と己の真意を問いただしたい位だが、帰しちまったもんはしょうがない。

次に「ま、まあ起きるまで待ちましょう」と考えた。が…いい加減日にちが変わる…。この寝坊助駄犬！…うう、どうしよう…。

で、「どうせ使い魔だし…私、もう契約の時キスしたし…今更…」と、やってみようとした。のだが…なんだろう、気恥ずかしい。”

所詮”使い魔なのに…。

で、口に含むうとしては断念し、断念しては口に含むうとし…。

というようなわけで葛藤中なのである。

……アスランの思惑通りに進んでくれる、大変結構な原作ヒロイン殿であるなあ。

…十分後、とうとうルイズは部屋の中にある机に向かって頭を抱えて考え込んでしまった。

くあああああ…もー、なにしてんのルイズ！やっちまえばいいじゃない！使い魔でしょう！？たかが平民の男の子でしょう！？なんの今更考える事のある！フヌウウウ…。

………だいたいなんなのよ、この使い魔…。私が何回も挑戦してやっとな成功したと思ったら平民だし、貴族なんか知らねー、魔法なんか無<sup>ね</sup>ー、トリステインなんか存知ねー、だし、ただの平民かと思ったらメイジに勝っちゃうし。

それに…そ、それに…そ、そそそそれ、それにいいいっ！

言う間にルイズの顔は赤くなっていく。

赤みはゆっくりと引つ込み、ノーマルな顔色にもどったルイズは器を手に取り、ゆっくりとサイトの眠るベットの脇に近付く。

起きてればポケットとしてるか、だらしないか、憎たらしいか、そ

んな顔をしているサイトは、寝てる今はなんだか可愛い。

「……か、勘違いしないでよ。」

これは治療と…治療と……ご、ご褒美…？そ、そそそつよ！こ、これはあんたがギーシュにかか、か、勝ったごごご褒美なんだから！

だから……」

誰が聞いているワケでも無いのになにやってんだか…。

ルイズは、暫し、双月に照らされたサイトの顔を睨むように見つめる。

そして、少し、口にハナハツカを含む。

再びルイズはジッとサイトを見つめる。仄かな明かりに照らされて、その瞳の輝きは真っ直ぐだ。

ゆっくりと。本当に、スーパースローモーのようにゆっくりと、ルイズの唇はサイトに近づいてゆく。近づくとつれ、ルイズの動きは遅くなっていく。

そして。

月明かりの元。

二つの影は。

重なる



コンコン

「ブフツ！」

ガチャ

「こんばんは、ミス・ヴァリエール？」

事はなかった。

哀れ、ルイズ。いよいよ緊張最高潮のときにシエスタが入って来たせいで、色々ハジけて思わずサイトの顔面目掛けてハナハツカを吹き出しちゃったのである。

……サイト、それはそれでありかな？みたいな寝顔してんじゃねえぞコラ。

で、ルイズは。

「シ、シ、シ、シシシエシエシエシシシエスタア……！」

「ひいっ！な、なんでしよう……？」

まあ、そうなるわな。

「あ、あああああんだねえ！どどどどどおどおどどのタイミングで入ってくんのよ！」

「ええ！？私なにかしましたか！？」

「したわよ！もう、どうすんのよ！盛大にぶっかけちゃったじゃない！霧吹きか私は！！水撒きガーゴイルじゃないのよヴァカ！！」

ガチャ！

「ちょっと、煩いわよルイズ！ヴァリエールは隣人への配慮もできないの！？本当にもう、さっきから何やってんのあんだ！」

また状況をややこしくする奴が来た。

「あんたまで出てくんない！万年発情期のツエルプストーは黙ってナニヤってなさいよ！！」

「何その言い草！！苦情は甘んじて受けて改善していくのが貴族つてもんでしょ！？」

「あんたに言われた苦情改善する時間があるほどこちらら暇じゃないわ！」

「あの、お二人とも落ち着いて、近隣のお部屋の皆様のご迷惑に

…」

「「あなたはちょっと黙ってらっしゃい！…」」

「ええええええ！？」

弁明しておくが、このときキュルケは眠たいのに寝れない、隣の煩さにイライラしていたのである。

まあ、とにかく。

ヒロイン達の夜は、長い。

## アスランの日常：朝の部（前書き）

今回、相当長い上に地の文ばかりでつまらないと思います。色々ご理解ください。

あと今回、オリジナル魔法が出てきます。

まあ無言呪文だっただけでその魔法自体は原作にも登場してますけどね。

## アスランの日常：朝の部

さて、この俺、アスラン・ロイ・フィリップス・ハリー・エ・ド・ヴォルデモート 何度言っても巫山戯た名前だ がよく分からないが真理の野郎に目を付けられ、このファンタジックフィクションワールド『ハルケギニア』に来てから一週間程が過ぎた。

紆余曲折を経て、トリステイン魔法学院の男性使用人として働くことになったので、今日も今日とて一日の仕事があるわけである。そんな俺の日常を追っていこう。

俺の朝は、小鳥の囀りでも、どこぞのSOS主人公のように妹のフライングプレスでも 三年前まではそんなこともあったんだがない、極めてありきたりな目覚まし時計の騒音から始まる

バサッ、バサッ

ツンツン、ツンツン、ツンツン

わけでもない。どーだ騙されたか！ザマア見「ツンツン、ツンツン（ry あて、止め、痛い痛い、わかった起きるから止めて！ そう、俺の朝は不死鳥の突つきから始まる！ 毎度毎度痛い痛い。もうちょっと優しくならないかな、コレ。まあ「痛いくらいに」って俺が注文したんだけどさ。

そんなこいつ、真理に貰ったものの一つ、ペットの不死鳥だ。シルフィードによれば性別はメスとのこと。今は鷹くらいの大きさだ。付けた名前は「ラクス」。その由来には、ハリポタ版不死鳥の生

態というか能力というかが関連している。

フェニックス  
不死鳥。各地の伝説や、ジャンル問わず様々な作品に、様々な設定で登場する幻獣だ。敵だったり味方だったり悪魔だったり聖獣だったり鍵だつり象徴だつたりボスだつたり相棒だつたりするのだが。

「『ハリー・ポッター』シリーズ」版の設定では、生息地はエジプト、インド、中国で、巣は山頂に作る。成長すると白鳥ほどの大きになり、体は真紅、尾は金色で長く、足には鉤爪を持つ。アルバス・ダンブルドア曰く主人に忠実で、とても賢い。草食。

重い荷物を軽々と運べ、全身を真紅の炎に包んでの瞬間移動、強力な治癒力をもつ涙、善人に勇気を、悪人に恐怖を与える魔力をもつ歌、と多彩な能力をもつ。

そんなハリポタ版不死鳥の『不死』とは老いて死期がくると、自ら炎上・焼死し、灰の中から雛となって蘇ること。懐き度だとか癖だとかは持ち越される様だ。

シリーズ本編ではダンブルドアの不死鳥「フォークス」が実利的にも象徴的にも演出的にも随所で大活躍。映画「ハリー・ポッターと秘密の部屋」での「校長室に来たハリーの目前で自ら燃死して、灰の中から雛が出てくる」シーンや「『秘密の部屋』で猛毒をもつバジリスクの牙が刺さつたハリーを、その涙で瞬く間に癒す」シーンは有名だろう。

そんな凄い生物である不死鳥だが、他所の設定のご多聞に漏れず、ハリポタ版でも飼い手はかなり少ない。

ハリポタ版設定では、飼育が困難らしく、その難易度たるやそれだけで魔法生物学的危険度がバジリスクやなんかと同列の最高ランクに位置付けられるほど。この世界に来た後でその設定思い出して焦つた焦つた。下痢状態でえっちらおっちら辿り着いた公衆トイレが全部入つてたときくらい焦つたね。

『地球の本棚』で調べて見たのだが、その「飼育の上での問題」

というのが流石危険度最高ランクというべきかかなりエゲツないもので、そりゃ大魔法使いクラスじゃないと飼えないよなと納得に足るものだった。詳しくは割愛するが、「素手でマグマを取って来い」くらいに考えてくれていい。

それ、なんてムリゲ。攻略不可能のクソゲーじゃねえか、と思っ  
たもんだ。

だが、この世界には『精霊』という存在がいる。

シルフィードに聞いた話だが、この世界の『不死鳥』は、『韻流』や『エルフ』みたいに精霊と交信できる生物なんだそう。一切喋れず、故に呪文など唱えられないのだが、一声鳴けばかなりの高位精霊魔法が行使できるほどに精霊と強い結びつきがあるらしく、飼育の際の諸々の問題点も「そんな問題、精霊の力を借りればちょちよいのちよいなね！」らしい。

…この世界の不死鳥はそれとは別に問題がある様だが。

で、ウチのラクスだが、6日前の夜、不死鳥の世話どーしよーかなーと思いつながらテントを張って、さあ入ろうと入り口を開けた瞬間に凄まじい速度で飛び出してきて、入り口を抜けた瞬間に燃え出して、空高く飛び上がった所で燃え尽きて散った。

…濁り気の無い一条の火柱が空を焦がさんばかりに突き上げ、散って行く様はスゲー綺麗な最期だった。一瞬「え？なに？今のなに？」と惚けたもんだが、空から降ってくる雛を見付けて魔法も忘れて慌てて受け止めに走ったもんだ。

それが俺とラクスの馴れ初めだったわけだが、シルフィード曰く、その時の死と蘇生の際、多くの精霊が手を加えたことよってラクスは「ハリポタ版不死鳥」と「ハルケギニア版不死鳥」のいいところどりになったんだそう。飼育上全ての問題がなくなった。

…なんとというご都合主義展開だと思っただが、まあなったもんはいいや、うん。

で、なんの話をしてたんだっけ？あ、名前の由来か。それは簡単、俺の中では「アスラン」と親しくて、歌声がスゴイといえば「ラクス」なんだよ。意味、分かる人は分かるだろ？まあ元ネタの場合アスランとラクスの上下関係は逆転するんだが。

で、まあこいつの話だが、やっぱりハリポタ版不死鳥だけあって主人の俺に忠実。今朝のような俺を起こす任務もキチンと勤め上げてくれている。主人たり得る何かを示したことがないから心苦しさを感じないことも無いが。

かなり人懐こい性格で、偶に家に遊びにくる連中にもすぐ馴れた。だが、何故か才人には灰や火の粉をぶっかけ、ギーシュは突いて追いつき、オスマンに至っては精霊魔法を使おうとしていることすらある。うんうん、メスとして『女の敵』がキチンと分かっているんだね。偉い偉い。

大体どんな動物とも仲がいいようだが、タバサの使い魔『風韻竜』の「シルフィード」や、キュルケ・フォン・ツェルプストーの使い魔『火蜥蜴』の「フレイル」、あと舎弟として誰かの使い魔のカラスやフクロウを引き連れている姿や、ギーシュ・ド・グラモンの使い魔『ジャイアントモール』の「ヴェルダンデ」やオールド・オスマンの使い魔『ハツカネズミ』の「モートソグニル」を追っかけ回している姿もよく見かける。主従揃って不死鳥に追いかけられて不憫なものだ。

一方、学院内でラクスの存在を知る人間は、俺の知る限り少ない。まあメインキャラクラスは大体みんな知ってるんだけど。

不死鳥だけあって賢いラクスが、効果対象を選別できる高位の透明化精霊魔法を使っているものもあるが、使い魔たちにフレイルが緘口令を敷いているのも大きい様だ。アカデミーから誰も来ないのがい証拠。流石あのキュルケの運命に導かれただけあって、そういう気配りがよく出来る。そこに痺れる憧れる。まあ実際には痺れると

いうより寧ろ燃えるけど。

そんなラクスのお気に入りの場所はジャン・コルベール先生のラボ。なんか向こう側もラクスが気に入っているようで「部屋が明るくなるし、鮮やかになるし、疲れたときにはあの不思議な歌を歌ってくれる。なにより炎が破壊の逆を生み出せることの証明だ！」とのこと。…心中、御察します。存分にどうぞ。でもそのお陰か、コルベールと仲良くなれたし、ラクスグツジョブと言わざるを得ない。

そしてラクスのマイブームは喋る事。シルフィードの通訳ばかりでなく、直接会話がしたいんだそうだ。くっ、なんて健気な奴…！風系の精霊魔法を使えば出来そうなものだが、自分の喉で喋りたいんだと。くそう、可愛い奴めえ…！

でそれがさあ！その喋りがさあ！インコみたいに喋るからもう可愛いのかなのつて…！一番最初に喋った言葉は「アスラン」。ぐがはっ！？仕事終わりの疲れている時に反則だ…！噴き出した茶が喉に詰まって死ぬかと思ったよ…！そんな言葉を教えてるのはコルベールらしく、コルベールグツジョブウウウウツツ…！と言わざるを得ない。でも賢い不死鳥のこと、どうせアンリエッタが来る頃には流暢に喋れる様になつてると思うので今の内に堪能しとこう。…因みに今まで「才人」と喋ったことは無い。「ギーシュ燃える燃えてしまえ燃やしてしまえ」はあるけど。例えその日に冷めた茶をぶっかけられたとしたってそんなにギーシュ嫌いか、ラクスよ。ギーシュ涙目だったぞ。

…大分長くなったな。だが自慢したい時期なんだよ。分かってくれ。あと色々すまん、ギーシュ。

まあそれはそれとして。本編に戻るが。

時刻は4:30。この時間に寝ることはあってもこんな時間に起

きる事なんか前の世界じゃ無かったなあ。我ながら朝も早くからよ  
うやるわ。

周囲を見渡すとやはりアニメチックな風景。この常時3Dアニメ  
ーション状態も慣れたものだ。人間ってすげえ。

そんな俺の部屋だが、来た当初よりも色鮮やかになっている。

というのも。

5日前の仕事終了後、真理に頼んでいた「魔法薬など入れとく用  
倉庫」、その入り口である隠し扉を、キッチンにて『化けの皮、剥  
がれよ』、まあハリポタ版『ダイテクト・マジック』的な魔法で発  
見した。

喜び勇んで入って見たところ、学校の体育館レベルの広さがあり、  
ボウケンスピリッツが刺激されて探検してみたわけだ。分かるだろ  
？家の中に現れた未知、それを探検したくなるこの気持ち。

バカデカイ大鍋が揃ってグツグツボコボコやってたのに引いたり、  
壁の触り心地が完全に大理石で苦笑したり、暖炉を見つけたラクス  
が飛び込んで行って灰まみれになって嬉しそうにしてるの見て和ん  
だりしていると、家具や本なんか山盛りかためて置いてあるスペー  
スがあった。

それこそが、机やら布団やらみたいな全員の部屋に共通して有っ  
たものから、衣類などの当人専用のもの、更に兄貴の工口本に代表  
される、当人が嚴重に隠していたものや、極め付けはゼロ魔の原作  
とか妹や母親の下着と思しきものとか「色んな意味でヤバイもの」  
まで、「元の」俺の家にあって、「今の」俺の家にはないありとあ  
らゆるものだったのだ！！

いやー、最初は狂喜乱舞したね、あれは。完全に無いものと思っ  
てたからさ。こう、下痢状態で辿り着いた公衆トイレが全部入って  
て、ああ、絶対漏れるなと思ってたらその内ひとつがジャストタイ  
ミングで空いた感じ？とにかく嬉しかったさ。

ま、「最初は」狂喜乱舞したそれが全部完全に新品で、誰かに使

われたことのある気配が微塵も感じなかった時はちよつとガツクリきたものだが。こう、折角空いたトイレだが、紙がなくてガツクリな感じ？みたいな。

しかしまあ、有り難いことには有り難いので、とにかく早急に片付けるべきモノを片付け、他は休み時間とかにちよつとずつ片付ける事にしたわけだ。

……女物の下着や服類や化粧品や生理用品などが何故か捨てるに捨てられなくて、でもニューハーフ疑惑は勘弁との信念の元、ゼロ魔の原作とかと一緒に「目くらまし呪文」をかけた上、現時点で使わない筆筒の中に封じ込めたのは黒歴史のいい見本だな。

…あ、あと茶っ葉やらコーヒーやらジュース類やら酒類まで”元の”家にあつた飲み物はあつたけど食い物は無かつたよやっぱり。あの真理め、是が非でも食い物は用意しないのかよ。

とにかくそんなわけで俺の部屋は、PCゲームするためだけに置いたパソコンを始め、色々とモノが増えて、彩り鮮やかになっている。今は俺を起こしに来た不死鳥ラクスの紅と金が加わり一層鮮やかだ。

ラクスを軽く撫で、礼を言ってから俺は立ち上がり、布団を畳む。俺は掛布団は縦横に一回ずつ折り、敷布団は「Z」型に畳み、枕だけはそこに巻き込んだくのだが、他の人はどうだろう。

布団を畳み終えたら机の鍵付きの引き出しに入れてあるMy杖ワンドをとる。…この感触も馴染んだもんだ。

コルベール先生によれば材料は林檎の木。

神話では、「禁じられた果実」を実らせる『知恵の樹』ともされる木だ。

長さ：キツチリ30cm。特徴：良質で優秀。

芯はコルベール先生の調べでは「中々強力な魔力が宿っているね。…ふむ、異世界の杖作り技術、か。実に面白い（某福山風に）」、

シルフィードの調べでは「精霊の気配がするのね」とのことなので、精霊と交信できる何かなのだろう。…マジで精霊が芯になってるワケないよな？

そんなMy杖をパジャマのポケットに入れ、部屋をでる。

トイレで用を足して、階段降りて一階へ。洗面所に行つて、顔洗つたり、髪を整えたりする。うっかりボサボサのまま行つたらミネルバさんがキレたからな、怖い怖い。

そのあと着替えだが、こういう使用人服みたいなのは見てるだけが一番いいよね。微妙に動き辛いんだ、この服。こんどないとはいえ、コスパプレイヤーを見たらイタイ子を見る目じゃなくて、賞賛の眼差しを送ってやろう。でもこれでも改善したんだぜ。これ自体、学ランを改造したやつだし。改めて思う。簡易発動八ガレン錬金術ってチートすぎる。

「鋼の錬金術師」における錬金術つてのは、「錬成陣」を用意し、「理解」「分解」「再構築」のプロセスで発動される。

しかしこれ、使うとするなら相当年月かけて勉強せにゃならんだ。それこそ天才でもまともに使える様になるだけでも数年必要。

何故か。例えば水があるとす。それから酸素を作り出すにはまず水が酸素と水素で出来ていることを「理解」しておく必要がある。それを一度「分解」し、酸素に「再構築」するわけだ。水くらいなら大体誰でも知ってるが、それを凡ゆるものに適用する為にはそれこそありとあらゆる物体の構造を「理解」出来る様、勉強しなければならぬ。その上錬金術には四大元素みたいな割と非科学的な考えすら内包されているのだ。凡人たる俺はこれを網羅するだけでも成人するわ。

さらに、錬成陣を作るのにまた研究を重ねる必要がある。独自に理論を組んで、より自身の特性や知識を活かせるように最適化するのだ。

結論、凡人たる俺には本来手に余る技術だということだ。

が、真理とのThat's チート！な取引の一項「手を合わせ  
て結果をイメージするだけで使える」によって、俺は「理解」する  
段階をすつ飛ばして「分解」「再構築」が行える。

例えば、仮に黒くてガサガサ動く某G虫がいて、妹が発狂する前  
に分解して殺そうとしたとしよう。ハガレン錬金術の法則に則るな  
らまずGを「理解」しなければならぬ。体の構造、構成物質、  
その他諸々。もう無茶苦茶時間と精神的ライフが必要になる。が、  
チートの錬金術師な俺は「Gを理解」という段階をすつ飛ばして「  
Gを分解するイメージ」だけで「分解」出来る訳だ。

結論、俺は天才錬金術師よりもチートな凡人というわけだ。

そして、この超簡易発動錬金術は「ゼロの使い魔」の世界では大  
きなアドバンテージになりうる。

「始祖の祈祷書」に曰く、「この世のすべての物質は、小さな粒  
より為る。四の系統はその小さな粒に干渉し、影響を与え、かつ変  
化せしめる呪文なり。」「四の系統が影響を与えし小さな粒は、さ  
らに小さな粒より為る。神が我に与えしその系統は、四のいずれに  
も属せず。我が系統は更なる小さき粒に干渉し、影響を与え、かつ  
変化せしめる呪文なり。」

要約すると「ハルケギニアの魔法は分子やら原子やらを弄くって色  
々やかすもんですよ」ということだ。まあ何をどう弄いたら『加  
速』とか『転移』とか『世界扉』になるのかサッパリ分からんし、  
この説明だけだとコモンマジックの原理が地味に謎なんだが、この  
際それはいい。

重要なのはハルケギニアの魔法が分子原子を弄くる以上、それは  
同じ様に分子原子を弄くるハガレン錬金術で「分解」が可能である  
ということだ。つまり使いこなせば？フーケ？ワールド？メンヌヴィ  
ル？ジヨゼフ？ヴィットーリオ？カリーヌ？何それ美味しいの？く

らいに無敵の力を持つことが出来る筈なのだ。　　カリーヌが最後なのは仕様です。どーでもいいが多分ゼロ魔で才人が最後に超えなきやならん壁はヴァリエール夫妻、特にカリーヌだと思うんだ。ウチの娘が欲しくば奪い取ってみせい！的なノリで　　話を戻すが、まあ精霊魔法相手では分が悪いかもしれんが、なんならハリポタ魔法で完全に拘束すればいいんだから、俺のチートは揺るがん。

着替え終わったら杖と「トリスティン魔法学院版『忍びの地図』」をポケットに突っ込む。あると便利なんだ、「忍びの地図」。

冷蔵庫から茶を取り出して飲み、入れてある料理から少し自分で摘み、少しラクスにやる。∴しかしどこから供給されてんだろううな、電気とか。あ、「真理の扉」からか。

この冷蔵庫に入れてある料理つてのは、食堂から出る残飯の中で、明らかに全く手を付けてないものをつかっぱらってきたものだ。マルトーさんも出来るだけ食ってやってくれと快くくれます。

しかし残飯はアホみたいに多いのだが、手を付けてないのは案外少ない。一度口付けたらちゃんとお食べなさいとか食べ物を粗末にするとか教わらなかつたのだろうか？∴教わらなかつたんだろうなあ。

人心地ついたら外に出て、周りの人気を「人現れよ」ホメナムベリオ、周りの人数を把握する魔法でチェックし、問題が無い様ならラクスを出して、テントを片付ける。因みに学ランの改造だからこの使用人制服のポケットにも『検知不可能拡大呪文』は活きている。テントを畳んで、「パツク　詰める」つと。

俺のテントは使用人宿舎の横に立てることになっているので、注意しないとラクスを他人に見られる危険がある。ラクスは外に出るまで精霊魔法使おうとしないから。その注意を怠ったために3日前にシエスタに見られてしまったわけで、慎重にならざるを得ないと

いつものだ。

今日は周りには誰もいないな。…お、誰か出てきた。あれは…。

「おはよう、シエスタ」

「あ、おはようございます、アスランさん」

シエスタがいた。いやあ、愛らしい笑顔だ。眩しいぜ。

この娘には本当に世話になってます。一週間前の昼の賄い飯の時  
然り、使用人初日の見学の時然り、給仕の仕事の時然り、ラクスの  
こと黙っててもらうの然り。いい娘だよ、これは。嫁に欲しいくら  
いだ。

「てかシエスタにしては遅くね？」

「ちよつと寝坊しちゃったんです。てへっ」

「うん、可愛いからいいんじゃないかね？てか何時もが早いだけだから、  
寝坊したとて問題はないでしょ」

「可愛いってそんな正面から言われたら流石に照れちゃいますよ」

「ちっ、才人のやつ、同じこと言っても逐一反応が違うのはなんで  
だよ。今のは才人なら赤面してたるシエスタ」

「サ、サイトさんはこの際関係ないですっ。それより、ラクスちゃ  
ん、お喋りの方はどうですか？」

「ん、あれに萌えを見いだしてる俺としては哀しいことに段々上  
手くなってるよ」

「そうですか。スゴイなあ」

他愛も無い会話をしながら本塔前に向かう俺たち。順調にシエス  
タフラグは育ってる様だぞ、才人。ギーシュ決闘イベントは原作の  
流れだったんだが、俺の知らないところで何が起こったんだか。と  
りあえず才人燃える燃えてしまえ燃やしてしまえ。

本塔前には既に大分集まってる様子。こうみるとつくづく思うけど本当にメイドの皆様はモブだろうが誰だろうがレベル高えなあ。現実的に考えてみれば、やっぱり学院の雇用資格には「器量良し」が入ってたりすんだらうな。

「よお！シエスタにアスラン！シエスタは何時もよりちょっと遅いなあ！！」

いつもいつでも元気だなあ、この人は。彼は言わずと知れたコック長・炎の料理人・三ツ星シェフのマルトーさんだ。マルトープロいよマルトー。飯がめっちゃ美味いもん。どっかの道楽貴族でマルトーさんの賄いを食べる為だけに学院で働こうって奴もいたら面白いな。

「おざまーっす、マルトーさん。よくもまあ朝も早よからお元気なことって」

「おはようございます、マルトーさん。今日はちょっと寝坊しちゃうたんですよ」

「へっ、朝だからこそだろ？もっと元気にいこうぜアスラン！にしてもシエスタが寝坊か。なんかあったか？」

「えへへ、実は…」

そんなマルトーさん、初日のころは魔法使いだからか、俺のことあんまし良く思ってた節があった。

しかしその日の夜、残飯となって集められても尚美味そうな料理の山を見ると、余りの勿体なさにとどめても我慢できなくなって、幾つか拝借しようとしたのを見付かって、マルトーコック長の料理についてや、食い物をすぐ捨てる貴族の勿体無い生活について熱く語り合ってから、良好な関係を築いている。

今じゃ残飯の中で手がつけられてなさそうなやつを選別しておい

てくれたり、故郷のレシピを教えて、残飯を別の料理に作り変えて貰って一緒に食べたりしてる。いい人だよ本当。

語り合うシエスタとマルトーをほっぽって周囲を見渡すと、何人かこちらに手を降ったり軽く頭下げたり「おはようございます」と声をかけてくる人がいる。使用人仲間だ。みんなみんないい奴なんだよ。俺も応えて挨拶を返す。

「はいみなさん、注目!!」

と、そんな使用人の人集りにかかる声。

どうやら、来た。恐怖の、そして最強のメイド長、ミネルバさん。今日も今日とてメイド服をキッチリカツチリ着こなして、厳格な顔して凜と佇んでます。いいマクゴナガルっぷりです。

「さて、みなさん、おはようございます」

『おはようございます!!』

「本日は特別に通知する様なことはありません。が、みなさんご存知の通り、明後日には『フリッグの舞踏会』があります」

へえ、じゃあ今日がキュルケの誘惑イベントか。火傷貴族を拾う用意をしとかないとな。…で、明日がデルフリンガー初登場&amp;am p・フーケ始動で、明後日が一巻ラスト、フーケとのラスボス戦となるわけか。早かったなあ。頑張れ才人、君の女難は直ぐそこだ。

「ですので、本日は新しい器材が、当日には新鮮な食材が届きます。院内に運ぶのに人出が必要なので、昼食が終わった後、手が空いている方は運搬門前に集まって下さい」

『はい!!』

「では、みなさん、報告はこれまで!各自距離をとって!!」

使用人、朝の体操である。初めはメイドやらコックやらなんやらかんやら一緒くたになって「イチ、ニ、サン、シ、ニイ、ニ、サン、シ」なんて言いながら屈伸とかやってる余りのシュールレアリスムに腹筋崩壊だったのだが、人間慣れるもので、今じゃ無表情で出来る様になっている。人間って偉大。

と、考えてる間に体操は終わった。

この後は解散して、各自仕事に移る。俺はシエスタとか担当メイドさん達と一緒に院内を巡り、洗濯物を回収して行く。因みに当然だが俺のルートは男子寮。チツ。

そうして巡っていると、ときどき顔見知りと会うのだが…お。

「ミスタ・グラモン、おはようございます」

「…毎度毎度のことなんだけど、何かこう、あちこちが痒くなってくるね、アスランが僕に敬語を使うと」

そう、あの日、才人に倒された後、学院内で立場というか扱いが大分変わった、ギーシュ・ド・グラモン元帥息だ。

当人はあれから、才人やアスランみたいな新しい友人が出来た、これも始祖の思召しさ、と考えているという。ポジティブなやつだなあ。浮気がバレても平然と学校にいるんだもんなあ。そこだけは尊敬してもいい。

近頃はモンモランシーとヨリを戻すべくつきまとっている様だが、悉く空振りしているそう。それはどうでもいいし、いいぞもつとやれとも思うが、毎日のように家にやって来て泣きついて来たり日本語分からなくせにゲームやったりラクスや才人と騒いで帰るのはやめてくれんか。腹立たしい。大体なんだお前、オタマ どんだけ気に入ってたよ。めっちゃ育ててんじゃねえか。聞いた事ねえよせクムと渡り合うオタマ なんて。

「しかしこちらでも仕事中の身でして、今は貴族のガキント、失礼、貴族の御子息と使用人の間柄ですのぞ」

「うん、その失礼な言い間違い、流石アスランだな。」

それはともかくアスラン、君のところのラクスはどんどん強くなつて来てるね。不死鳥も薔薇を愛でるといふのは大変結構だが、美しい花を愛でるにはもう少し力加減というものをだね、って待つてくれ聞いてくれよアスラン!!」

この辺の洗濯物も回収したし、ポケットから薔薇出したあたりから聞いてねえよボケ。

「近頃あの突つっきの所為でどんどん髪がいたんで来てるんだよお!! 頭もどんどんデコボコになってきてるし、ヴェルダンデだつて近頃ぐつたりしてる事が多くなつた!! 見てくれ! 僕のおんなに美しかった髪が今じゃこんなだぞこんな!!」

「かなり鬱陶しいんDeathが! 何がどう変わったんDeathかそのの!! 違いが分かりませんDeathよ自分には!!」

「なぜ分からない! 浮気がバレる前と後くらいの変化だぞ君!!」

「……」

「そのお前はもう、死んでいる、みたいな目を止める! 僕は大人になつて禿げるのなんて嫌だあああああつ!!」

「コルベール教授に謝りなさい、ミスタ・モグラン。それに! あんなに可愛いラクスの所為にするなDeath!」

「いや失礼な! コルベール先生になつてことを! あとモグランじゃなくてグラモンだ! それに可愛いっていうなら僕のヴェルダンデもつてだから聞いてくれつてアスラン!! おおおおい! カムバ―リック!!」

やれやれ、うるさい奴だ。

所変わってここは洗濯場。今日は…うん。

「ハロー、才人」

「おっ、おはよ、アスラン」

黒髪に青いフード付きパーカーにジーンズの原作主人公。ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールの使い魔『ガンダールヴ』の「平賀才人」だ。…こいつ、俺より二つも年上なんだよな。まあそれを言ったらタバサ以外みんなそんな感じなんだけどさ。いかなー、フィクションのキャラクターだからちよつと舐めてる所があるかもな。

彼は現在ルイズの下着類を洗っている所。おい、冷水で苦しいのは分かるが表情表情。やべえそその顔。

「くそ、手えっ、冷てえしっ、布っ、洗いつ、辛えしっ、いつもっ、ながらっ、嫌になるっ、ぜっ!」

「仕方ねえなあ、俺のも分けてやるよ、ホレ」

「ああ、サンキュ。…ってなんでだよ!何気なく自分の担当分押し付けようとすんな!」

「ちっ、ならPSPを返「集中乱すな!色々と敵しいんだから!」

…ふっ、ここに洗濯物集めて、スコージファイ 清めよ、と。ん? どうかしたかい、才人君?

「腹立つうううっ!!魔法使いマジ腹立つうううっ!!俺のこの倍の倍はあるのに杖の一振りとかマジ腹立つうううっ!!」

「気にするな、いつもの事だ」

「いつものことなのがまた腹立つんだよっ!!」

なんてやりながらもせつせと洗濯物を擦る才人。なんて真面目な奴だ。



「えっ、い、いいの？」

「いいよいいよ、魔法みたいな便利なもんは使わなきゃ損だ。今いるメンバー限定だから行つとかなないと損だぜ？」

「とか言つてアスラン、この間も結局全員分「了解した、リサは自分でやると。じゃありサ以外皆」わー！待った待った！！私もお願ひしますつて！！じゃあ皆！やつてくれるつて言うから、お願ひしよー！」

「じゃ、じゃあ、お言葉に甘えて……」

「わ、私のも……」

「よろしくお願ひします」

「はいはい、じゃまたあとで〜」

リサはそうだな、某生徒会ラノベの春夏秋冬ヒロインの夏の娘が髪おろしたときそのもの、とでも言うべきか。初見で「パクリかヤマグチ!？」と言つてしまった俺は悪くない筈だ。中身は割と別物だが。

まあ時々こんな感じでメイドの皆さんとも話しつつ、俺の朝は過ぎて行く。

メイドの皆さんが洗濯物の山を築き上げ、食堂方面に行ったので、洗淨呪文をかけてから才人に向き直る。

「……で、なんだっけ才人？」

「……。まあいいや。じゃあルイズのも頼んでいい？」

「ダメに決まつてんだろ」

「だよな……。じゃあアスラン、お前ん家、おつ化け屋敷敷！！じゃないや間違えた、洗濯機あつたら？あれ使わしてくれよ」

「……あ、魔法使わなくてもそつちがあつたか。盲点だったな」

「このバカ!！」

「だが才人、お前はダメだ」

「なんで!？」

「特に理由はない」  
「横暴だ!!」

そんな感じで俺達は、やいのやいのやりながら洗濯物を片付け、才人は俺に「干しといて」とルイズの服類を預けて去って行った。浮遊呪文を使って洗濯物の山を運び、所定の場所で干し、本日の俺の朝の洗濯終了。

厨房に向かうと、そこは既に戦争状態である。

「おい時間おしてるぞオ!! 気張れよお前等ア!!」  
『応っ!!』

「輪切り薄いぞ! 何やってんのオ!!」

「すいません! 気を付けます!」

「燃える竈、この右手の様に、俺の宇宙コスモの様に!!」

「カイさん吹いて! 火は吹かなきゃ火力は上がりませんよっ!! 吹いてって!!」

こんな具合である。ってか誰だ竈で厨二っぽいことほざいてたのは。まあ厨房二番竈担当のカイさんだから仕事の正しく厨二なんだけど。

食堂は食堂で…

「ワイン入りまあす!」

「はいっ」

「はい椅子急いでっ! テーブルクロスにシミがあるわ、取替えなさい! ちよつとグラスくもってるじゃありませんか! キッチンとなさい! …全くアスランが魔法で洗濯を早く片付けてくれて大助かりだわ。メイジの偉いわねこれでは」

忙しそうだな。てかミネルバさん、椅子に座り込んで悟りきった表情で咳かないで下さいよ。

「お、アスラン！丁度いい！こいつを皿に分けてくれ！」

「あ、はいっ！うお、これはまた…。急ぎですか？」

「おおよ！いつものアレ、頼むぜ！」

いつものアレ。即ち俺の魔法のことだ。最初は「使用人の仕事に魔法は認めない」とミネルバさんから言われていたが、今ではある程度は使用を許されている。というのもも3日前に学院でちよつと事件があつて、ここぞとばかりに散々ぱら魔法使いまくってその件解決したら翌日からお許しが出たのだ。本人曰く「私は昔ながらの功利主義ですので」らしい。

そんな俺の今回の依頼は馬鹿でかい鍋に入ったスープだ。固形なら浮遊呪文なりなんなり使うんだが、液体はキビシイな。ここは…なら…アルヴィーズの石像たち、たのむぜ！

「さあさあ皆さん御照覧！アスラン様の魔法だよお！！いざ！ピエルトーラム　ロコモーター！　全ての石よ、動け！」

その瞬間、食堂にいた何人かが悲鳴をあげたり、息を呑んだりして驚きを露わにした。食堂にあつた「アルヴィーズの石像」が全て台座を飛び降り、俺の前に整列したのだ。

そんな人々にフォローも入れず、俺は石像たちに命ずる。

「石像のみんな！少しずつでいい！わけないが、とにかく皿にスープを分けてくれ！」

指令を出した瞬間石像たちは見事な連携を發揮し、料理を皿に盛り付けて行く。そんな石像たちに俺は追加の指令を送る。

「お前ら、この人達の指示にしたがって動け！いいな！」

見事な敬礼。よろしい、頼むぞ。

作業再開する業務員を見ながらマルトーさんが俺に言う。  
アルヴィース

「すつげーなあ。こいつが所謂ゴーレム魔法つてやつか」

「まあね。他にはどうツスカ？」

「お前ら！アスランが扱き使われてくれるそうだ！メイジを思う存分使つてやれ！！」

ちよつ、言つてねーし！！マルトーさん！！

「アスラン！こつち火力がたりねえ！」

「アイサー！インセンディオ 燃えよ！」

「うおっ！？皿が割れた！アスラン！」

「アスラン！料理酒が足りねえんだ！頼む！」

「レパロ 直れ！エルオギアム 補充せよ！」

「アスラン頼む！シエスタのパンツが見たいんだ！」

「それを待っていた！ウインガーディアム・レビオーサ 浮遊せよ  
！」

「キヤーツ！？」

「おおっ！？」

「もう！やめて下さい！！」

「だってジョンが！」

「それを待っていたって言うてたじゃないですか！！しっかり聞いて  
ましたから！！」

「ごめんなさい！」

とまあ、そんな感じにやりながら料理を運んだりなんたりする。

.....。

おっ、おいでなすったな、貴族ども。今日も今日とて一部を除きマヌケそうなお顔だ。

基本的に貴族が入りだしたら食堂での魔法行使は禁止。貴族に魔法を見せて厄介ごとになるとか勘弁だそうだ。まあ確かにハリポタ魔法はものによっちゃトライアングルスペルとタメはれるくらい優秀だからな。嫉妬でもくらったら面倒だ。今の俺じゃ闇討ちとか対処できないし。だが厨房ではOKなのでどんどん使わせてもらおう。

『偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ。今朝もささやかな糧を我に与えたもつたことを感謝いたします』

そうだよな、その山の様な料理の中でお前らが食うのはほんのささやかなもんだよな。勿体無い。

食事風景など、気持ち悪くなるほど静かだ。流石に貴族か。俺的には給食時間って煩いイメージがあつたんだが、もう慣れたこんなもの。

それにしてもよくあんな重いものを朝っぱらから腹に入れられるな。その上でなんで女子も男子もあんなにスタイル保つてんだ？ハルケギニア人って代謝がいいのか？それとも魔法に使う精神力って実は普通に食い物から採ってんのか？こう、食い物に宿るマナ的なものとか？

しかし、だ。

通常の倍くらい食ってんに、太るでもなくあくまでストン、あるいはペツタンコ、ないしキュッ、キュッ、キュッな完璧幼児体型な夕

バサ

通常と同程度食ってるのに、いやむしろ同程度しか食ってないのにあくまでドカン、あるいはセクスィー、ないしボン、キュッ、ボンな完全色女体型なキュルケ。

しかしそれと同じくらい食っても幼児体型なルイズ。

さらにそれと同じくらい食ってるが脱いだらスゴイモデル体型だというモンモランシー。

彼奴らよりも食す量こそ少ないが、しかしモンモランシーと並び立つスタイルを誇るシエスタ。

ついでにこの場には居ないけど、ルイズより多少多く食べる程度であるうに魔性の色女であり、キュルケに並び立つ体型らしいアンリエッタに、シエスタと同程度しか食ってないだろうが、しかしスタイルがエクスプロージョンかつスターライトデスクトラクションにして滅びの爆裂疾風弾バーストストリームしてるといわれるティファニア。

…なんだ、どこから来てるんだ、この差は。タバサと同じくらい食べてコツコツとデカくなっているマリコル又ってやつもいるというのに。

遺伝？ヤマブチノホル作者の意向？そりやそうだ。だがここはあくまでファンタジーらしい結論を出したいじゃないか。

属性か？『虚無』の力を溜める為に摂取したエネルギーを全て回しているとしたら、ルイズに関しては納得だ。しかし、イメージ的には『火』は代謝良さそう。太りづらいはともかく、スタイルに持つてく分にも回せない様な…しかしキュルケは立派な胸マキステル・チチしてるし…ルイズと同じ様に『虚無』を溜める必要があるそうなティファニアは神々の谷間だし…『水』や『風』なんかイメージも湧かねえし…。却下、かな。

魔法使用量の差か？使わない方が成長するとか？確かにタバサは境遇上よく使わざるを得ない…が、同じ様に、しかも『虚無』をよく使っただろうティファニアは重ねて言うがアトミック・ボンバーだし…小遣い稼ぎの魔法薬作りを重ねるモンモランシーはモデルボデ

イ……。これも違う、か。

精神性の違い？ルイズは基本的には精神的許容量が狭い。堪忍袋の緒が短いともいう。故に物理的にも懐が狭い…キユルケは誰もが知るいい女だ。故に体型にもそれが顕れて…シエスタやティファニアは優しいし、基本は懐が広い。だから……モンモランシーは微妙に金に汚い所もあるが、二股かけられてもなんのかんのあつてもギ―シユを許せる…タバサはそもそも精神性云々の前に心を凍らせちまってる。凍った大地じゃ植物も口々に育たない。だからタバサも育たない……おお！！これじゃね！？これで決まりじゃね！？アンリエツタは…ああ！！こいつたしか精神構造がルイズと大体一緒だったじゃん！！じゃあルイズのようにならないと可笑しいじゃん！！なにこのボインズ・ファイズ！俺の推論を悉く却下しやがって！無インズ・ツインズの身にもなれよ！！

……不毛だ。この上なく不毛だ。やめよう、考えるの。  
ケーキが綺麗に並べられたトレイを見て、ぼんやりとした思考を打ち切る。

「じゃ、そろそろなんで、デザート配りいつて来まーす」  
「あいよオー！」

トングとケーキの乗ったトレイに「ワインガーディアム・レピオーサ浮遊呪文」をかけ、ケーキを落とさない様にバランスをとりながらいい感じの高さまで浮かべる。その下に下腕を添える様にし、一見持つている風を装う。ディテクト・マジックでもかけられない限り意外にバレないんだな、コレが上腕で浮いているトレイを上手く押し、見苦しくない程度に急いで歩いて食堂へ。

デザート配り始める頃には空気が和らいでるので正に給食時間！  
って感じに話し声が聞こえる。が、俺が食堂に入ると、一瞬静まり返り、結構な視線がこちらに向かう。友好的なの、剣呑なの、懐疑

的なの、険悪なの。そして美少年を発見したミーハーなの。

俺の現在のルックスは、メインキャラクラスと並んでも見劣りしないほどの中々のものになったのだ。当然イケメンをみればこの年頃の女の子のこと、反応するに決まってる。しかし俺は動じない。何故ならみーんな二次元だからだ。3Dテレビの登場人物がこちらを一斉に見たつて、軽くヒキこそすれ、どうということはない。

俺は主に男子に配りに行く。念の為言っておくが、俺が望んだわけじゃない。何が悲しゅうて甘いケーキを野郎の皿に乗せていかねばならんだ。この采配に何者かの明確な悪意を感じないこともないが、もういいさ、こんちくせう。

内心血涙流しながらトングでケーキを配って行くと、同じテーブルにいる奴らにギーシュがなんか演説かましていた。

「…と、いうわけだからして、僕はモンモランシーに惹かれたのは自然の摂理だったのさ!」

演説の内容がよく分かる、見事な要約だな。

しかし周りがうんうんと頷き、すごい納得した顔になってる辺り、ギーシュのモンモランシーに関する語りはみごとだったんだろうなあ。

多分俺がモンモランシーなら悪寒奔り、鳥肌総立ちなくらい。

「おいこらその使用人。勘違いするなよ、僕らはただこいつがあんなにモンモランシーに拒絶されてもなお迫り続けるワケが分かっただけで、共感とかしてないんだからな」

「全くだ。別に自分とキュルケに重ねて泣きそうになってなんかないんだ」

「いや聞いてませんから、ミスタ…あーギツクリにミスタ…えーバルタン。あとそういうノリのセリフはミス・ヴァリエールのですか

ら。つーかあんたら俺とそんな話すキャラでした？」

「ギムリにマニカンな。まあなんか心境的に流すけど。よかったな。あとギムリとかは家名じゃないから」

「とうかなに？ノリがヴアリエールなセリフって？」

「「つてかそついやお前誰？」」

「…や、いいですけどね。別に」

つーか俺を知らない奴とか始めて見たよ。自慢じゃないけど、ほんでこの場合むしろ自慢にならないけど、でも割と有名なんだぞ、俺。メイジ使用人とか貴族崩れが入ったとかミス・タバサと喋れる男とか。タバサただけという。てかなに、こいつらまさか見に来てないの？ギーシュと才人with俺の決闘。

「…ところでマニカン、聞き捨てならないことを聞いたと思うんだ僕は。なに？ギーシュのあの話に誰かを当てはめた？とか。自分と？あと誰って？確か…」

「キュルケ、だ…けど…ま、まさか!？」

「おまつ、キュルケの!？」

「てめつ、何時の間に!？」

「くつ、よもやこんな所に…こうなったら…」

「「決つと「いや待て待て待て待てエエエエツ!!」なんだ!？いま取り込み中なんだ!ケーキを置いたら戻ってくれ!!」」

「いや恋敵のクセになにそのシンクロシティ!？早すぎでしょ呉越同舟までの道程が!！てか俺だって戻りたいっすよ!それがなんすかこの流れ!？ツツコまざるを得ないじゃないすか!！」

「おいそこオ!!キュルケがどうしたつてエ!？」

「「エイジャックス!？おいまさかお前も!？」」

「なっ!？まさかお前らア!キュルケの!キュルケのオ!!」

……え、あれ、なんか抜け出すタイミング逃したんですけど。な



## アスランの日常：朝の部（後書き）

お分かりですか？はい、原作「謎のプリンス」（下）でハリーが使った「補充呪文」でした。

これから本作では原作で無言呪文だった魔法や、存在は語られても原作中実際には使われなかった魔法もオリジナルに呪文をつけて使って行きます。

また、必要になれば本作オリジナルの魔法も考えて使っていきたいと思います。

元となるラテン語はGoogle翻訳が頼りですが。（^^；；；

そんな本作ですが、これからもよろしくお願いします。m（|）（|）（

m

## アスランの日常：朝以降の部（前書き）

散々お待たせした割りにはいつにも増してクオリティ低いです。

…しょうがないじゃない！日常パートネタが出て来ないんだから！

## アスランの日常：朝以降の部

ケーキを配り終わったあと、タバサやキュルケと話してから食堂から厨房に戻ってくる。

いや、それにしても、一卷キュルケイベントの意外な舞台裏を見せて頂いたよ。あいつら、原作では恋敵同士三人で現れるなんてワケわからなかったが、あの流れで友情的なものが芽生えた感じになったのか。しかし苗字にツッコんだら「こんなテキストな流れで家の名をかけられるか」とか至極まともな事言いやがったときには思わずプチ切れそうになるのを我慢するのに必死だったよ。うん。

厨房には何時の間に来たのか、才人がいた。今日も今日とてシエスタやマルトーさんとくつちゃべりながら賄をパクついている。

「やい、『我らが剣』！お前さんはどうやってあんな剣技を習ったんだ？」

「だから特にやってないですってそういうの。アスランの剣の力じゃないですか？」

「くうく、聞いたかお前ら！ホンモノってのはこういう、謙虚な奴を言うんだ！いいか、達人は誇らない！！」

『達人は誇らない！！』

「やい、『我らが剣』！そんな事聞いてたら俺はお前がもっと好きになっちまったぞ！どうしてくれる！！」

「マルトーさん、サイトさん困ってますよ？」

飯を食う才人にマルトーさんがハイテンションで迫り、周りがノリ、シエスタが宥める。この画も見慣れたもんだ。

「よ、才人。また人気者だな」

「お、アスラン！頼むからニヤニヤしてないでなんとかしてくれよ！」

「おう、アスラン！なんか怒鳴ってたがどうかしたか？」

「や、貴族どもの痴情の纏れに巻き込まれそうになっただんでちょっとキレただけですよ」

「そこで素直にキレれるところがアスランらしいよなあ」

呆れたように言うマルトーさん。ただし才人を抱擁し、その額に接吻しようとして寸止めた、正にその体勢で。才人はそんなマルトーさんの万力の如き職人の腕の中、「ぐ、苦し、ぢ、死ぬっ、ア、アスラアアン、だじげでエエっ、ご、殺されるううう…」と鶏が絞め殺されたみたいな声で訴えている。やれやれ。

「マルトーさん、言う間に才人を放してやってください。折れますよ、『我が剣』が」

「お？お、おう！だ、大丈夫か！？『我が剣』！」

「つぶはあ！！ぜー、はあ、…かつ、紙一重で…なんとかか…！」

乙。

才人がルイズと授業に行った後、俺はバカみたいにデカイ荷物を運んでいた。ウイングガード・アイテム・レレオーサもちろん浮遊呪文で。

確か『フリッグの舞踏会』の新品の器材は昼過ぎに来るってミネルバさんが朝集会で言ったから、これは違うヤツだな。

さて、届け先は…うん？「ジャン・コルベール」か。じゃあまたコルベール先生のラボかな。

さて、着いた。  
まずノック。

コンコンコン。

「失礼します、ミスタ・コルベール。お荷物が届いておりますが」

…。

……。

……………。

……………。

居ないのか？ よろしい、ならば開錠だ。  
杖でノブを軽く叩きながら。

「アロホモラ 開錠せよ」

シーン……………。

開かねえ。

さてはなんか魔法的なロックかけてやがるな？ 小癪な。  
扉に杖を向けて一呪。

「スペシアリス・レベリオ 化けの皮、剥がれよ」

……………。ふん、なるほど、大体分かった。なるほど堅い。考えてみればコルベール先生のラボは分かる人には世紀の大発明の宝箱だからな。堅牢な結界もまた当然か。

だが！ たかがその程度で俺の侵入を拒めると思うな！  
天井に杖を向け、この場、この空間に魔法をかける。

「マフリアート 耳塞ぎ」

これで音は聞こえまい。

開かぬなら 壊してしまえ 「ボンバード！」

ドオオオン！

開いた。正確には映画ハリー・ポッターオリジナル魔法「粉砕呪文<sup>イダ</sup>」で扉ぶつ飛ばした。映画でシリウスを助ける為にハーマイオニーが牢の扉ぶつ飛ばしたシーンは中々印象に残ってる。

規則？あれはアンロックは禁じてても破壊は禁じてないぜ？屁理屈上等。だいたい規則は破る為にあるって誰かが言ってたからいいんだよ。

「失礼します、ミスタ・コルベール。お荷物が届いておりますが…いないようですな」

タイミング的に情報漏洩中か？…やれやれ、待つて居るのも面倒だ。荷物を置いて仕事に戻ろう。

錬金術で扉を直して、俺はその場をあとにした。

さて、昼食だが…まあいいか。おいしそうでしたまる。あ、まる二つになっちゃったよ。

午後のお仕事だが、俺の仕事はそう多くない。なんと言っても新人で、使い勝手が悪いというか。

そもそも、現実ではどうか知らんが、この世界のこの学院における使用人は、馬番のような日中でなければ都合が悪い奴らや、厨房係のようなほぼ日中しか仕事のない奴ら以外、基本的には生徒達皆が寝静まった夜あるいは早朝の活動が本番である。夜行性なのである。

原作でのシエスタは、仕事ある割に、結構頻繁に才人に言い寄っていたので、大体予想はついていたのだが……いや、あれは戦時シフトだったからか？まあいいや。

とにかく、昼間は仕事がない。

掃除？魔法学院には『固定化』がかかっているので、擦っても擦っても……！っていう汚れは滅多につかない。貴族諸氏は、貴族らしい生活ということ、ポイ捨てなんかしないし、食堂も掃除が必要なほど汚く使う奴もいない。皆が常時外靴だから屋内に土を持ち込むが、それは仕方なかるう。だから掃除なんかは早朝に一通りちやちやっつとやっちまえば大体一日保つのだ。

荷物運び？この学院における荷物というのは、大体手紙の類いか誰かの注文の品か換えの物資かだが、それとて普通、量は多くない。その運搬は、ハリポタならフクロウがやる仕事だが、ここでは使用人が、さもなきや使い魔の仕事だ。量がそもそも少ないのだから、俺にお鉢が回ってくるときは、よほど重いか、さもなきや危険物っぽいつき。

ちなみにコルベール先生宛の物は無条件で危険物扱いらしい。何したし、コルベール。

と、歩いていた俺の体を、突如『ファイアーボール』の魔法が包み……そのまま俺の身体を焼くことなく通過していった。

「『インパーヒアス  
防火・防水』。予めかけておいた、火と水を弾く魔法ですよ。  
ラインごときで破れるなんて思わないで下さい」

「くっ…」

苦虫を噛み潰したような顔をするどっかの貴族。

たまに来るんだよな、俺に決闘挑んで来たり、不意打ちして見たり。

「勝てない相手に不意打ちかける、というのは合理的で、当事者じゃなければ賞賛に値するんですが…」

「ふんっ、ずいぶん余裕じゃないか。ああ、認めてやるよ、僕一人じゃお前には勝てないかもしれないが…」

ザザッ

とばかりに俺の周囲に現れるメイジたち。

「どうだ！この人数じゃお前に負けることはない！」

ざつと十三人というところか。余裕綽々な顔してるな、全員。

しかし、戦うにしろ逃げるにしろ面倒だし…

「…授業はどうしたんスカ、皆さん」

「たった今終わった所さ。お前に思い知らせるために態々速く駆けつけてやったんだ！感謝するがいい！」

面倒な。

火と水は『インバーピラス防火・防水』で弾くだろ？土と風は錬金術でバラして

エクスペリアムス武装解除だろ？徒党を組んでるってことは、それなりに弱いわけだし…

だがこんなところで戦ってみる、まず間違いなくミネルバさんに怒られる。しかも勝ったら勝ったで報復行為に出て来そうだし。

「…一応聞いておきますが、戦いを避けるには？」  
「なんだ、怖じ気づいたか？ならそうだな、僕達全員に調子乗って  
すいませんでしたって頭を下げ『バチンッ』て、っていない！？」  
『姿くらし』である。

そんなわけで色んな描写をすつ飛ばして夜である。  
今日はマルトーさんはなんか用事があるらしく、いつもの料理実  
験会がなかったので、いつもより早く使用人宿舎横にやって来れた  
で、そこには…

「…どうした才人」

寒そうにブルブル震えた才人がいた。

「…ち、ちよつとな…とりあえず入れてくんね？」

ふてぶてしい奴だな、と思いながらポケットからテントを『呼び  
寄せ』し、『立<sup>エレクト</sup>て』る。

杖を空に向け、「ルーマス 光よ」と唱えると、杖先が光り、間  
髪入れずにラクスが飛来し、俺の肩にとまって才人を威嚇している。

「…なんで懐いてくれないんだ…いや懐かないだけならともかく、  
なんで攻撃的なんだ……」

著しくテンションの低い才人を引き連れ、テントの中へ。『光<sup>ルーマス</sup>』

を頼りにスイッチを探し、それを押しして電気をつける。

才人はというと、勝手知ったるなんとやらという奴で、家主の許可もとらずに冷蔵庫を開け、パンをとっては椅子に座り、モシヤモシヤと咀嚼している。

「…で、今日はどうした？」

「実は…」

聞いた話は概ね原作通り、寝言の件だった。

「…お前ってさあ、何気に危ない橋を全速力で駆け抜けるよな」

「しかも今回は完全に無意識だったしな」

ニヘラ、と笑う才人。はあ…と溜息の俺。

「この間の『パンツ切れ込み事故』なんてお前、俺がルイズの記憶を処理してパンツを『修理』してなきや、最悪木っ端微塵になってもおかしくなかったぜ」

「…それは…ゾツとしないな…」

荷物を運んでたら、目の前の桃髪美少女が突然階段から転げ落ちていったから本当にビクリしたもんだ。魔法使って助ける暇もなかったね。駆けつければそこに居たのはあられもない格好で目を回したルイズと、顔真っ青にして恐々それを見つめる才人。後に彼は語る。「あれは流石にやりすぎた。反省はしている。だが後悔はしていない」と。

「で、今夜寝る場所がないから泊めてくれと？」

「そういうこと」

「ギーシュかキュルケかタバサって選択肢もあっただろうに。って

かキュルケなら喜んで泊めてくれるぞ」

序盤のメインキャラクターである才人、ルイズ、キュルケ、タバサ、ギーシュの五名の内ルイズを除くメンツは、実は我が家で既に交流をもっている。なんかルイズはこう、貴賤の柵みたいなものから脱却出来ないらしい。

だから既に才人はなんだかキュルケに言い寄りたりしてるのだが、彼女らしい、火のような攻めはまだ。つまり、今夜、ことが起こる可能性もある。

「いやいや、ギーシュはともかく後者二人はヤバイだろ倫理的に」  
「今更何言ってやがる。ルイズとは同棲状態のくせに」  
「ぐっ、いやあは…いや確かにそういう見方も…いやでもどっちかっていうと…事実上確かにそうだが…あの扱いはむしろ…」

「ペットだな」  
「言っなあ!」

俺のハッキリとした指摘に、涙目で叫ぶ才人。

「事実だろ」

「うわあああああん!!」

泣き出した。楽しい。

「ま、お巫山戯はおいといて」

「…俺は結構マジなんだけど、結構切実なんだけどっ」

「まあ、どうしても言うなら、ウチに泊めてやらんこともないが…」

「急に偉そうだな」

「え、むしろ偉くて当然じゃね?現在の立場的に。まあそうだな、

それじゃ、交換条件として

ふと出入り口を見ると見知った火蜥蜴サラマンダーがこちらをじっと見ている。俺が視線を合わせると、そいつは才人に首を向け、「顔貸せや」とでもいうように、やたらかっこいい仕草で顎をしゃくって外に出る。流石キュルケの使い魔、かっこいい。

その円な瞳は「ちいとうちのお嬢がそのアニキに用があるってんで、お迎えに上がった次第でさア。ひとつ、あつしの顔をたてて協力しちやア、もらえませんかネ」と語っていた。：残業手当貰えてんのかねえ。

しかし他でもない、ラクススのダチ公フレイムの頼みだ、聞いてやるか。

「あれだ、魔法の実験に付き合え」

「……………どんな魔法？」

「『歯肥大化』、『鼻肥大化』、『コウモリ鼻くそ』、『ナメクジげっぷ』、『ポリジューズ薬』変身薬の失敗実験、『フェリックス・フェリシス幸運薬』の毒性実験、『生ける屍の水薬』、それに

「ももももういいわかった！今日は帰る！帰ります！ってか帰らして下さい死にたくない帰らしてエエエエ！！！」

恐怖に引き攣った顔で両掌をこちらに向けて「ノーサンキュー」のジェスチャーをしながらバツ！、と立ち上がり、ブンブンと首を千切れんばかりに振る才人。楽し過ぎる。多分俺、今スゲーいい笑顔だと思う。

「あ、そう？じゃあ、また明日」

心底から残念そうな顔で告げると、才人は「母さん…俺、帰れるかなあ…」と遠くを見つめ、涙を流しながら亡者の如く去っていつ

た。

多分、フレームに連行されたことだろう。

さて…

「ツバサク ニクルの続き見よつと」

と、俺はTVの傍に置いた、DVDの類しか入っていない棚から一枚を取り出し、TVの電源を入れる。

ハルケギニアにはTV局からの電波やなんかは一切通っていないので、ウチのTVは専らゲームとDVDのモニターと化している。

暇な俺は、取り敢えず、我が家にあったDVDやビデオの類を一度全部見てみようと思いついた。

ただ、コッチに来た数々の品は”完全に誰も使ったことがない”という意味の”初期化”を施されているため、ダビングしたDVDなんかは完全にただの空DVDに戻ってしまった。そして、ウチは基本的に放映されてるのを録画・ダビングする派。つまり、見れるDVDはかなり限られているのだ。

ツバサク ニクルはその限られた一つ。兄が熱狂的なCLAMP作品ファンだったので、その関連DVDは完全に抑えてあるわけだ。

ただまあ、これらは奴の趣味の中では数少ないマトモなもののひとつ。彼の本来の趣味は、そんなものじゃない。が、その全貌を明かすつもりも金輪際ない。

そんなこんなで俺の夜はふけていくわけである。

翌日、全身焦げてプスプスと煙を発し、とても可哀想なことになっている男子生徒が複数名発見されたのは正に余談である。原作通りでいいことだ。うんうん。

土くれ、現る

さて、今日は虚無の曜日。

それももう終わろうとしている時分だ。

トばしすぎだつて言つたつて、これといって面白いこともない、普通の休日シフトだったんだからしょうがない。

今俺がなにをしているかというと、

「アスラン、”メン”ってのはこんな感じか？」

「どれ……。ふむ、いいんじゃないですか？」

「そうかそうか！これとこのスープを併せて…出来た！これがアスランの故郷の味第六弾！その名も”ラーメン”か！」

「はい！これがラーメンっス！流石マルトーさん！見事にラーメンっスね！！」

「へっ、褒める褒める！！」

マルトーさんと夜のお楽しみ料理研究だ。

第一弾”スポーツドリンク”、炭酸飲料”、第二弾”ハンバーガー”、第三弾”トンカツ”、第四弾”卵とじうどん”、第五弾”ポテトチップス”、そして今回はラーメンにトライしてみた。

チヨイスはぶっちやけその日の気分です。ジャガイモが毒草として裏路地で叩き売りになってたから衝動買いしてポテチ、みたいな。これらは既に使用人一同及び主要教授陣の味見を経て食堂メニューに入っていて、中々の評価を獲得。特にポテトチップスは、流石ポテチさんと言つべきか異次元の人気振りで、異世界人冥利に尽きるというものだ。

で、今回の”ラーメン”は、異世界食事的事情によりトンコツと塩のみだが、探してみたら家<sup>デント</sup>に味噌と醤油もあったので、量産可能

になり次第、直ちに”かえし”としようと思う。

いつもはタバサもいるのだが、今日は朝からシルフィードに乗って飛んでったのを見てから見てない…あ、いますね、やっぱり。出来もしないくせに箸を使おうと頑張ってますね。ここ一週間毎日ですよ微笑ましい。

……ところで諸君。朝から、具体的には起きぬけにシルフィードに轢き逃げされてから、なんか忘れてるような気がするのだが、心当たらないか？

んー、なんだっけな？絶対思い出した方がいいと思うんだけど…  
…そういえば今日、才人はブタネンネ街に行くって言ってたな。確かデルフ…デルフ……デルフォイ？いやそんなハリポタに居たような名前じゃなかったし……デルフィニウム？あ、これ当たりじゃね？とかいう剣を手に入れるハズ……となればもう巻末ボスが……ああっ、もう！！記憶がトンだ時点で原作読み直しときゃよかった！俺のバカ！！

とか考えながらラーメンを啜る。美味い。「このトンコツのコツテリした感じがたまりませんなあ」「ん」「全くこんな旨いもんがほいほい出てくるんだから、アスランの故郷にや一度でいいから行ってみたいねえ」「同感。お代わり」「あいよ」とかやってたら。

「…」

不意にタバサが顔を上げ、外を見る。俺もつられて見て見ると…

…二人の人間が向き合い、両者間の等距離点に、まるでレフェリィのようにまた一人、という隊形で三人の人影が。双月のために割

と明るくても距離があるため顔かたちがハッキリしないが、向き合う両者の片方は女性で、片方はチビ、そしてレフェリー役が困り果てるのは分かる。

「……」

無言で立ち上がったタバサは、マルトーさんから受け取ったお代わりの塩ラーメンを、駅の立ち食い蕎麦屋のおっさんやピンクの球型星の勇者もかくやという、バキュームの如き恐ろしいスピードで吸い尽くし、杖を手にとると脱兎の如く走り去った。

あとに残るは男二人。

「……どうしたんだあの嬢ちゃん……？」

「……電車に乗り遅れそうだったのでは？」

「……片付けるか」

「……はい。そうですね」

後片付けしながらチラ見していると、三人にまたチビが一人加わり、なにやら相談していたかと思うとチビと女が、逃走を企てた残りの一人に飛び掛り、アニメでよく見る砂埃の闘争の末に元レフェリーのシルエットはイモムシへと成り果てていた。そこにデカイシルエットが飛来し、チビがそいつにイモムシを縛り付けると飛び乗り、デカイシルエットは空へと舞い上がった。

ここまでくれば思い出せずとも分かる。チビ1がルイズ、女がキユルケ、元レフェリーなイモムシが才人、追加のチビ2がタバサ、最後のデカイのが轢き逃げ犯シルフィード。

マルトーさんが選り分けてくれてた残飯をテント内の冷蔵庫に入

れながらさらに見ていると、ルイズとキュルケが会話。ルイズが何かし、俺らの上で軽い衝撃、やがてorz。キュルケが何かし、イモムシが自由落下するが、急に減速し、着陸に成功、キュルケは決めポーズ。ルイズは膝を抱えてシルエツトが完全に　　になる。

…シユールだ。影絵で見ると余りにもシユールだ。

戸締りを確認し、マルトーさんと別れ、俺は外へ。才人たちが目視できるくらいに近づいた所で地響き。そして巨大な影。

影の元を辿ると、「なに、ウル　ラマンでも出てくるの?」と言わんばかりのアホみたいな巨体。ゴーレムだ。

テンパったルイズ、キュルケが才人を見捨てて逃走。って見捨てらんかい。っていうかゴーレムの進行方向才人と俺おるやないかい。

見える風景の全てがアニメ調だったために辛うじて冷静を保ってる俺は、明かりの灯った杖を才人に向け、

「アクシオ　才人来い」

と唱えた。

瞬間、イモムシ才人はミサイルの様に俺に突っ込んできた。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

ので

「プロテゴ　護れ」

『盾の呪文』を発動。杖先から出たバリアーに才人は、交通事故

もかくやという恐るべきスピードで頭から突っ込む。

ドゴッ！！

「アイタアッ！！」

地面に落下し、縛られてる割りに元気にゴロゴロのたうち回る才人。

それを見ながら口が勝手に動く。

「元気だな」

「あ”あ”あ”ア？アスラン？」

「お察しの通り、魔法使いです」

「おい！助けてもらっというナンだけでもうちよつとやりかたってもんがあるだろう！！」

「いやー、月ガ綺麗デスネー」

「見えねえよ！あのでかいのが遮ってるよ！！」

「月ガ迫ッテ来マスネー」

「来てねーって！来てんのはデカブツだけだって！！てか早く逃げよう！！縄切つて早く！！頼むから！！」

「サツキノ才人、イイ音シタネー」

「…まさかアスラン…お前テンパってる？ビビってる？」

「バツカオメー、オレガテンパツテルワケネーシ」

「だ、だよな…？大丈夫だよな？」

「ダイjjッ」

噛んだ。

「……………」

「ア、アスラン…？」

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

「アスラアアアン!!?餅つけ!じゃない落ち着け!!おい誰が尻餅つけたアアアアアアアアアアアア!!」

だっ、どっ、どうなっとなんじゃあれエエエエエエエエエエエエ!!  
なにあれ!!何あのデカさ!!意味わかんねエ!!なにあれ!俺何で忘れてた!?バカじゃねーのアレ!!バカなの死ぬの!?死ぬわポケエ!!!40mだよ!誰か早くハヤタ呼んで来い!!ダンでもいいや!早く!!

「アスラン!瞬間移動!姿なんとか!あれ使え!あれで逃げよう!早く!」

瞬間移動!?あれか『姿くらし』かそうかよし飛ぼうやれ飛ぼうそれ飛ぼういま飛ぼうすぐ飛ぼう!!ソオオオイ!!

回る!

キモい!

狭い!

見えない!

止まる!

うわなんか高い!

ピンク!赤!青!あと月!

あれ…。

まっ…くら…に…。

まっ……………しる……………。

空中。

アスランが才人を『呼び寄せ』してから全く動かないのを、シルフィードの背中に乗って恐々みていたルイズ、キュルケ、タバサ。タバサがシルフィードに救出を命じようと口を開いた刹那

『バチンッ!』

という音とともに、タバサの正面10サントとない所に、突如として二人の人間が現れた。

「きゅいい!？」

突然増した二人分の重みにシルフィードが喚くが、一顧だにせず、少女たちは、現れた二人、平賀才人とアスラン・ド・ヴォルデモートの元を集まる。

「サイトとアスランがバシッて!」

「ダーリン!無事だったのね!ありがとう!流石アスラン!……アスラン?」

キュルケが声をかけるが応答なし。パッと見外傷もないのでどう

したかと思つが、タバサが口を開いた。

「……気絶してる」

シルフィードの背に生暖かいよりやや冷たい空気が発生する。  
やがて、少女たちは口々に声を上げる。

「……かつこ悪」

ルイズ。呆れている。私のバカ犬でも意識はあるのに。

「根性なしねえ……」

キュルケ。少し軽蔑し、見下している。目の色は微熱と正反対だ。

「……」

タバサ。軽く失望している。目には見えずとも。失望している。

そんな空気の中。

「……あのさ、どうでもいいけどこの縄、早く解いてくんね？」

助けられた身分で呆れたりするわけにもいかず、才人はルイズたち  
ちに打診するのであった。

土くれ、現る（後書き）

アスランエ…。

でも普通はこつなるんでしょっね。逃げる行動をとれただけマシと  
言いますか。

結成！土くれ討伐隊！（前書き）

興がのつたか連投。

## 結成！土くれ討伐隊！

『破壊の杖、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』

この一文が発見され、学院内に広まったのは、その犯行の一部始終余すところなく目撃していた少年少女たちの通報によるものである。

学院側は直ちに現場を検証。宝物庫の壁にデカデカと自己主張する大穴と、内部の壁にこれまたデカデカと自己主張する、最近巷を賑わす怪盗メイジ『土くれのフーケ』の犯行声明、さらに問題の宝物『破壊の杖』の紛失などを確認。通報を事実と認識すると、主要教員と目撃者の少年少女、『ゼロ』のルイズ・ド・ラ・ヴァリエールとその『使い魔』平賀才人、『微熱』のキュルケ・フォン・ツェルプストー、『雪風』のタバサ、そして新人使用人メイジのアスラ・ド・ヴォルデモートの五名を招集、緊急会議を開いていた。

その緊急会議であるが、（前回の主人公の為体ほどではないにせよ）残念なことに、紛糾すれども進行はしていなかった。  
こんな感じで。

「土くれのフーケめ！とうとう魔法学院にまで手を出しおって！」

「衛兵はいつたい何をしていたんだね？」

「衛兵などあてにならないらん！所詮は平民ではないか！いてもいなくてもそう変わらないだろうが！！そんなことより当直の貴族は誰だったんだね！」

「ひっ」

「ミセス・シュヴルーズ！当直はあなたではありませんか！？」

「も、申し訳ありません……………」

「泣いたって、秘室は戻ってこないのですぞ！それともあなたは『破壊の杖』を弁償できるのですかな！！」

とまあ、ろくすっぽ対策を考えようとせぜずに話が責任の擦りつけあいになった所で

「これこれ。女性を苛めるものではない」

この場における責任者、学院長のオスマンが現れた。いつもは色欲にランランと輝くその瞳は、いまは賢者のそれとってかわり、事態を見透かす鋭い眼光を放っている。

「しかし！！オールド・オスマン！！ミセス・シュヴルーズは当直なのに、自室で寝ていたのですぞ！責任は彼女にあります！！」

ミセス・シュヴルーズを追及していた教師が、オスマンに訴えた。オスマンはそこで、その心までも見透かす様にじっとその教師を見つめる。

その教師が軽くだじろいだところで、オスマンは重々しく口を開く。

「ミスタ……………なんだっけ？」

「ギトーです！お忘れですか！」

その場にいる皆が内心「だああああっ」とこけたのだが、オスマンは変わらず続ける。

「そうそう。そうじゃった。ギトー君。そんな名前じゃったな。君は怒りっぽくていかん。さて、この中で、まともに当直をしたこと

がある教師は何人おるのじゃ？」

オスマンはそう言うと、辺りを見回す。

教師たち全員が、名乗り出なかった。みんながみんなお互いの顔を見合すだけである。

その結果を見、内心溜息を吐きたい気持ちを抑えながら、オスマンは続ける。

「さて、これが現実じゃ。責任があるなら、我々全員じゃ。この中の誰もがそうじゃ。私も含め、まさかこの魔法学院が賊に襲われるなど、誰もが夢にも思わなかつた。何せ、ここに居るのは、ほとんどがメイジじゃからな。

しかし、賊は大胆にも忍び込み、『破壊の杖』を奪っていきおつた。つまりじゃが……我々は油断していたのじゃよ。責任があるとするのなら、我々全員にあるということじゃ」

オスマンがそう言うと、教師の皆は黙ってしまった。確かにその通りだからだ。

その場が鎮静化したところでオスマンは尋ねる。

「で、犯行の現場を見ていたのは誰じゃね？」

「彼らです」

コルベールが前にでて、後ろに控えていたルイズ、キュルケ、タバサの三人と、そのさらに後ろで恐々と様子を伺う才人、そして皆に背を向け、隅っこに膝を抱えて落ち込んでいるアスランを示した。

「ふむ……、君たちか」

オスマンは、興味深そうに五人を順に見つめ、やがて片頬を引き  
攣らせると、困惑気味に口を開いた。

「えーっと、その、隅っこの彼はどうしたのかね？」

教師数名が「無視してればいいのに……」という顔をしたが、オス  
マンは四人の顔を順繰りに見回す。

するとキュルケが、普段の彼女からは考えられないほどに冷やや  
かな声色で一撃を発した。

「さあ、こそ泥のゴーレムに恐れをなして混乱した末に気を失った  
哀れで腰抜けな殿方のことなどこれっぽっちも存じませんわ」

その辛辣な言い草に、そして声を発しないながらも無言で突き刺  
さる複数の視線に、当の『哀れで腰抜けな殿方』は「カハッ」と小  
さく声を上げ、吐血した。

その様に、アスランをよく思わない者も含めた数名が少し同情し、  
オスマンは額に手を当て、低く呻いたあと、

「君たちが見たことについて、詳しく説明したまえ」

と告げた。

ルイズが前に出て、見たままのことを説明する。

「あの、大きなゴーレムが現れて、ここの壁を壊したんです。肩に  
乗ってた黒いローブを身に纏ったメイジがこの宝物庫の中から何か  
を……… たぶん『破壊の杖』だと思えますけど、盗み出したあと、  
またゴーレムの肩に乗りました。ゴーレムは城壁を超えて歩き出し  
て、最後には崩れ落ちて土になっちゃいました」

「それで？」

「肩に乗っていた黒いローブのメイジは、いなくなっていました」  
「ふむ……」

オスマンはひげを撫でた後、溜め息混じりに言った。

「後を追おうにも、手がかりナシというわけか……」

それからオスマンは、あれ？という感じでコルベールに尋ねた。

「ときに、ミス・ロングビルはどうしたのかね？」

「それがその……、朝から姿が見えませんでしたのであります」

「この非常時に、どこに行ったのじゃ」

「さあ？どこなんでしよう？」

「ふむう……このタイミングで失踪とは……。もしや……」

「もしや……？って、まさか！ミス・ロングビルがフーケだと仰るのですか！？」

「しかし、実際、今この瞬間に行方をくらますとは「勝手に他人を犯人呼ばわりしないで下さい……！」「お、おう？」

噂をすればなんとやら、ちょうどいいタイミングで、そのミス・ロングビルが、少し疲れた様子で現れた。

「ミス・ロングビル！どこに行っていたんですか！大変ですぞ！事件ですぞ！」

興奮した様子でコルベールがまくし立てるが、ロングビルは落ち着き払ってオスマンに告げた。

「申し訳ありません。朝から、急いで調査をしておりましたの」「調査？」

「そうですね。今朝方、起きたら大騒ぎじゃありませんか。そして、宝物庫はこのとおり。すぐに壁のサインを見つけ、これが国中を騒がせている大怪盗の仕業と知り、すぐに調査をいたしました」  
「仕事が早い。ミス・ロングビル」

そののやりとりを聞き、コルベールが慌てた様子で尋ねる。

「結果は!？」

「はい。フーケの居所がわかりました」

「な、なんですと!？」

フーケ発見の報を聞き、俄かに色めきだつ一同。しかし、オスマンは一人冷静に問いただす。

「誰に聞いたんじゃね?ミス・ロングビル」

「はい。近所の農民に聞き込んだところ、近くの森の廃屋に入っていた黒いローブを着た男を見たそうです。おそらく、彼はフーケで、廃屋はフーケの隠れ家ではないかと」

それを聞いてルイズがまたあわてた様子で叫ぶ。

「黒いローブ?それはフーケです!間違いありません!」

「そこは近いのかね?」

オスマンは、目を鋭くして、ミス・ロングビルに尋ねる。

「はい。徒歩で半日。馬では四時間といったところです」

「すぐに王室に報告しましょう!王室衛士隊に頼んで、兵隊を差し向けてもらわなくては!」

「コルベールが叫ぶと、オスマンは首を振って、迫力満点に怒鳴った。」

「ばかもん！！王室なんぞに知らせている間にフーケは逃げてしまっわ！身にかかる火の粉は己で払うものじゃ！魔法学院の宝が盗まれたのなら、これは魔法学院の問題じゃ！それが貴族というものじゃ！」

貴族、と自分たちが一番に思うものを持ち出されると沈黙するしかない一同。

オスマンは咳払いすると、杖を掲げて言った。

「では、搜索隊を編成する。我こそはと思う者は、杖を掲げよ！」

……………。

だが、誰も杖を掲げず、教師たちは困ったように、顔を見合わせている。

オスマンもこの事態は流石に予想していなかった様で、かなり失望した様子で急かす。

「なんじゃなんじゃ情け無いのう、フーケから盗み返したともなれば愉快痛快な話の立役者として名を上げられるというのに。賊を排し、メイジとはかくあるべきか示そうとする者はおらんのか！」

オスマンが叱咤してもなにも変わらない。誰の杖も……否、一本だけ、自身の誇りにかけ、杖を掲げた者がいる。その人物とは…

「わたし、行きます！」

その人物、人呼んで『ゼロ』のルイズの言葉に教師たちが一斉に

驚き、喚きだした。

「ミス・ヴァリエール！何を言っているのです！あなたは生徒ではありませんか！ここは教師に任せて……………」  
「誰も掲げないじゃないですか！！！」

ルイズは唇を軽くへの字に曲げて、目の前の情けない大人たちにそう言った。その言葉にうっと教師陣は黙る。

才人は口をぽかんとあけて、そんなルイズを見つめていた。  
そして…

「私も行きますわ」

ルイズが杖を掲げているのを見て、キュルケも挑戦的な笑みを浮かべて杖を掲げた。

「またも教師たちは驚いた。」

「ミス・ツエルプストー！君も生徒じゃないか！」

「ヴァリエールが自ら名乗り出たここで杖を掲げないとあっては、ツエルプストー末代までの恥になりますわ」

そう言い切ると、キュルケはルイズに挑発的に笑いかけ、ルイズはむっとした表情に。

そして、その流れの中、タバサもゆっくりとその大きな杖を掲げ、教師たちの度肝を抜いた。

「タバサ。あんたはいいのよ。関係ないんだから」

キュルケがそう言うと、タバサが短く答える。

「心配」

キュルケは感激した様子でタバサに抱きつき、ルイズはタバサにお礼を言った。

「ありがとう……。タバサ」

「いい」

タバサは相も変わらず、無表情である。

そして、他に杖を挙げるものはいないか…と皆に目を向けるオスマンは、情けない大人たちに溜息を吐きながら、端っこで小さく杖が上がったのに少し驚いた。

「君も行くのかね？アスラン・ド・ヴォルデモート」

その場にいる皆が一齐に端っこに小さくなっているアスランを注視する。

その視線を受けたアスランはゆっくりと立ち上がり、振り向くと、

「目撃者たちの内、俺だけ行かないというのも空気読めてない気がして」

と発言。

すると、やはり侮蔑的な表情でキュルケが

「あら、あなたは気を失ってらしたんですから目撃者じゃないんじゃないかって？……いいんですよ？あなたはご自分の布団で籠ってらっしゃれば？」

慇懃無礼をみごとに表現した、非常に腹の立つ発言である。

対しアスランは挑戦的にニヤリと笑い、

「残念ながら俺にも意地があるんでね。気絶した上リベンジの機会を自ら逃しちゃダメダメだ」

と返す。

キュルケはその言葉にあっそ、と淡白に返す。

「そうか。では、頼むとしようか」

オスマンはそのやりとりを見つめた後、周囲を見回し、大人たちに期待できないことを悟るとそう言った。

これには、教師たちから反対の声があがるが……。

「彼女たちは、敵を見ている。その上、ミス・タバサは若くしてシユヴァリエの称号を持つ騎士だと聞いているが？」

オスマンがそう言うと、教師たちはみんながみんな驚いて、タバサを見つめた。

「本当なの？タバサ」

その情報にキュルケやルイズも驚いた。タバサはノーリアクション。アスランもノーリアクション。

「しゅばりえ??」

才人はイマイチよくわかっていない。

『シユヴァリエ』は、様々な業績に対して与えられる実力の称号である。称号の中では一番地位の低いもののだが、それは金や貴

族だからといった理由をつくらなくても手に入れられぬ純粋な称号だ。

オスマンはそれからキュルケを見つめた。

「ミス・ツエルプストーは、ゲルマニアの優秀な軍人を数多く排出した家系の出で、彼女の炎の魔法も、かなり強力と聞いているが？」

キュルケは得意げに、髪をかきあげる。

オスマンはそれから、ルイズを見つめた。

暫しの沈黙。

やがてこほん、と咳をするオスマン。

それから、オスマンはルイズから目を逸らして言った。

「……ミス・ヴァリエールは数々の優秀なメイジを輩出したヴァリエール公爵家の息女で、その、うむ、将来有望なメイジと聞いているが？しかもその使い魔は平民ながらあのグラモン元帥の息子である、ギーシュ・ド・グラモンと決闘して勝ったという噂だが」

オスマンは思った。平賀才人が、本当に伝説の『ガンダールヴ』なら……頼りになるであろう。

一方のルイズはオスマンのその言葉に苦虫を百匹くらい噛みつぶした表情になる。ルイズには才人以外に戦える要素がないのだ。

「そうですぞ！なにせ、彼らはガンダー……」

オスマンは慌てて興奮したコルベールの口を押さえた。

「むぐ！いいえ、なんでもありません！はい！」

またこほん、と咳払いをし、オスマンはアスランを見る。  
知らぬふりをすれどもアスランとて一男児、己がどう言われるか  
興味がある。

「最後に、ミス・ヴォルデモートは知つての通り使用人ではある  
が、独自の魔法を行使し、その力はトライアングルメイジを凌駕す  
る。ミス・タバサをも下したのじゃったな？」

そのミス・タバサが『シユヴァリエ』だと今し方知つたばかりの  
一同は、それを上回つたというアスランの實力に驚き、タバサは今  
にも舌打ちしそうな、アスランは満足気な顔をする。

「彼女らに勝てるという者がいるならば、前に一步出たまえ」

オスマンは威厳のある声で言った。だが、誰もが俯いて何も言わ  
なくなる。

誰も一歩前には出ず、オスマンは改めて失望したあと、無条件で  
才人も含む五人に向き直つた。

「魔法学院は、諸君らの努力と高貴なる義務に期待する！！」

ルイズとキュルケとタバサとアスランは直立し、杖を掲げて唱和  
する。

『杖にかけて！！！！』

そして、女子たちはスカートの端を摘み、優雅に一礼。アスラン  
は杖を持たない手を胸にあて、45°の最敬礼をやはり優雅に。才  
人はキョロキョロした末、ぎこちなくもアスランに倣う。

アスランと才人が小声で「お前その剣掲げて剣にかけてっ、とか

やればよかつたのに」「いやそんなアドリブ思いつかねえよ。って  
いうかアスラン大丈夫か？立候補して」「安心しろ、今度は勝つる。  
お前が頑張れば」「俺かよ無理だよっ」「なんてやりとりをするのは  
聞こえず、オスマンはミス・ロングビルに声をかける。

「では馬車を用意するから、それで行くが良いじゃろう。ミス・ロ  
ングビル、道中の案内は任せたぞい」

「はい、かしこまりましたわ」

了解の礼をしたとき、ミス・ロングビルがニヤリと、いかにも悪  
役顔にほくそ笑んだのには、誰も気が付かなかった

**結成！土くれ討伐隊！（後書き）**

ブラッディ的には20部で一巻分終わる予定。

ただし、フーケを逮捕・投獄するか、原作知識を鑑みて逃がすか、留まらせるか考え中。

どうでしょう？

開戦！一巻ラストバトル！（前書き）

やっぱりブラッディは三人称の方が好きらしい。  
家に三人称の小説しかないからだな。

## 開戦！一巻ラストバトル！

しつかり舗装がされていない砂利道を一台の馬車が走っている。

馬車に乗っているのは、少年が三人に少女が三人と、馬車の手綱を握る大人が一人。先ほど結成され、現在戦場へと向かう勇敢なる義勇の士たち、『フーケ討伐隊』である。

さて、このフーケ討伐隊に、一人、見慣れぬ少年が混ざっているのだが、諸君に紹介しておこう。彼の名は

「グラモン伯爵家が四男！トリスティンの赤い薔薇！学院一のモテ男とはこの僕、ギーシュ・ド・グラモン！人呼んで『青銅』のギーシュのことさ！」

「うるせえよ聞いてねーよそして長げーよ。ってかマジでなんでお前がいるんだよ。あとそりゃ誰に対する自己紹介だよみんな知ってるよ。所々の誇張もツツコむか？」

才人の鋭い連続ツツコミである。

ギーシュがここにいる理由は至極単純、馬車に忍び込んでいたからである。アスランの魔法に見つかったあとは、アスランをジャンケンで負かして手綱を握るミス・ロングビルの隣に押しやり、こうして堂々と居座っては皆の頭を悩ませている。

やがて、三時間ほどした頃。ふとした話の流れでキュルケがミス・ロングビルに声をかけた。

「ミス・ロングビル、手綱なんて付き人にやらせればいいじゃないですか」

キュルケの発言は貴族としては当然のそれだが、しかしロングビルはちゃんわりと微笑んだ。

「いえ、私は貴族の名をなくしたものですから」

すると、キュルケは驚いた表情になる。

「え？だってあなたはオールド・オスマンの秘書なのでしょ？」

「あの人はそういうことに拘りませんから」

ミス・ロングビルの表情は、本当にオスマンを尊敬していると言わんばかりのものだったが、その短い返答や声色には、この話は打ち切りたいと言う意思が見え隠れしている。

しかしそれを察せず、キュルケは話を掘り下げようとする。

「差し支えなかったら、事情を教えてください。無粋な女はドラゴンに轢かれて死ぬといい」

が、キュルケを遮る声。その言い草にキュルケはカチンときて、言い返した。

「あーら、私が出会った中で最も情けない殿方が何を仰るかと思えば。大きいのがいなければ強気ですのねえ？」

ビキツとアスランの額に青筋が浮かびあがる。

「おやおや粋がつてるくせに無粋なこのお方は他人を貶すときには燃え尽きた暖炉の残熱をたどってまだ温かいものを探すように過去をほじくり返さねばならぬらしい。ああなるほど、故に『微熱』！ 感服したよ『微熱』殿」

ギリリとキュルケの瞳が苛烈な輝きを放つ。

「あらまあ、私の『微熱』は全ての殿方を焦がす『情熱』ですことよ？ああ、失礼、あなたは焦げやしないでしょうねえ、水をかけた薪の様な情弱なお心をお持ちの貴方は。ごめんあそばせ」

ブチっ、とアスランの中で何かがキレた。

「いいねえ、たかだか『微熱』如きに火をつけられるくらいなら火なんざいらねえや。『微熱』なんぞで火が付くのはさぞかし薄っすい紙っぺらの様な安い御心なんだろうぜ」

ブチっ、とキュルケの中でも何かがキレた。

「喧嘩売ってるんなら買っわよこの腰抜け男」

「ああ？テメエ如きで俺の相手が務まるかこのアバズレ女ア」

「なんですってこのチキン野郎！」

「文句あんのかこの糞ビッチが！」

いまや両者は互いの鼻を触れ合わせんばかりの至近距離から杖を向けあい、齒軋りしながら互いに相手を射殺さんばかりの眼力でメソチ切りあっている。

その剣幕にタバサやミス・ロングビルをも含めた皆がドン引きし、睨み合う両者を恐々交互に見つめる。

心なしかキュルケの目から火炎放射が、アスランの目から赤やら緑やら黄色やらの閃光が迸り、両者の視線の交錯する地点で小規模なスパークが絶え間なく発生している様にも見える。

そして、両者がいよいよ呪文や詠唱を唱えんと口を開いた瞬間、

「さ、この先は小道になるので馬車では入れそうもありません。徒歩で進みますから、皆馬車から降りてくださいまし。」

ミス・ロングビルの声がかかる。

数瞬睨み合い続けた両者はやがて互いに汚い捨てゼリフを吐き、馬車から降りた。

馬車を巨大ゴーレムが上から物理的に押さえつけているかの様な重苦しい空気が表面上霧散し、皆が安堵の息を吐きながら馬車から降りる。

その際のギーシュの眩きが、これだ。

「僕が知らない間に何があったんだ……」

鬱蒼とした、一種不気味ですらある山道を登ること数十分。

一行は、山中の開けた場所の真ん中に建つ、朽ちかけた一軒の小屋を発見した。

身を伏せ、様子を伺う一行。

「私が聞いた情報から察するに、あの建物がフーケの隠れ家なのでしょっね」

ミス・ロングビルのその言葉に各自がそれぞれ感想を述べてゆく。

「天下の大怪盗が、あんなあばら家にねえ……」

「ああいう朽ちかけた建物のほうが身を隠すには好都合なのだろうね」

「複数の拠点を用意しておいて、そこを転々としているといったと

「ころかしら」

「即席の荒屋って気もしないでもないな」

「まあ、泥棒の隠れ家としちゃあ、ある意味らしいといえらしいよな」

「……」

タバサが「作戦会議」と呟いて一歩下がり、皆がそれに続く。が、アスランだけはそこから動かず、じっと小屋を見ている。

「おい、アスラン」

小声で才人が呼ぶが、アスランは無言で杖を取り出し、小屋に向けた。

そして一言。

「アクシオ 『破壊の杖』 来い」

そして、ヒョイツと杖を一振り。

それを見た、ミス・ロングビル以外の五人が「あ」と間抜けな声を上げる。

『呼び寄せ』は、ル・モス『光』や『浮遊』ウイングガード・ダイヤモンド・レヴィオーサなどと同じく、日常的にアスランが使用する魔法なので、ミス・ロングビル以外全員、その効果を知っているのである。

そして、彼らの知る効果通り、小屋の扉を大音響と共にブチ破つて、『破壊の杖』が入っていると思われる細長い箱がすっ飛んで来、アスランの両手に収まった。

沈黙する一行。初めて見たミス・ロングビルなどは、間抜けにもポカんと口を開けて呆然としている。

そんな一行にアスランは言う。

「…解決でおk?」

「解決でおk?」

全員黙っちゃった。いやまあ、俺も吃驚してるけどね。ロングビルの吃驚顔がとれるとは思わなかったによ。

やがて、皆が「もういいやそれで」みたいな顔になっていく中、タバサが発言。

「畏の可能性」

「…と、言つと?」

ギーシュが聞き返すと、タバサはいつも通りの無表情で驚きの長文を喋り出した。

「偽物の可能性がある。『水』のメイジを雇い、幻惑系の魔法をかければ騙すことが可能」

…ふむ、なるほど。

タバサが箱に杖を向ける。

「『ディテクト・マジック』」

……。

「異常なし」

「ないんかい」

「じゃあホンモノ？」

「とりあえず中を確認しないかい？それとも二、三回とんぼ返りするかもう少し見ているかい？」

ギーシュの発言でルイズが俺から箱をひったくり、地面に置く。そして、箱の蓋に手をかける。

「爆発物の可能性もある」

……ロケランだから爆発物だよな、ある意味。

タバサの静かな警告に、ルイズがマツハで手を引つ込めた。

その場をまたも沈黙が支配する。

正直このとき、原作知識をもち、これがホンモノだと言い切れる俺が、進んで蓋を開けていれば良かった。でなければあんなことにはならなかったハズなのだ

「では、私が」

ロングビルが立候補。

皆がおおっ、流石っ、みたいな顔になる。

俺も一瞬そう思った。だが、彼女が箱を手繰り寄せ、蓋を開けた時、気が付いた。

ミス・ロングビルって……フーケじゃね？

箱を開けたままブツブツと何事か呟いているミス・ロングビルにルイズが問う。

「どうです？ミス・ロングビル。『破壊の杖』ですか？」

「ええ、間違いなく、『破壊の杖』ですわ」

彼女の答えに、皆が安堵する。

「では、学院に戻りましょう」

ギーシュの発言に、ミス・ロングビルはこう答えた。

「いいえ、学院には戻れませんわ」

「へっ？」

「何故に？」

皆が疑問符を頭に浮かべるが、タバサだけは気づいた様で、サツと杖を構えた。

しかし、タバサが詠唱するより先に、俺が呪文を唱えるより先に、ミス・ロングビルは懐から杖を取り出し、

「ゴーレム！！」

と叫び一振り。

すると、周囲の地面がある一点に ミス・ロングビルの真下に

吸い込まれる様に動きだし、全員がバランスを崩した。

そして、漸く揺れが収まり、皆が立ち上がると、そこはクレーターのように変形していた。

状況を読み込めずにいる皆の目の前に、ミス・ロングビルのメガネが、カシャンと落ちて来た。

全員が見上げると…

「戻れませんか。ええ、そうですね。何故なら…」

そこにいたのは、馬鹿でかいゴーレムの肩に乗り、こちらを見下ろすミス・ロングビル

「あんたたちとミス・ロングビルは…ここで死ぬんだからねエツ！」

否。彼女は

「まさか…ミス・ロングビル…あなたは…！」

「そうさ！大盗賊『土くれ』のフーケとは、私のことさ…！」

そして、巨体に相対する六人の少年少女の中に、一人。他の五人とは比べ物にならないほどに焦っている少年。

彼は知っていた。本来なら、才人が『破壊の杖』<sup>ガンダールウ</sup>を使い、戦いに勝利することを。

故に焦っていた。何故なら。

土くれのフーケが抱えていたからである。

『破壊の杖』の入った、その箱を。

切り札盗られたああああああああああああああああああああああ  
ああ!!!

V S フーケ・前編〜原作ブレイクも大概にしるよ〜（前書き）

皆さん、御無沙汰してます。ブラッディです。例によって間が空いてしまいました。

二十部で一巻分終わりとか無理だった。

これから本文を読んでいく皆様にこの言葉を。

伏線なんか無え！

V S フーケ・前編／原作ブレイクも大概にしるよ！

「大盗賊『土くれ』のフーケとは、私のことさー!!」

フーケはそう宣言すると、『破壊の杖』をゴーレムの肩に置き、杖をひゅつと振る。すると、『破壊の杖』はゴーレムの体内に取り込まれる様にぬぶぬぶと沈んでいき、やがて見えなくなった。

…やばいね、コレ。

『破壊の杖』盗られちゃってんね、コレ。

しかも結構近いね、ゴーレム。

「ミス・ロングビル！いや『土くれ』のフーケ！なんでこんなことを！」

ルイズの叫び声。

それに対し、フーケは叫び返す。

「なんでって金が必要からに決まってるだろう！ジジイのセクハラなんかに耐えながらやっと手に入れたお宝なのに使い方がわからなくてね！フーケの居場所が分かり、そこで危機に陥れば『伝説の使い魔』がこいつの使い方を教えてくれると思っただけど、この坊やが魔法でことを解決することにしようとしてくれたから台無しだよ！ここで解決ってことにされちゃ困るからね！あんたらには、悪いけど死んでもらうよー！」

お前の所為じゃねえか！と全力で目を剥いた全員の視線がこちらを向くが、誰かがそれを声に出す前に、ゴーレムがそのデカい拳をブンツ、と振り上げる。明らかに叩き潰す気だ。

「散開」というタバサの声と共に皆が散ったが、俺だけ足がサッ

パリ動かかん。

でも大丈夫。俺、昨日よりは落ち着いてる。いやまあ、足に関してはいつそ感覚がないし、心臓もバクバクなんだけど、とりあえず、まともに思考できるくらいには脳みそは動く。

腕も動くので、杖をゴーレムに向ける。

「アレスト・モメンタム 静止せよ。イモービラス 動くな。ペトリフィカス・トタルス 石になれ」

あつれ声小つさ！タバサ級に小つさいぜ今の声！しかも抑揚の無さ！完全に棒読みだよこれ！おまけに掠れてるよおい！どんだけヘタレか俺！

それはともかく、今唱えたのは全て相手を止める魔法。

「落ちる」などの『受動的な動き』への『アレスト・モメンタム静止呪文』

「落とす」などの『能動的な動き』への『イモービラス停止呪文』

そして、文字通り『ペトリフィカス・トタルス金縛りの呪い』。

今回の場合は”降って来る”腕に対する『アレスト・モメンタム静止』と、”振り下ろす”

『イモービラス停止』、そしてゴーレムそのものに対する

『ペトリフィカス・トタルス金縛り』

の重ねかけ。動きを止める魔法を三つも重ねれば、流石

にゴーレムも止まった。

「なっ！？」とフーケが驚愕する。

俺は杖を両手持ちにし、集中して魔法を維持しつつ、皆に叫ぶ。

「今！術者を！！」

言葉少なの上に完全に裏返った俺の声にキュルケとタバサがまず反応し、フーケに魔法を発動する！

「『ファイアー・ボール』!!」  
「『エア・ハンマー』」

が。

「おつと危ない」

フーケが杖を振ると、ゴーレムの肩の一部が紅く発光し、ドーム状に変形してフーケを包み、直後に到来した二つの魔法を防ぐ。『風』系統・空気の塊をぶち込む『エア・ハンマー』と、『火』系統・火炎球を放つ『ファイアー・ボール』が合わさり、爆炎が発生するが、ドーム状の壁に隠れたフーケは多少暑くなくても無傷だろう。

そして今度はゴーレムの全身が紅い閃光を放ちながら皮がハゲるように土がバラけ、乱雑なラグビーボール型に変形する！

「お返しだよ！喰らいなつ！『ブレット』!!」

フーケの言葉と共に土塊が周囲に無作為に飛来する！

くっそ、ゴーレムの一部でもあんな細々したのまでは魔法の効果がいかなえ!!

っていや待て待て待て!!

『ゼロの使い魔』って魔法を複数同時発動とか出来ない世界観設定じゃなかったけ!? ゴーレム維持したままああいうこと出来るのこの世界!? そういうハルケギニアなのここ!? いや、しかしゴーレムの一部をバラして作ってるってことは、まさかゴーレムの変形とかバラしたのを飛ばすとかそういうのは広義的には『ゴーレム操作』の内だからやれるわけか!?

なんにせよ、直撃すればコトなサイズの土の弾丸を、皆は必死に避けたり迎撃したりしているって俺の方にも来るよなそりゃあ! 防

御をっ

ズドドドドドドドドドドドドドドッ……

……マジで死ぬかと思った。ギリギリで巨壁を錬金術で錬成し、なんとか防いだ。

だが、それで俺の集中力が切れたため、俺の魔法から解き放たれ再起動したゴーレムはまたも拳を降り下ろしてきた！

だがまだだ！

ゴーレムの足に杖を向け、魔法をかける。

「タラントアレグラ！ 踊れ！」

刹那、突如としてゴーレムの足が情熱的なタップダンスを踊りだした。その急な動きにゴーレムがバランスを崩したところで！

「ドレンソリビオ！ 弾け！」

俺を叩き潰すハズの拳に魔法をかけ、駄目押しで軌道を外に反らせば、目論見通り拳は俺を逸れていった。

『踊らせ呪文』の効果はすぐに切れたが、『ワルキューレ』が二体駆けつけ、俺の脇を抱えて皆のいる所に運んでくれた。

そこでは一同が集まり、なにやら といっても想定されるお題は一つしかないが 話し合っていた。  
とりあえず礼を言うか。

「サンキュー、ワルキューレ」  
「いや僕に言ってくれよ!!」

その声に反応し、皆がこちらを向く。

「あらアスラン。本当に腰が抜けてた様だけど、なんとか生き残ったのね」

「なんとかね」

「『姿くらし』ならもつと安全に逃げられた」

「…もつと早く言えよタバサ。いま気付いたよこの野郎」

「昨日ほどじゃないけど、テンパってるんだな、やつぱり」

「うるせーよ。才人みたくラノベ的なへタレじゃなくて悪かったな」

「おい誰がへタレだ!？」

「お前だよお前っ」

「作戦会議」

タバサの発言を受け、今一度皆でゴーレムを見る。  
それにしてもでっけえなあ。

「さて、どうする?あのゴーレム、『破壊の杖』が体内にある以上、下手に攻撃できないよ?」

「『破壊の杖』さえ奪われなければねえ」

「悪うござんしたよ」

「『アクシオ』は試してみたい?」

「ああ、そうだな。アクシオ 『破壊の杖』来い」

……。

「ダメぽ」

「ゴーレムの体内から出てこれないのか」

「『破壊の杖』の周り、そうとう固めてんだろうな。金具でも『呼び寄せ』の引力には勝てないんだろ？」

「ああ。だがまあ、『呼び寄せ』出来ないなら……」

「方法は大きく二つ」

そう言っただけでタバサが語る大まかな作戦方針は、

1. フークを直接討つ。捕獲はほぼ望めないが、シルフィードも使えば比較的安全。懸念事項はゴーレム崩壊による『ブツ』への影響。
2. 『破壊の杖』を奪い返す。1以上に危険、しかしブツを奪い返すことさえ出来ればゴーレム破壊もフーク捕獲も夢じゃ無い。奪い返した状況から1にシフトする手もある。

現役シュヴァリエが言い出すと、皆黙って聞く。

「要検討。ただし早めに」

ふむ、と皆考え込む。

「任務の内容は『破壊の杖』の奪還だから、任務の完遂を目指すなら、2つてことになるが……」

「でも『破壊の杖』には『固定化』がかかってるんだから1でも問題ない様な気がするけど……」

「いや、あのゴーレムに使われてる土の総重量と『破壊の杖』の位置よっては……。だろう？」

「まあ、学院の壁だってルイズの魔法でヒビ入ってたし……」

「要するに『破壊の杖』の耐久性如何」

「壊れたらアスランの魔法で直せばよくないか？」

「『破壊の杖』がマジックアイテムの類なら、形だけしか直せない

可能性があるからダメだな」

実際、このハルケギニアにおける『破壊の杖』がロケランじゃない可能性は無きにしも非ず。考慮するに値するだろう。

「…ふーん」

「じゃあ、アスランがゴーレムの動きを止めた魔法でゴーレムが崩れるのを防ぎつつ、僕たちでフーケを倒して、それから探すとか…」  
「探すのはどうやるの？」

「僕の使い魔のジャイアントモル・『ヴェルダンデ』を使えばいいやー」

「…ってギーシュが言ってるけど、どう？アスラン」

「落ちてくるゴーレムの腕、ならともかく、落ちてくるゴーレム一個分の土を丸ごと、は流石になあ…。ダンブルドアくらいになればともかく…。固めていいなら考えようもあるが…あとで掘る、となると…」

「固めたあとに転がして…」

「……………うーん……………」

「なにやってんだい！！のんびり話し合いさせるわけじゃないじゃないか！…！」

きゃー、ゴーレムが襲いかかってきたー。

きゃー、青いドラゴンも襲いかか…いや、助けに来ただけか。

というわけで現在、シルフィードの背中の上。時々繰り出されるゴーレムの拳を避けつつ、牽制するように旋回する。シルフィードマジック。

「さて。改めて、どうする？」

ゴーレムの肩にいるフーケもいい加減辛そうな顔をして…ない…？  
？それどころか不敵な笑みを浮かべて…。うーむ、思ったより時間が経ってないのか…あるいはタフなのか？…ともすれば人殺しすら横行する稼業だ。その精神力が多少常軌を逸して強くてもなんら不自然はないか。

「なあ、いつそのことこのままフーケの精神力が尽きるのを待つのも手じゃないか？」

「いやよそんなのカツコ悪い」

「シルフィが保たない」

「…アスランには確か魔法を止める魔法があつただろう。フィニなんとかつてやつ。あれならどうだい？」

「『呪文フィニート・インカンターテムよ終われ』のことか？仮にゴーレムに効いたとしても、ブツがマジックアイテムならそっちにまで効果が及ぶ可能性があるからダメだな」

「…つてことは、やつぱり『破壊の杖』を掘り出さなきゃダメってコトか」

「だなあ」

しかし冷静に考えてみると、突き詰めればバカデカイ土人形なだけなのに『呼び寄せアクシオ』を無効化とか、あのゴーレムは一体どうなつてんだ？

単純に『破壊の杖』の周りを固めてるだけとしたら、それはもう、雁字搦めに固めてるハズだが、それにしてもゴーレムの動きに不自然な点は見られない。さつきも『踊らせ呪文タラントアレグラ』でかなりバタついたが、そのバタついた動きにも不自然は無かった。ここまででゴーレムが動かしてないのは頭だが、仮にそこに固めてあるなら『アクシオ』の引力で頭ごとすっ飛んできそうなものだ。よって頭もほぼないと考え…いやいや、『アクシオ』の引力に負けて固めた部分ごとすっ飛んでくるってんならどこに隠そうと同じなような…なに、ま

さかレジストでもしてんの？でもどうやって？このハルケギニアの『破壊の杖』がそういう代物ってことはあるまい。さっき『呼び寄せ』できてたから。じゃあ

「ねえ」

「ん？」

「どうかした？ルイズ」

そういえばいたな、メインヒロイン。今の今まで完全に空気だったわ。

「いや…もしかしたら見間違いかもしれないんだけど…あのゴーレムが変形したりする時、なんかこう…変に光らなかつた？」

「はあ？」

「いや、だから…キュルケとタバサが魔法で攻撃した時とか、ゴーレムが変形したら大概光るけど…こう、普通はピカッて感じなのにあのゴーレムはピカピカピカアッて感じで…」

「いやわっかんないわよそれじゃあ」

「なんでわかんないのよ！こう…ピカピカピカアッて！」

「いつまで蠅みたいにブンブンやってんだい！『ブレット』！」

フーケがデカイ声でそう言うと同時にゴーレムの右腕が紅く閃光を発しながらバラけ、直径5cmくらいの球状に固め、こちらに向かって斉射した！その数実に…い、いっぱい！弾幕厚いぞ！何してくれてんの！

「くっくっげっ！」「くっく」

「っ、シルフィ、回避」

『エア・ストーム』」

タバサの呼び出した竜巻が何割か吹っ飛ばし、シルフィードがギリギリで土塊を躲す。しかし進行方向に一際デカイのが…。

「『錬金』!」

瞬間、土塊が爆散し、俺たちは土をひっ被り、礫をポコポコくらいながらもフーケの真横を擦り抜け、ほぼノーダメージである弾幕を切り抜けた。

「み、見たか私の魔法! 『ゼロ』だって使いりゃいいじゃない! 私だって立派なメイジなのよ!」

「開き直りやがった! 最高だルイズ!」

「まさかあんたの魔法が役に立つなんてねっ」

そんな会話が聞こえるが、しかし。俺はフーケだけを見ていた。

明らかに不自然に『呼び寄せ』が効いていない。

紅い閃光を放ちながらの異なる魔法の同時使用。

あんだけ暴れてまだまだ余裕気。

そして、横を擦り抜けるときに見えた杖腕。その指にあった、血の様に紅い石の埋め込まれた指輪。

まさか、あんなものが、この世界にあるのか…?

VSフリーケ・前編〜原作ブレイクも大概にしるよ〜（後書き）

分かった人はタネが分かったかな…？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8332m/>

---

ゼロ魔 主無き使い魔は魔法使いで錬金術師

2011年11月5日12時40分発行